

筑波大学博士(言語学)学位請求論文

現代日本語の自動詞文と他動詞文

—事象構造の分析による再整理—

劉 劍

2013 年度

目次

第一章 序章.....	1
1. はじめに.....	1
1.1. 従来の自他対応の定義および問題点.....	2
1.1.1. 従来の自他対応の定義.....	2
1.1.2. 問題点.....	3
1.2. 非対格動詞と他動詞の自他交替および問題点.....	10
1.2.1. 非対格動詞と他動詞の自他交替.....	10
1.2.2. 問題点.....	12
1.3. 本論文の解決案.....	16
1.3.1. 意味からの考察の必要性和[cause]という手がかり.....	16
1.3.2. [-cause]の関係.....	18
2. 本論文の目的と意義.....	26
3. 本論文の構成.....	26
第二章 先行研究.....	30
1. はじめに.....	30
2. 形態中心の日本語の自他に関する研究.....	30
2.1. 本居春庭 (1828)	30
2.2. 大槻文彦 (1897)	34
2.3. 松下大三郎 (1923-1924)	34
2.4. 佐久間鼎 (1936) ・西尾寅弥 (1954)	36
2.5. 奥津敬一郎 (1967)	38
2.6. 早津恵美子 (1989) ・佐藤琢三 (1994a)	40
3. 意味中心の自他交替に関する研究.....	43
第三章 Causal Relationship.....	47
1. Causal Chain.....	49
1.1. Croft (1990, 1991)	49
1.2. Causal Chain というアプローチを取り上げる理由	53
2. その他の先行研究.....	59

2. 1. Langacker (1990, 1999)	59
2. 2. Jackendoff (1990)	59
2. 3. 田川 (2002, 2004)	61
2. 3. 1. 田川 (2002, 2004) のまとめ.....	61
2. 3. 2. 田川 (2002, 2004) の再分析.....	63
3. Causal Relation に関するさらなる記述.....	64
3. 1. 下位事象間の相関関係.....	64
3. 2. 交替している自動詞の意味特徴.....	65
3. 3. まとめ.....	67
4. 実例の動向.....	68
4. 1. 観察の手順.....	68
4. 1. 1. 動詞リスト.....	68
4. 1. 2. BCCWJ における動詞の実例	70
4. 1. 3. [±cause] の判断について.....	70
4. 2. 分析.....	71
第四章 他動詞の面からみた[-cause] の関係 I.....	76
1. 現象.....	76
1. 1. 先行研究.....	76
1. 1. 1. 佐藤 (1994b, 1997) の概観.....	76
1. 1. 2. 佐藤 (1994b, 1997) の問題点.....	79
1. 2. 他言語における類似現象——英語の「have」構文.....	82
2. Causal Chain の観点からの分析.....	83
2. 1. 単純事象レベル.....	83
2. 2. 複雑事象レベル.....	85
2. 3. 複雑事象を表す他動詞文における主体の意味役割.....	88
3. まとめ.....	89
第五章 他動詞の面からみた[-cause] の関係 II.....	91
1. 現象.....	91
1. 1. 先行研究.....	91
1. 1. 1. 天野 (1987) の概観.....	91

1. 1. 2. 天野 (1987) の問題点.....	95
1. 2. さらなる記述.....	98
2. Causal Chain の観点からの分析.....	99
2. 1. 単純事象レベル.....	99
2. 2. 複雑事象レベル.....	100
2. 3. 複雑事象を表す他動詞文の主体の意味役割.....	102
2. 3. 1. 所有者説.....	103
2. 3. 2. 消極的な動作主説.....	104
2. 3. 3. 非影響者説.....	104
2. 3. 4. [lose]説.....	107
3. まとめ.....	109
第六章 他動詞の意味的構造の全体像.....	110
1. 「介在性の表現」と「状態変化主体の他動詞文」との共通点.....	110
2. 複雑事象の成立条件.....	113
2. 1. 「介在性の表現」と「状態変化主体の他動詞文」.....	113
2. 2. 「have」構文.....	114
2. 3. 本論文の主張.....	115
3. 他動詞の意味的構造の全体像.....	118
4. 他動詞の意味的構造の全体像の再整理.....	127
4. 1. 再整理.....	127
4. 2. 自動詞へのあてはめ.....	130
第七章 自動詞の面からみた[-cause]の関係.....	133
1. はじめに.....	133
2. 先行研究および再分析.....	136
2. 1. 影山 (1996) の「脱使役化」.....	136
2. 2. 先行研究の再分析.....	140
3. 本論文の枠組みからの検討.....	144
第八章 アスペクト形式からの仮説検証.....	151
1. はじめに.....	151
2. 実例の動向.....	152

2.1. 「インテルはいつてる」における「入る」	152
2.1.1. 観察	154
2.1.2. 分析	155
2.2. 「植わる」、「建つ」	158
2.2.1. 「植わる」の実例の動向	158
2.2.2. 「建つ」の実例の動向	160
2.3. まとめ	161
3. 「+単一事象」自動詞との違い	162
3.1. タ形とテイル形の比率	162
3.2. プロセス副詞との共起	163
4. 終わりに	165
第九章 終章	166
1. 本論文の結論	166
2. 今後の課題	173
参考文献	174
各章と既発表論文との関係	182

第一章 序章

1. はじめに

日本語には、同一の語根のもとに、さまざまな語尾変化が付いて、動詞が形成されるシステムが存在する。このような同一の語根のもとに形成された自動詞と他動詞の関係を扱う先行研究は、大きく二つのパターンに分けられる。一つのパターンは日本語学の伝統的な自他の捉え方に即した「自他対応」と呼ばれるもの¹であり、もう一つのパターンは西洋流の自他交替

(transitivity-alternation) という観点の影響を受けたもの²である。前者は主に形態を中心としており、後者は主に意味を中心としている。伝統的な自他の研究は形態から意味へアプローチし、西洋流の影響を受けた自他の研究は意味から形態へアプローチするなら、両者はうまく合流することが期待されるが、しかし、実際に両者の間に大きなギャップがある。伝統的な自他対応では、意味に関する統一した定義と基準を与えていない。つまり、自動詞と他動詞のそれぞれのメカニズムを明らかにしていない。一方、西洋流の自他交替では、自動詞と他動詞のそれぞれのメカニズムを明らかにしているが、そのメカニズムに動詞の形態を当てはめようとしても、うまく当てはまらない。1.1節-1.2節では、この二つのパターンの先行研究とその間のギャップを詳しく見る。そして、1.3節では、それに基づいて、本研究の代案を提示する。

¹便宜のため、この立場の先行研究を「自他対応」の立場の先行研究と簡略的に記す。

²便宜のため、この立場の先行研究を「自他交替」の立場の先行研究と簡略的に記す。

1.1. 従来の自他対応の定義および問題点

1.1.1. 従来の自他対応の定義

動詞の自他対応に関する研究は従来多数ある。ただ、自他対応を初めて形態、構文（統語）、意味の三つの面で明確に形式化して定義づけたのは、奥津（1967）であった。奥津（1967）は自他対応を以下の通りに規定している。

(1³) 自・他の対応とは、次の二文

(i) N1 ga N2 o [+V, +Transitive, X, Y]

(ii) N2 ga [+V, -Transitive, X', Y']

において、 $Y=Y'$ なる時、 $[+V, +Transitive, X, Y]$ $[+V, -Transitive, X', Y']$ で表される二動詞間の関係を言う。

(奥津 1967 : 61⁴)

奥津（1967）以後、日本語の動詞の自他対応が、基本的に、意味、形態、統語の三つの条件が満たされている場合に成り立つという観点はほとんどの先行研究に引き継がれている。以下では、佐藤（1994a）がまとめた三つの条件を挙げる。

(2) 自他対応の定義

- a. 意味的条件 自動詞文と他動詞文が同一事態の側面を叙述していると解釈可能である。
- b. 形態的条件 自動詞と他動詞が同一の語根を共有している。
- c. 統語的条件 自動詞文のガ格と他動詞文のヲ格が同一名詞句で対応している。

(3) 自他対応の実例

- a. 鉛筆が 折れる。

³ 例文番号を含め、本論文によって一部改変。

⁴ ページ数は須賀一好・早津恵美子編『動詞の自他』（1995）による。以下も同様。

b. 太郎が 鉛筆を 折る。

(佐藤 1994a : 21)

佐藤は (3) について、以下のような説明を加えている。

(3⁵) に示した「折れる—折る」の例は (2) の条件をすべて満たすものである。すなわち、(2a) の意味的条件に関して、自動詞文 (3a) と他動詞文 (3b) は同一の事態の側面を叙述するものとして解釈可能である。また、(2b) の形態的条件に関して、(3a) におけるor-e-ru (折れる) と (3b) のおけるor-u (折る) は同一の語根orを共有している。更に、(2c) の統語条件に関して、自動詞文 (3a) のガ格と他動詞文 (3b) のヲ格は同一名詞句「鉛筆」で対応している。

(佐藤 1994a : 21-22)

1.1.2. 問題点

1.1.2.1. 以上の定義に当てはまらないケース

奥津 (1967) や佐藤 (1994a) をはじめとした自他対応の定義は明らかで、有効な定義であると認めるものの、この定義に部分的に当てはまらない例の処置が問題となってくる。たとえば、「入る—入れる」、「消える—消す」のようなペアは、直ちに (2b) の形態的条件に当てはまらない。「入る—入れる」を例にして説明する。自動詞の「入る」は「hair-」という語根を持ち、他動詞の「入れる」は「ir-」という語根を持つ。両者は同じ語根を共有するとは言えない。しかし、意味上、「入る」はよく「入れる」と対応し、統語上でも対応することができる。つまり、(2a) の意味的条件と (2c) の統語的条件は満たすにもかかわらず、(2b) の形態的条件だけが満たさない場合は、自他対応と見なすか否かは、さらなる検討する余地がある。

また、以下のペアは、(2c) の統語的条件に当てはまらない。

⁵ 例文番号は本論文によって改変。

(4) 漢語動詞の非能格動詞—対格動詞対応

NP1 ガ NP2 ヲ V する

NP1 ガ V する

(5) 実例

a. 二大スターが ミュージカルを 共演する。

b. 二大スターが 共演する。

(楊 2010 : 15)

(5a) と (5b) は、(2a) の意味的条件と (2b) の形態的条件を満たしている。(5a) と (5b) における「共演する」は同一事態の側面を叙述すると解釈可能である。また、(5a) における「共演する」は、(5b) における「共演する」と、同じ語根を持つ。しかし、この二文は、(2c) の統語的条件は満たさない。(2c) は、他動詞のヲ格 (目的語) が自動詞のガ格 (主語) に対応すると規定するが、(5b) の自動詞の主語 (二大スター) に対応しているのは、(5a) の他動詞文のヲ格 (ミュージカル) ではなく、ガ格 (二大スター) である。このようなペアは従来の自他対応の定義に当てはまらないため、自他対応から除外しないといけませんが、しかし、本当に除外していいのか。

さらに、(2a) の意味的条件に当てはめるために、奥津が指摘した「 $Y=Y'$ 」という条件を満たさないといけない。言い換えれば、「同一事態」の側面を叙述するという条件を満たすために、他動詞文のヲ格名詞と自動詞文のガ格名詞が同一の名詞でなければならない。それによると、本居春庭が指摘した「みつから然する」ことを表す自動詞と「ものを然する」ことを表す他動詞、たとえば、「伏す—伏する」のようなペアは、自他対応から除外しなければならなくなる。「みつから然する」ことを表す自動詞「伏す」は、「ハルは、もともと体が弱く、月のうちの半分は床に伏すような生活であり、健康になることが願いであった」のような、「人が伏す」の例がほとんどである。「ものを然する」ことを表す他動詞「伏する」(現代語では「伏せる」) は、「読みかけていた本を枕の横に伏せる」のような、「ものを伏せる」の例がほとんどであ

る。「人が伏す」に対応する「人を伏せる」の例は見つからなかった。本居春庭は「伏す－伏する」を自他の対応として扱っているが、奥津（1967）以来の定義によると、自動詞と他動詞は同一事態の側面を叙述すると解釈しにくいため、自他対応から除外しなければならない。現代語にもこのような例がある。たとえば、「風が吹く」と「笛を吹く」においては、N2が違う名詞句（他動詞文ヲ格名詞は「笛」、自動詞文ガ格名詞は「風」）であり、同一事態の側面を叙述すると解釈しにくいため、(2)の定義によると、自動詞「吹く」と他動詞「吹く」とは自他対応しているとは見なすことができない。

さらに、他動詞文のヲ格が自動詞文のガ格と同じ名詞句でも、同一事態を叙述していない場合がある。たとえば、「切れる」と「切る」というペアを例にして見てみよう。

(6) a. 太郎が 糸を 切る。

b. 糸が 切れる。

(7) a. * 銀行が クレジットカードの期限を 切った。

b. クレジットカードの期限が 切れた。

(6) と (7) に関して、(2b) の形態的条件からみると、「切れる」と「切る」は「kir-」という語根を共有し、(2c) の統語的条件からみると、「切れる」と「切る」は、「NP1 ガNP2 ヲ切る」－「NP2 ガ切れる」というような統語対応も成立している。つまり、(2b) と (2c) を満たしている。しかし、(2a) の意味的条件はどうだろうか。(6a) と (6b) は同一事態の側面を表すと解釈可能であるが、(7a) と (7b) は同一の事態の側面を叙述しているとは考えられにくい。(7b) に対応する (7a) は成り立たない。「期限を切る」の例は「今度も党則を改正して任期延長の期限を切っておかないと、中曽根を辞めさせられなくなるぞ」のようなものである。この例における「期限を切る」は、「期限が切れる」と同じ事態の側面を叙述していない。つまり、同じ名詞句（「期限」）が他動詞のヲ格と自動詞のガ格の両方に出てきていても、必ずしも同じ事態の側面を叙述していない。(2) の定義によると、このような用法での「切

れる一切る」は、自他対応から除外しなければならないものである。しかし、「切れる」をコーパスで調べると、「(クレジットカードの) 期限が切れた」のような用法が多数出てくる。量でいえば、(6a) の「糸が切れた」のような他動詞と対応できる例よりも多い⁶。(2) の定義に即すれば、「期限が切れる」という用法の「切れる」を自他対応から除外しなければならない。要するに、「糸を切る—糸が切れる」という二文からみると、「切れる—一切る」は自他対応をなしているが、「期限を切る—期限が切れる」という二文からみると、「切れる—一切る」は自他対応をなしていない。

「決まる—決める」というペアは、上記の「切れる—一切る」と同じ問題がある。たとえば、「代表を決めた」と「代表が決まった」という用例からみると、「決める—決まる」は(2) の三つの条件をすべて満たしているため、自他対応をなしている一方、コーパスで「決まる」を実際に検索してみると、「彼が犯人に決まってるじゃん」のような用例は数多く出てくる。この用法の「決まる」は他動詞文の「彼を犯人に決める」と同一事態の側面を叙述しているとは考えられにくい⁷。そのため、「彼を(犯人に) 決める—彼が(犯人に) 決まる」という用法における「決める—決まる」は、(2b) と(2c) を満たしているが、(2a) は満たさない。したがって、この用法の「決まる」は「決める」と、自他対応と認められない。要するに、「代表を決める—代表が決まる」という二文からみると、「決まる—決める」は自他対応をなしているが、「彼を(犯人に) 決める—彼が(犯人に) 決まる」という二文からみると、「決まる—決める」は自他対応をなしていない。

1.1.2.2. 自他対応の位置づけ

上記のように、奥津(1967)、佐藤(1994a)の定義には問題点がある。具体的な用法によって、自動詞と他動詞が自他対応をなすか否かは変わってくる。奥津(1967)、佐藤(1994a)の定義を支えるために、以下のような解釈

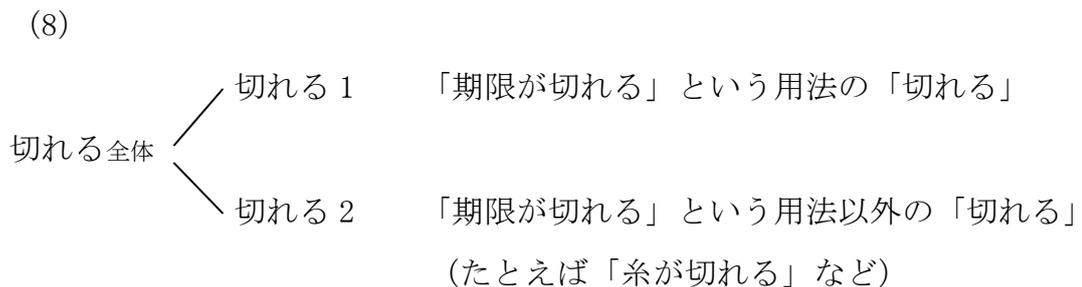
⁶ BCCWJで調べると、「が切れる」のヒット数は284件。中に「期限が切れる」が一番多く、62件。「糸が切れる」は二位で38件。

⁷ 意味的に「決め付ける」とある種の対応をなしているのかもしれないが、「決める」と対応しない。

があるかもしれない。「糸を切る―糸が切れる」のような二文が挙げられる。そのため、「切れる―切る」は動詞レベルで自他対応をなしている。「期限を切る―期限が切れる」のような用例は、例外として処置すればいい。

しかし、前節でも触れたように、「が切れる」という文字列をコーパスで検索してみると、「期限が切れる」の用例数が一番多く、62件をヒットした。そして、「糸が切れる」のヒット数は38件であった。量から見ると、むしろ「期限が切れる」という用法は「切れる」という自動詞の中心的な用法であると言える。少なくとも量的な中心用法を例外と処置するのは、妥当ではないと思われる。

さらに、「期限が切れる」における「切れる」を例外処置としてもよいと考えても、やはり問題が残っている。(1)と(2)の定義に即して、「期限が切れる」という用法における「切れる⁸」を例外と見なすなら、「切れる」は二分される。図式で簡単に示すと、(8)の通りになる。



除外された「切れる 1」をいったいどう取り扱うべきのか、除外された「切れる 1」が、除外されていない「切れる 2」とどのような関係にあるのかなど問題は、(1)と(2)の定義によって解決できない。結局、この定義は、動詞の一部の用法（「切れる 2」）に限って有効であり、他の用法において無効になる。

実は、奥津（1967）が指摘した自他対応の定義には、明確に「自・他の対応とは、次の二文…において…二動詞間の関係をいう」という記述がある。

⁸ 便宜のため、「期限が切れた」という用法の「切れる」を「切れる 1」と記す。この用法以外の「切れる」を「切れる 2」と記す。「切れる」のすべての用例を「切れる全体」と記す。

つまり、奥津（1967）にとって、自他対応は、自動詞と他動詞の二動詞そのものの関係ではなく、具体的な「文」における二動詞間関係をいうものである。本論文の観点から言い換えれば、奥津（1967）をはじめとした自他対応の定義は、レキシコン内の自動詞と他動詞の相関関係を言うのではなく、文に具現化した後の、動詞の用法レベルでの二動詞間関係を言うのにすぎない。

さらに、このような具体的な用法に縛られた自他対応の定義づけは、自動詞と他動詞の意味的相関関係を徹底的に記述することができない。上記の「切れる一切る」の例でいえば、「期限が切れる」における「切れる 1」を除外して、「糸が切れる」における「切れる 2」だけが他動詞「切る」と自他対応をなしていると規定すると、この枠内での「切れる一切る」の意味的相関関係は、自動詞「切れる全体」と他動詞「切る」の相関関係ではなく、「切れる 2」と他動詞「切る」の相関関係にすぎない。しかし、動詞の用法レベルの、言い換えれば、具体的な用例の中の「切れる 2」のではなく、動詞レベルの、言い換えれば、「切れる全体」としての「切れる」は、他動詞「切る」とどのような関係をなしているかということをも明らかにしなければ、自他対応の研究は不備な状態にとどまる。そのため、「切れる 1」と「切れる 2」の共通点を見つけ、「切れる全体」の性質を考察しなければならない。

上記の「切れる一切る」と同じ問題点を持つのは、奥津（1967）が挙げた「挟まる一切む」の例である。

- (9⁹) a. 私は 葉を 本に 挟む。
b. 葉が 本に 挟まる。

(奥津 1967 : 66¹⁰)

(9) からみれば、確かに「挟まる」は「挟む」から派生され、「挟まる」の語彙意味構造には、他動的な行為の「hasam-」が含まれている。したがっ

⁹ 例文番号を含め、一部改変。

¹⁰ 注 4 と同様。以下では、注 4 と同じ内容の注を省くことがある。

て、(他動詞から)「自動化転形ルール」は以下のように導かれることも自然に見える。

(10¹¹) Intransitivization

N1 ga (N2 ga N1 o [+Intransitivization]) Intr ⇒

N1 ga [+Intransitivization] Intr

(奥津 1967:67)

つまり、自動詞と見える「挟まる」の中には他動詞「挟む」が含まれている。

しかし、コーパスから実際に出てくる「挟まる」の用例には、「葉が本に挟まる」のような、語彙意味構造の中に他動詞が含まれているものもあれば、「この付近の地層は風化した泥岩層ですが、所々に白っぽい色をした薄い地層が挟まります。これは火山灰がかたまつた凝灰岩です」のような、語彙意味構造の中に他動詞が含まれていないものもある。誰かが人為的に白っぽい色をした薄い地層を泥岩層に挟むことが考えられにくい。その地層が自然現象として挟まっているのである。このような用例における「挟まる」は語彙意味構造の中に、他動詞が含まれていないと判断できる。つまり、同じ「挟まる」(しかも、「挟まる」は「-ar-」という自動化辞を持つ自動詞)であっても、語彙意味構造に他動詞が含まれている場合と、そうでない場合に分けられる。そうでない場合を完全に考慮に入れず、「-ar-」という自動化辞を持つ自動詞「挟まる」が、(9)の自動化転形ルールによって派生され、その語彙意味構造の中に他動的な行為 *hasam-*が含まれているという自・他の意味的相関関係についての奥津(1967)の考察は、偏っていると思われる。

要するに、奥津(1967)をはじめとした従来の自他対応に関する研究は、他動詞と照らし、「葉が本に挟まる」という用法における「挟まる」の意味的メカニズムを明らかにしたが、「葉が本に挟まる」と「白っぽい色をした薄い

¹¹ 例文番号を含め、一部改変。

地層が挟まる」との両方の用法を持っている自動詞「挟まる」を統一的に説明できるメカニズムを提供していない。

1.2. 非対格動詞と他動詞の自他交替および問題点

1.2.1. 非対格動詞と他動詞の自他交替

日本語の自他対応というのは、自動詞と他動詞が語根を共有しながら、語尾の違いによって対応するというものである。つまり、日本語では、自動詞と他動詞に関して、語尾変化、言い換えれば、形態的な対立点に注目する。形態に基づいた上、自他の意味的関連に注目する。したがって、従来の自他対応に関する研究は形態を中心としたものが多い。

一方、英語の自動詞と他動詞は、自他対応ではなく、自他交替 (transitivity alternation) をなしている。なぜなら、英語の自動詞と他動詞は、数少ない例外を除くと形態を共有する。そのため、意味の違いに注目する。たとえば、

- (11) a. John broke the window.
- b. The window broke.

(11a) における他動詞 break は、(11b) における自動詞 break と形態的に違いがない。ただ、(11b) において break は自動詞として現れ、自然的な変化という意味を表し、(11a) において break は他動詞として現れ、人為的な動作が break という変化を引き起こしたという意味を表す。このような同じ形態を持ちながら、違う意味を表す自動詞と他動詞は自他交替をなしている。

自他交替に関する研究は意味を中心としたものが多いことも当然のことである。自他交替の関係をなしている自動詞と他動詞が、意味的にどのような点において対立し、どのような点において共有するかに関する研究が多数ある。その中、Croft (1991) の causal chain という観点が代表的なものである。Croft (1991) は以下のことを述べている。

A possible verb must have a continuous segment of the causal chain in the event ICM [Idealized cognitive model, aka *frame*] as its profile and as its base.

(Croft1991:20)

Croft (1991) によると、動詞は単一事象を表さなければならない。ないしは、複合事象を表す可能性もあるが、各下位事象が[cause (引き起こし)]の関係で結びついた複合事象のみが可能である。以上の Croft (1991) の観点から自動詞と他動詞との関連から解釈すれば、以下のようなようになる。(11b) のような自動詞は、単一事象を表すものである。(11a) のような他動詞は、複合事象を表すものである。この複合事象には、二つの下位事象がある。一つは、John の働きかけの動作であり、もう一つは window の変化である。この二つの下位事象が必ず[cause]の関係にある。つまり、John の動作は window の変化を引き起こさなければならない。この二つの下位事象が[cause]の関係を成さないと、一つの動詞の意味構造に収められない。言い換えれば、John の動作という下位事象と window の変化という下位事象の間には、[cause]の関係しか成立しない。[cause]以外の関係が許されない。

また、LCS という動詞の意味構造の記述の仕方が広範に採用されてきた。LCS を用いて、自動詞と交替をなしている他動詞の意味構造を記述する際、CAUSE という関数を用いるのが一般的である。

(12) [x ACT ON y] CAUSE [y BECOME [y BE AT z]]

[x ACT ON y]という節と [y BECOME [y BE AT z]]という節を結びつける関数は CAUSE である。管見の限り、今までの研究では、CAUSE だけが他動詞に関わる関数としてたてられてきた。

1.2.2. 問題点

以上の主張は、日本語の自動詞と他動詞を一般的な言語理論に当てはめようとしたものであり、大まかに言うと、自動詞と対応している他動詞なら、

(13) [x ACT ON y] CAUSE [y BECOME [y BE AT z]]

というような LCS で記述し、他動詞と対応している自動詞なら

(14) y BECOME [y BE AT z]

というような LCS で記述することが暗黙のうちに採用されている。(13) と (14) の関係は、以下の通りである。(13) と (14) は y BECOME [y BE AT z] という節を共有する。y BECOME [y BE AT z] という節に、[x ACT ON y] という節が加わって、二節は CAUSE という関数で結びつくようになると、(13) が出てくる。

しかし、この主張は、日本語にうまく当てはまらないところがある。日本語の動詞は語尾変化を持つという特徴がある。この特徴は、形態的な特徴ともいわれる。形態という点において対応する自動詞と他動詞は、意味的に必ずしも上記の (13) と (14) のように対応していない。たとえば、

(15) a. 場合によっては、わたし独りでここで夜を明かしてもかまいません。

b. 夜が明ける。

(16) a. …記念堂広場には人々が集まって朝の時を過ごす。

b. あれから四〇年近く時が過ぎた。

(15) のわたしは夜に働きかけていないし、夜が明けることを引き起こさない。「夜が明ける」という自然現象を引き起こすことができるのは、神様しかないが、主語の「わたし」は引き起こすという意味で「夜を明かす」こと

が不可能である。したがって、「主語の動作」と「対象の変化」の両者は[cause]の関係をなしていない。(16)も同様に考えることができる。

また、「私たちは空襲で家財道具を焼いた」という「状態変化主体の他動詞文」においても同じことが言える。主語の「私たち」が「家財道具」の「焼けた」という変化を引き起こさない。両者は日本語において他動的な関係をなしているにもかかわらず、[cause]の関係をなしていない。

さらに、-ar-という形態を持つ自動詞は、少なくとも一部の例において、y BECOME [y BE AT z]という自動詞のLCSに当てはまらない。具体的には、奥津(1967)の「葉が本に挟まる」という例を想起されたい。「葉が本に挟まる」という文における「挟まる」は、奥津(1967)が分析したように、「hasam-という他動的行為の主体が誰かある筈なの」である。つまり、この種の自動詞は、語彙意味構造に「hasam-という他動的行為」が入っており、誰かの他動的な行為が前提となっている。しかし、Levin&Rappaport Hovav (1995)によると、y BECOME [y BE AT z]で記述した自動詞は、自然変化という解釈を持たなければならない¹²。-ar-という形態を持つ自動詞(便宜のため、以下では「-ar-型自動詞」と呼ぶ)の、他動的な行為が前提となっているという意味特徴は、y BECOME [y BE AT z]で記述した自動詞の、自然変化という意味特徴と矛盾している。以上の点においては、日本語の少なくとも一部の-ar-型自動詞は、(14)に当てはまらない。したがって、これらの-ar-型自動詞は、形態的に対応している他動詞と、(13)と(14)のような意味的な対応をなしていない。

影山(1996)も(14)に当てはまらない自動詞の例を提示している。

- (17¹³) a. 公園には様々な種類の木が植わっていた。
b. 壁にはピカソの絵が掛かっていた。
c. (募金運動をして) 目標額が集まった。
d. (海底トンネルによって) イギリスとフランスがつながった。

¹² Levin&Rappaport Hovav (1995)による。

¹³ 例文番号を含め、本論文によって一部改変。

- e. 値段はもうこれ以上まからない。
- f. 段ボール箱に雑誌がいっぱい詰まっている。

(影山 1996 : 184)

影山 (1996) は (17a) の「木が植わる」について、「誰かが木を植えるという使役行為を前提としている。山に自然に生えている木について、「植わっている」とはいえない」と説明している (影山 1996 : 184-185)。また、(17) の他の例についても、「動作主が努力した結果としてその事態が生み出されることを意味している」という説明を加えている (影山 1996 : 184-185)。

(17) のような (14) に当てはまらない例を、影山 (1996) は「脱使役化自動詞」という項目を立てて処理しようとした。「脱使役化」について、「-ar- という形態は…「使役主を変化対象と別のものとして置いたまま統語的に表出しない」という外項抑制の働きを持つと考えられる」(影山 1996 : 184)、「脱使役化：自動詞化接辞 -ar- は、使役主を意味構造で抑制し、統語構造に投射しないことで自動詞化を行う」(影山 1996 : 184) と規定している。影山 (1996) によれば、「脱使役化自動詞」は、意味構造に使役主が存在する。ただ、この使役主は抑制され、統語構造に投射しない。しかし、なぜ使役主は簡単に抑制されるのかについては、影山 (1996) は説明していない。「-ar- という形態」は外項抑制の働きを持つと説明しているが、なぜ「-ar-」という形態範疇のものが、意味範疇の「外項抑制」という働きを持つのかについてははっきりと説明していない。「-ar-」という形態の背後に、日本語の自動詞には、いったいどのような意味的メカニズムが存在するかという問題を、影山 (1996) は解決していない。

たとえ影山 (1996) に則っても、やはり問題が存在する。「-ar- という形態」は「脱使役化自動詞」の必要条件でもないし、充分条件でもない。たとえば、

- (18) マンションは神田川支流ぞいに建っているんですが、…。
- (19) ミルクに砂糖が入っている。

(18) (19) で示したように、意味上の脱使役化自動詞は必ずしも、-ar-という形態的な特徴をもたない。マンションは人の意識的な「建てる」という動作を前提としないと、おのずから建つことができない。(19) の砂糖も同じように考えられる。また、

(20) 一条工務店のおかげで、夢の家が難なく建った。

(21) 四方八方、手を尽くして、ようやく家が建った。

のように、影山 (1996) が提示した副詞・道具ないし手段表現テストにも通るため、「建つ」は使役構造、あるいは、他動的な行為を土台としているとわかる。つまり、「建つ」は脱使役化自動詞の意味的特徴が備えているため、意味的な脱使役化自動詞であるにもかかわらず、形態的に「-u」語尾動詞であり、-ar-という形態を持たない。(19) の「入る」も同様に考えられる。「2年ぶりにピアスを通してみたら難なく入った」のような例があるため、影山 (1996) が提示した副詞・道具ないし手段表現テストに通る。しかし、「入る」は-ar-という形態を持たない。

次に、-ar-という形態的な特徴をもつ自動詞は、意味からみると、必ずしも「脱使役化」という意味特徴を持たない。たとえば、影山 (1996) があげた「集まる」の例は、「(募金運動をして) 目標額が集まった」という例である。この例において、確かに動作主の存在が前提となっているが、しかし、コーパスで「集まる」を調べると、以下のような用例が出てくる。

(22) a. 数人の主婦たちが集まって、洗濯したり、井戸端会議に花を咲かせていた。

b. 岩場に波がぶつかることにより、岩にいる貝やカニが水中に落ち、それをねらって、魚が集まってきている。

c. 怖いと感じると、瞬時に危機を避けられるよう、心拍数や体温が上昇し、万が一の出血を最小限に抑えるよう血液が体の中心に集まるため、血圧が上昇します。

d. 米大統領就任式オバマ大統領の就任演説に注目が集まっていますね～。

(22a, b) における「集まる」は人間や動物の意志的な動作を表すものである。その意味構造に、「目標額が集まる」という事象に潜んでいる「募金運動をして」のような他動的な行為が存在しない。(22c) の「(血液が) 集まる」は、人間・動物(動作主)の意志的な動作ではないが、誰かの動作主の意志的な努力が背景に存在するわけでもない。血液の移動はむしろ自然現象に近い事象ではないかと思われる。(22d) の「注目が集まる」は一見動作主が背景に存在するように見える(注目する人)が、実際、オバマはこの文において主語でもなく、その演説が注目を集めようとした結果、注目が集まるわけでもない。つまり、(22d) の「集まる」は、意味上、「植わる」と同じような「脱使役化」構造を持つと分析できない。

要するに、「集まる」は形態的に「-ar-」という接辞を持っているにもかかわらず、意味的に「脱使役化」という特徴を持たない場合が数多くある。

以上の問題点をまとめると、日本語には(14)のようなLCSに当てはまらない自動詞が多数・多量に存在する。このような自動詞は必ずしも-ar-という形態を持つわけではない。日本語固有の形態とLCSで表示する意味との関係を整理しないと、「脱使役化自動詞」という項目を立てても、この種の自動詞をうまく処理することができない。

本研究は意味の立場に立ちながら、コーパスから引き出した事例に基づいて、形態と意味との関係を整理しようとする。

1.3. 本論文の解決案

1.3.1. 意味からの考察の必要性和[cause]という手がかり

1.1節と1.2節では、自他対応と自他交替の定義について先行研究を踏まえた上で述べ、それに関する問題を指摘した。そして、本研究は意味の立場に立ち、形態と意味との関係を整理しようとすることを明らかにした。

若干の例外があるにもかかわらず、形態的な対応は同じ語根を共有すること、統語的な対応は他動詞のヲ格が自動詞のガ格が共通することと従来の自他対応のように規定して大きく間違いはない。しかし、意味的な対応は「同一事態の側面を叙述している」という定義は明らかになっていない部分が残っている。つまり、同一事態には、いくつの側面があるのか。自動詞と他動詞はそれぞれ、どの側面を叙述しているのか。各側面は、どのような相互関係にあるのか。したがって、自動詞と他動詞はどのような相互関係にあるのかなどの問題ははっきりしていない。たとえば、「同一事態の側面」という定義は、「飲める」のような「可能動詞」を自他対応から取り除くことができない。また、同一事態の側面を叙述していなくても、自動詞と他動詞は、もし形態的に対応していれば、意味になんらかの関連があるはずである。たとえば、前述した「風が吹く－笛を吹く」や「期限が切れる－期限を切る」のようなペアがその例である。

一方、英語の先行研究は、自他交替をなしている自動詞と他動詞が[cause]の関係にあると述べる点ではほぼ一致している。たとえば、Pinker (1989) は自動詞の break と他動詞の break の間の意味関係は[cause]の関係にあると分析した。LCS で表示すると、以下のようになる。

- (23) a. 自動詞: [y BECOME [y BE AT z]/ROOT]
 b. 他動詞: [[x ACT ON y] CAUSE [y BECOME [y BE AT z]/ROOT]

他動詞が表す動作は自動詞が表す変化を引き起こしたという。日本語の自他も非対格動詞と他動詞との自他交替をなしているという立場の先行研究¹⁴は、暗黙のうちに自動詞事象と他動詞事象が[cause]の関係にあるという観点を採用してきた。この観点を採用すれば、上記の自他対応の立場の先行研究の穴が埋まるように見える。つまり、「同一事態の側面を叙述する」という意味的な規定は、自動詞が叙述する側面と他動詞が叙述する側面がどのような相互関係にあるのかという点をはっきりしていないが、自他交替の立場の先

¹⁴便宜のため、この立場の先行研究を「自他交替」の立場の先行研究と簡略的に記す。

行研究は、それが[cause]の関係であると答えている。しかし、実例の動向からみれば、この答えは必ずしも正しくない。たとえば「夜を明かす一夜が明ける」などのような[cause]の関係をなしていない例が挙げられる。この点については、1.2節ですでに述べている。

本論文は、以上の[cause]の関係の「±」を手がかりにして、形態的に対応している自動詞と他動詞の間の意味関係を再検討する。便宜のため、以下では、自動詞事象と他動詞事象が[cause]の関係にある場合を[+cause]、そうでない場合を[-cause]と記す。

1.3.2. [-cause]の関係

前節でわかるように、自動詞が表す事象が、それに対応する他動詞事象と[cause]の関係にあるという主張は、多くの先行研究に採用されてきた。動詞の実例の動向から再検討してみたら、この主張が正しい場合もあれば、正しくない場合もある。[+cause]の場合は、すでに多数の先行研究に論じられてきたから、本論文はそれについて深入りしない。本論文は[-cause]の場合にフォーカスを当てて考察・分析を行う。

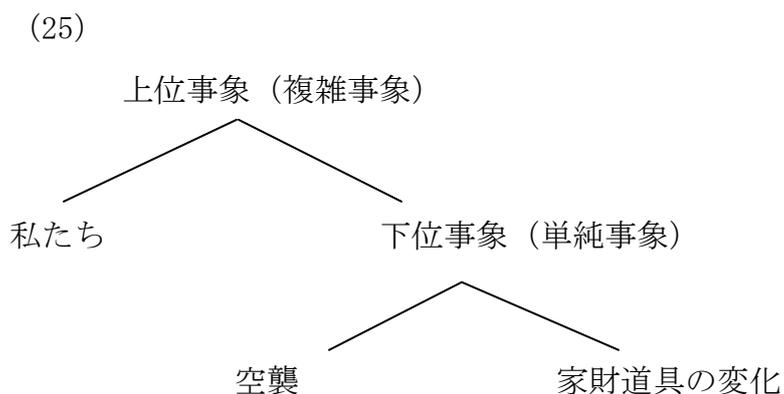
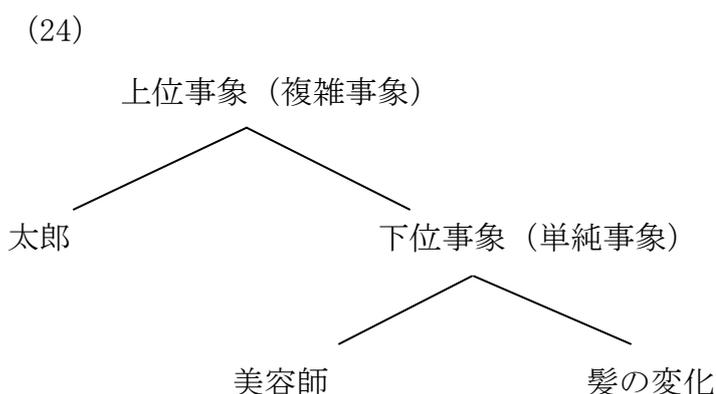
他動詞から見ると、いわゆる「介在性の表現¹⁵」と「状態変化主体の他動詞文¹⁶」は、各下位事象の間において、[-cause]の関係が確認される。「太郎は美容室で髪を切った」という介在性の表現の事象構造には、美容師の動作という下位事象が実際に存在する。美容師の動作という下位事象と、髪の変化という下位事象との間に、直接的な[+cause]の関係が確認される。つまり、髪「切れる」という変化を引き起こしたのは、美容師の「切る」という動作であり、主語の「太郎」ではない。太郎は髪の変化という下位事象を直接に引き起こさない。言い換えれば、太郎は、髪の変化という下位事象と[-cause]の関係にある。「私たちは空襲で家財道具をみんな焼いてしまった」という「状態変化主体の他動詞文」の事象構造を分析してみると、空襲が家財道具の変化を引き起こしたという直接的な[+cause]の関係が想定される。

¹⁵ 「介在文」とも呼ばれる。詳しくは第四章を参照。

¹⁶ 詳しくは第五章を参照。

したがって、「私たち」は「家財道具の変化」と[-cause]の関係にあることが自然にわかる。

以上の両構文には共通点がある。下位事象（美容師→髪；空襲→家財道具）に[+cause]が観察される。上位事象における主語は目的語そのものではなく、下位事象全体に関与する。本論文において、上記の上位事象を「複雑事象」と呼び、下位事象を「単純事象¹⁷」と呼ぶ。



主語（「太郎」と「私たち」）は下位事象全体と上位事象を構成する。そして、主語と下位事象全体との関係は[-cause]の関係であることが確認できる。[-cause]の関係とはいったいどのような関係なのかについては、さらなる考察を加えないと結論を出せないが、現段階では、「介在性の表現」においては、その関係が[have]、「状態変化主体の他動詞文」においては、その関係が[lose]と分析しておきたい。詳しくは第四章を参照。そして、[cause][have][lose]

¹⁷単純事象はさらに単一事象と複合事象に分けられる。また、注意されたいのは、単一事象と複合事象は、第三章の simple event, complex event に当たる。詳しくは第三章で後述する。

の三者をまとめて、「責任的関与」としておく。「責任的関与」という関係は、前述した[+cause]をも含めることができる。言い換えれば、目的語の変化を引き起こすことが必須なのではなく、その事象に責任的関与をすればよいのであり、責任的関与さえ満たせば、日本語の他動性が成り立つのである。

(26)

責任的関与 { [+cause]
[-cause] have, lose, …

本論文は「責任的関与」を以下のように定義づける。

ある事象がまずある。その事象は自動詞事象であれ、他動詞事象であれ、
<変化性>を伴う事象であればよい。そして、ある意識的主体がその変件事象に意識的に自分の身を入れようと、あるいは、その変件事象に関係を結び付けようとする、意識的主体と事象は「責任的関与」の関係にある。意識的主体が変化の達成の過程と関わらず、変化の結果に責任をもっていれば、「責任的関与」関係が成り立つ。変化の達成の過程というのは、変化はもの
のそれ自身の力で変化するか、主体によって引き起こされて変化するか、主体以外のものによって引き起こされ変化するかという過程を指す。

この主張を用いて、前述した「例外」を説明することができる。

(27) a. 私たちは 夜を 明かした。

b. 夜が 明けた。

(28) a. 私たちは 時を 過ごした。

b. 時が 過ぎた。

(27) の私たちは夜に働きかけていないし、夜が明けることを引き起こさない。先行研究に広範に認められた[cause]の観点から予想すれば、このよう

な自他交替が成立しないはずである。事実として存在している (27) (28) のような自他の対は、例外処置とされなければならない。

本論文の観点からみれば、日本語の他動性は[cause]の関係に基づいていない。[cause]の関係でなくても、責任的関与の関係さえ成り立てば、他動詞が成り立つ。具体的には、「夜を明かす」ということが「夜が明ける」ことを引き起こさなくてもよい。他動詞「明かす」は、「夜が明ける」まで自分がいるなどの形で、意図的に話者自分を「夜が明ける」という自然的な事象に関与しようとする、関係を結び付けようとするという意味を表す。(28)の「時が過ぎる一時を過ごす」も同様に考えられる。要するに、本論文の観点によれば、(27) (28) は例外とみなさなくてもよい。言い換えれば、従来の先行研究の主張によれば例外処置としなければならないものまで説明できるので、本論文の主張は説明力がより高い。

自動詞の意味構造にも[-cause]の関係が観察される。自動詞は他動詞の目的語に生じた結果¹⁸の部分をプロファイルするといわれる。結果は二種類に分けられる。一つは時間的な推移に伴う自然的な結果であり、もう一つは因果関係の結果である。それについての先行研究は宮腰 (2012) が挙げられる。

「結果」とは何か

A-I (第I案) : 時間的前後関係に基づく規定

...

A-II (第II案) : 因果関係に基づく規定

...

A-III (第III案) : 結果を二つにわけて規定

・「結果 (result)」とは、原因によって引き起こされたコトである。

¹⁸ 宮腰 (2012) によると、根拠があれば、結果は<変化>として規定しても、<状態>として定義してもよい。たとえば、「花瓶を割る」のような他動詞文が表している事象の結果は何かというと、i 花瓶が割れた状態になつたコト<変化>という意味もとれるし、ii 花瓶が割れているコト<状態>という意味もとれる。本論文は自動詞を分析対象とする。自動詞の基本的な語彙意味は状態ではなく、変化であるため、ここでの「結果」とは、<変化>という意味で使う。

- ・「結果 (resultative)」とは、単一事象の完結点以降のアスペクト局面である。

(宮腰 2012 : 2)

宮腰 (2012) によると、時間的前後関係に基づいて規定したら、「結果」はコトを時間軸に沿って二つ (以上) の部分に分割し、そのうちの後 (または最後) の部分である。一方、因果関係に基づいて規定したら、「結果」は原因に対する概念である。それは原因によって生み出されたもの。また、ある行為によって生じたもの。その生み出された状態である。(宮腰 2012 : 2-3)

本論文は以上の宮腰 (2012) の主張を自動詞の意味構造の分析に採用する。まず、因果関係のキーワードは「引き起こす」であるため、本論文の主眼を置くところの[cause]と一致している。そのため、本論文は因果関係を[+cause]と解釈する。そして、以上の宮腰の主張によれば、自動詞が表す結果は必ずしも因果関係の結果ではないと考えられる。つまり、自動詞が表す結果は、他動詞の働きかけによって生み出された結果だけではなく、単なる時間軸上の二つの部分のうちの後の部分という意味の結果である可能性もある。たとえば、

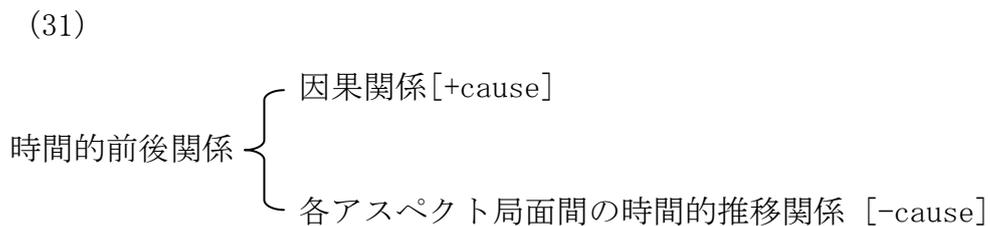
- (29) a. 太郎が 富士山を 見る。
b. 富士山が 見える。

「見る」と「見える」との間に、時間的前後関係が確認されるが、因果関係が必ずしも確認されない。「見る」という動作があっても、必然的に「見える」という結果を引き起こすわけではない。「見ても見えない」ことが多数ある。「見える」は、「見る」という動作が引き起こした結果より、単なる「見る」という動作の完結点以降のアスペクト局面を表す。

さらに、因果関係 ([+cause]) は通常時間的に果が因に後続しているが、時間的な前後関係は必ずしも因果関係と一致しない。たとえば、

- (30) a. 太郎は 花瓶を 割った。
 b. 花瓶が 割れた。

という自他の間には因果関係も時間的前後関係も見られる。つまり、「割る」という事象を二つの部分に分けることができる。太郎の花瓶への働きかけの行為という部分と、花瓶が割れた状態になった変化という部分。時間軸に沿ってみると、二つ目の部分は、一つ目の部分に後続している。つまり、両者は時間的前後関係にある。また、二つ目の部分は一つ目の部分によって引き起こされる。つまり、両者は因果関係 ([+cause]) にある。(30) に対して、前述した (29) の自他の間には因果関係がみられなく、ただ単なる時間的前後関係がみられる。つまり、各アスペクト局面間の時間的推移関係しか見られない。したがって、時間的前後関係と因果関係は以下のようにまとめることができる。



本論文は、[cause]の関係ではなく、より広範的な時間的前後関係が日本語の自動性にとって重要であると主張する。佐藤 (1994a) は働きかけの動作という下位事象と対象の変化という下位事象の間関係を以下のように記述している。

(32) [AGENT:DO+ ____] + [THEME:REALIZATION]

(佐藤 1994a : 29)

佐藤 (1994a) は両下位事象を結びつける関係を記述するとき、[cause]を使わず、[+]を使っている。佐藤 (1994a) はこの[+]について詳しく説明し

ていないが、本論文は時間的前後関係という意味で、[+]という記号を引き継いで使うようにする。ただ、働きかけの動作という下位事象と対象の変化という下位事象を記述する際、佐藤（1994a）の記述法を採用しないようにする。本論文にとって、佐藤（1994a）の記述法は通常LCSの記述法と本質的に違いはない。ただ、記述用語があまりにも特別である。その特別な用語には特別な意味があれば、それを援用してもかまわないが、本論文にとって、その用語にはそれなりの意味はない。そのため、下位事象を記述する際、佐藤（1994a）の記述法を採用せず、通常LCSの記述法を採用する。本論文の自動詞の意味構造に関する主張は、以下のように表示することができる。

(33)

[x ACT ON y] + [y BECOME [yBE AT -z]]

↓

[y BECOME [yBE AT -z]]

この主張を用いて、「植える—植わる」「建てる—建つ」のような英語に見られない他動詞からの自動詞化を説明することができる。前にも触れたが、「植わる」の意味構造は、人為的な動作が前提となっている。誰かが木を植えるということがなく、山に自然に生えている木について、「植わっている」とは言えない。英語においてこのように明確に人為的な動作が前提となっている他動詞は、自動詞化が行われぬ「plant(vt)–*plant(vi); build(vt)–*build(vi)」（*The tree planted; *The house built）。つまり、英語の場合の人為的な動作を行う動作主は脱落できない。英語と反対に、「植わる」という自動詞の存在でわかるように、日本語は人為的な動作が前提となっても、動作主がそのまま脱落することができる。しかし、それはなぜなのか。または、日英の差異はどう生じてきたのか。

影山（1996）は各下位事象の間の[cause]の関係を認めた上、causerとしての動作主がそのまま脱落した¹⁹と主張する。そして、その原因が日本語に接辞があることであると述べている。接辞があるために、自動詞化の条件が英語より緩やかなものであっても認められる。一方、英語の自動詞化が形のないゼロ形態によって行われている。ゼロ接辞は、「せいぜい反使役化²⁰の力しか持てな」く、「脱使役化²¹」の力を持たない。したがって、英語は「脱使役化」を許さない。

しかし、コーパスの実例からわかるように、-ar-は脱使役化の必要条件でもないし、充分条件でもない。これについて1.2.2節ですでに論じた。たとえ-ar-はピッタリに脱使役化という機能を果たす接辞であるという影山

（1996）の主張に則つても、まだ問題がある。接辞はそもそも形態レベルのものである。ある形態はなぜ動作主を脱落させるという強い機能を果たすかということ明らかにしなければならないが、影山（1996）はそれについて触れていない。要するに、影山（1996）は形態と意味との関係を明らかにしないまま、形態を用いて意味の問題を解決しようとした。

本論文は、因果関係なら、動作主はそれほど安易に脱落することができない、因果関係でないなら、各アスペクト局面の中の一つとしての動作局面が脱落できる、もしくは、動作局面はプロファイルされなくても自然であると主張する。日英の差異もそこから生じてくると考えられる。英語の交替をなしている自他動詞は、因果関係、つまり[+cause]で結びついている。causerとしての動作主は脱落できない。そのため、英語は「脱使役化」を許せない。一方、日本語の交替をなしている自他動詞は、時間的前後関係で結びついている。動作主は必ずしもcauserとして機能しない。動作主の動作は、ただ各アスペクト局面の中の一つである。動作主の動作は、因果関係の因であるなら、必要であり、脱落はできない一方、時間的前後関係の前の局面であるなら、必要でなく、脱落しても不自然ではない。具体的には、「植わる」は「植

¹⁹ この動作主の脱落の過程は、影山（1996）は「脱使役化」と呼んでいる。「脱使役化」の詳しくは本論文第二章及び第七章を参照。さらに詳しいことは影山（1996）を参照。

²⁰ 反使役化については第七章で詳述する。さらに詳しいことは影山（1996）を参照。

²¹ 脱使役化については第七章で詳述する。さらに詳しいことは影山（1996）を参照。

える」という動作によって引き起こされた変化というより、「植える」という動作の完結点以降のアスペクト局面を表す。従って、動作主（木を植える人）の脱落は、causerの脱落ではなく、二つの局面のうち、前の部分がそもそもプロファイルされていないと解釈する。したがって、他動詞からの自動詞化は、影山（1996）が主張したように、[+cause]の関係が前提とした動作主の脱落や動作主の対象への同認などが行わなくてもよい。働きかけの動作の完結点以降の局面があれば、自動詞化は成り立つ。「植わる」も「建つ」も形態と関係なく、働きかけの動作の完結点以降のアスペクト局面を表す。要するに、この主張は、形態的に-ar-という接辞が付いている「植わる」のような自動詞から形態的に-ar-という接辞が付いていない「建つ」のような自動詞まで説明できるため、従来の[cause]の主張より説明力が高い。

2. 本論文の目的と意義

本論文は現代日本語の自動詞文と他動詞文に関する研究である。動詞の自他対応と自他交替については、従来から多くの研究者により研究がなされている。しかし、従来の自他に関する研究は「形態」を中心とした研究が大半であり、「意味」の観点から深く追及した研究は数少ない。また、自他交替に関する研究は「意味」を中心とした研究が多いが、その「意味」は「形態」に完全に一致しない。両者に大きなギャップがある。そのため、未だ様々な課題が残されているのが現状である。本論文では、[cause]の関係の「±」を中心に、意味の観点から日本語の自動詞文と他動詞文を考察し、再整理を行うことを目的とする。

3. 本論文の構成

第二章では、動詞の自他対応と自他交替に関する先行研究を概観し、再分析を行う。

第三章では、[cause(引き起こし)]の関係であるか否かを中心に自他のペアを整理するために、まず、[cause]の関係はいったい何の関係であるかを明ら

かにする。その際、Croft (1990) の causal chain の観点と L&RH(1995) の unaccusativity の観点を採用する。

Croft (1990) の causal chain の観点は、具体的には、力の伝達・移動 (force dynamic) の観点 (いわゆる動力学) から、[cause] の関係を整理する説である。力を発するものは initiator である。力は initiator から、対象へ伝達・移動して、対象の変化を引き起こす。力の initiator から対象への伝達・移動は、intermediate を介して行う場合がある。力が対象の変化を引き起こした後、ある結果状態が残る場合もある。力は、逆の方向へ伝達・移動しない。こうした (物理世界の) 力の伝達・移動が観察される事象は、[cause] の関係にある。本論文はこれを [cause] の関係の判断基準とする。力の伝達・移動が観察されない事象は、[-cause] の関係にあると判断する。

本論文にとって、L&RH(1995) の [cause] の関係に関する観点は以下の点において重要である。「他動詞からの自動詞化によって生み出された非対格動詞は、少なくとも自立の解釈を持たなければならない」という点である。これも [cause] の関係の判断基準とする。

[cause] の関係の判断基準を明らかにした後、動詞の実例の動向を述べる。具体的には、『日本語動詞基本用法辞典』から、形態で対応する自動詞と他動詞を取り出し、チェックの対象とする。BCCWJ というコーパスを用いて、以上の自動詞と他動詞の実例を集める。そして、上記の [cause] の関係の判断基準を用いて、これらの実例において [cause] の関係がみられるか否かをチェックする。チェックの結果は、[+cause] とともに、[-cause] の関係も観察されるとなっている。

[+cause] の関係は先行研究でよく論じられてきたため、本論文は、[-cause] の関係にある自他のペアを中心に考察・分析を行うことにする。

第四章と第五章は、以上で述べた [-cause] の関係の自他のペアを、他動詞に着目して分析する。具体的には、第四章では「介在性の表現」という現象、第五章では、「状態変化主体の他動詞文」という現象を中心に検討する。

第六章で、上記の両現象をあわせ、日本語の他動詞の意味的構造の全体像を再構築する。また、この全体像で説明できる他の現象について触れる。

第七章から第八章までは、自動詞を中心に、[-cause]の関係の自他のペアを検討する。第七章では、まず、L&RH(1995)の非対格動詞とそれに対応する他動詞の[cause]の関係は影山(1996)でいう[cause]の関係と性質が違うことを明らかにした。そして、統語的なデ格名詞は、事象構造では動作主と絡んでいることを確認し、影山(1996)が主張した動作主脱落するという説の反論を出し、脱使役化という説を批判的に検討する。続いて、自動詞の考察によって、本論文の代案を提示する。それは、英語の自動詞は他動詞と[CAUSE]という関数で結びついて、動作事象と結果事象は因果関係にある。そこから派生された自動詞は、自立の事象を表す。

(34) [x ACT ON y]CAUSE [y BECOME [yBE AT -z]]

↓

[y BECOME [yBE AT -z]]

それに対して、日本語の自動詞は他動詞と、[CAUSE]という関数で結びついていないという提案である。

(35) [x ACT ON y] + [y BECOME [yBE AT -z]]

↓

[y BECOME [yBE AT -z]]

日本語の自他動詞の語彙概念構造は、(35)で示したように、[+]という関数で結びついて、動作事象と結果事象は時間的前後関係にあると本論文が主張する。そこから派生された自動詞は、他動詞の完結点以降のアスペクト局面を表す。それはアスペクト的に「点」的な事象である。したがって、日本語には、自立の事象を表す自動詞とともに、他動詞の結果の局面を表す自動詞が存在する。自立の事象を表す自動詞は、「落ちる、倒れる」などの動詞であり、他動詞の結果の局面を表す自動詞は「建つ」「植わる」などの動詞である。「建つ」「植わる」のような結果自動詞は、コーパスを用いて検索

すると、その大半がテイル形をとるという特徴がある。そして、第八章では、他動詞の結果の局面を表す自動詞がテイル形を取って文に現れるという言語事実を用いて第七章の主張を検証する。

第九章は、論をまとめながら、今後の課題を提出する。

第二章 先行研究

1. はじめに

本章では従来多くの分析がなされてきた自他交替を中心に、先行研究においてそれがどのように捉えられてきたのか、また、どのような点が注目されてきたのかを概観する。

2. 形態中心の日本語の自他に関する研究

2.1. 本居春庭（1828）

本居春庭は『詞通路』（1828）において、動詞の形態に基づいて「自他の詞」を六つの種類に分かれるとし、それを六段の表で示した。第一段「おのつから然る、みつから然する²²」、第二段「物を然する」、第三段「他に然する」、第四段「他に然さする」、第五段「おのつから然せらる々」、第六段「他に然せらる々」という意義規定がなされている。

本居春庭の時代にまだ自と他が（六種の中から）卓立して対応するという意識がなかったと考えられる。むしろ、自動詞・他動詞の概念は、使役や受身など、現在では「態」と呼ばれる概念とはっきり区別していない時代であった。現代で言う動詞と動詞の態とを区別する見方は、西洋流の文法によってもたらされたものであり、春庭がこの区別をしていないのは当然とも言える。

本論文にとって、本居春庭は、以下の点において意味がある。

まず、形態によって分類するとはいえ、第一段には、「おのつから然る」と「みつから然する」という二種類がはいっている。この二種類は形態的な区

²²本居春庭（1828）を引用する場合、「おのつから」「みつから」という表記法をそのまま援用する。それ以外の場合、「おのずから」「みずから」という言葉を使うと、現代語の表記法を使用する。

別はないため、形態という大きな分類の下に、意味的な下位分類であると考えられる。自動詞を意味的に「おのつから然る」と「みつから然する」とに分けることは、有意義であると思われる。本居春庭の「おのつから然る」と「みつから然する」という区別は、無情物（物）と有情物（人・他）の日本語固有の概念区別から導かれたと思われるが、この区別は現代でいう「非対格動詞仮説」と共通したところがある。「非対格動詞仮説」は、自動詞を非能格動詞と非対格動詞に分けようとする仮説である。動詞の意味的特徴から見ると、非能格動詞は、たいてい、「みずから行動する」という意味を表す自動詞であり、非対格動詞は、たいてい、「おのずからそうなる」という意味を表す自動詞である。後にも述べるように、非能格動詞は、本居春庭でいう「みつから然する」と中身が違うところがあるが、大きく捉えれば、両者は一致する。また、非対格動詞は、「おのつから然る」と意味的に非常に近いと言える。本居春庭のこの二分類は、「非対格動詞仮説」より百年以上先行しているが、残念ながら、その後継者が少ない。

ただし、「みつから然する」というグループのメンバーを詳しく見ると、現代日本語文法でいう自動詞のみならず、他動詞も含めていることがわかる。この点は大変興味深い。たとえば、本居春庭は「多行より佐行にうつりて自他のわかるる例」のところで、多行四段活の例として、「うつ、かつ、たつ、まつ、もつ」という動詞を挙げ、それらを「みつから然するをいふ詞」としている。「うつ（打つ）」「まつ（待つ）」「もつ（持つ）」はヲ格名詞をとるため、現代日本語文法では、他動詞と分類されるが、本居春庭はそれらを「みつから然する」という分類に入れている。同じ「みつから然する」のところに、現代日本語文法でいう自動詞である「かつ（勝つ）」「たつ（立つ）」を挙げている。「待つ」や「持つ」のような動詞は、ヲ格目的語を取るにもかかわらず、目的語が表す客体の変化を引き起こさなければ、動作主体だけに關心があり、結局、目的語を取っても、取らなくても同じようにとらえられ、自動詞とされる。

言い換えれば、動詞の自他を区分する際、本居春庭は、動詞が目的語そのものを取るか否かという点より、目的語が表す客体の変化を引き起こすか否

かという点を重視する。つまり、本居春庭の時代の素朴的な「他動性」は、客体そのもの（ヲ格名詞）ではなく、客体の変化と大きく関連している。後節で述べるように、統語的なヲ格目的語の有無という自他の区別の仕方は、大槻の時代からだんだん受け入れられてきたが、大槻以前において、すでにヲ格目的語を取るか否かということより、もっと重要な性質が観察されている。

次章から詳しく述べるが、本論文は、事象構造分析を基本とする。他動詞はすべて目的語を取るにもかかわらず、目的語が表す客体に変化が生じる場合だけ、他動詞は、主体の動作事象と客体の変化事象という二つの下位事象を持つと考える。例えば、「将来を考える」のような他動詞文に、「将来を」というヲ格目的語が現れているが、主体は「客体」の「将来」に働きかけの力も加えないし、「将来」に変化も生じないため、「将来」は客体と認めるものの、客体の下位事象を構成しない。この点では、本論文は、その後の研究と比べ、他動性に関して、春庭説がより有効であると考えられる。

次に、第二段と第三段の区別も有意義である。本居春庭は、同じ「然する」という（他）動詞を、目的語によって、「物を然する」と「他に然する」に分けている。本居春庭の後の時代になると、他動詞の目的語はものであるか、人であるかは、本居春庭ほどはっきり区別しなくなり、また、目的語マーカ―がヲであると固定して考える研究者が多い。「犬が太郎に噛み付く」のニ格は目的語マーカ―であるか否かについては、定論がない。

また、本居春庭の第五段は興味深い。「おのつから」なのに、第一段の「然る」と違い、「然せらる々」となる。普通「然せらる々」は受身と考えられるが、しかし、その主体は、第六段の「他に然せらる々」の受身と異なり、何かの外的力を受けたあと、おのつから動く・変化すると表現されている。これは、日本語の主動と受動というヴォイス間の曖昧さの反映であろう。この曖昧さは現代日本語にも残っている。奥津（1967）は自動化転形のところで、以下のことを述べている。

自動詞が含むhasam-という他動的行為の主体が誰かある筈なのだが、この場合は文の表面には現れなくなり、いわば、(29.1²³)の文が「非人格化」としてという効果を持つ。つまり、他動的行為の目的物であったものが主格をとって、あたかもおのずから然った如く事態が表現されるのである。

(奥津 1967 : 66)

「他動的行為の主体が誰かある筈なのだが」、その事態が受動態として表現されなく、「あたかもおのずから然った如く」表現される。つまり、受動態であるはずの事態が、「あたかも」主動態のように表現される。

影山 (1996) は「脱使役化」自動詞の意味上の使役主に関して、以下のことを述べている。

…対象物が自らその状態になるはずがない…対象物とは別の使役主が存在するはずである。ただし、その使役主の存在は意味的に推定されるだけで、統語的には証明できない。

(影山 1996 : 185-186)

つまり、意味上の使役主は意味的に推定されることは、事態が意味上では受動態であることを意味するが、それにもかかわらず、統語上では、事態が主動態として表現される。したがって、使役主の存在は統語的に証明できない。

奥津 (1967) と影山 (1996) は、意味上の受動的な事態が、なぜ統語上に主動態として表現されるか、そのギャップはどこから生じるかなどを問題としたが、本居春庭 (1828) は事実を記述するという立場から、このような事態の表現の仕方を動詞の六分類の中の一分類として認めている。

²³ (29.1) は「私ハ 栞ヲ 本ニ ハサム」という例文である。(奥津 1967 : 66)

2.2. 大槻文彦 (1897)

大槻の『広日本文典』(1897)は現代日本語文法の基盤を作ったと言えるほど影響力のある文典である。『広日本文典』(1897)における自他論は、使役と受身は動詞から切り離した方が混乱しないという点において大きな意義がある。また、大槻(1897)は使役と受身を助動詞の問題とし、動詞の問題とは別扱いにしている。つまり、本居春庭で区別しなかった動詞と「態」を区別するようにしている。以上は大槻の功であるが、大槻は動詞の自他の研究という分野で罪もある。大槻は和洋折衷といえども、動詞の自他に関しては、洋の「自・他」という二分を取り入れ、現代的な動詞の枠組みを立てている。しかし、その関係で、本居春庭の自他の六分法は後継者がいない。六分法から使役や受身など、混乱をきたすものを切り離し、より明確にシステムを整理する必要があるのは当然であるが、本居春庭の動詞の六分法の、他動性についての認識は、現代の他動性認識に負けない価値があることが大槻および大槻以来の研究者に重視されなかった。

また、2.1節でも述べたように、自動詞を「おのつから然る」と「みつから然する」にわけるといふ本居春庭(1828)の意味に基づいた二分法は、現代の非対格動詞と非能格動詞に近い分類である。本居春庭のこのような貴重な自動詞分類は、大槻(1828)に採用されていない。大槻のあまりにも大きな影響で、本居春庭の自動詞二分法はほとんど研究者に引き継がれていない。大槻(1828)から「非対格性仮説」が生まれるまで、自動詞をさらに二分することは提唱されなかった。大槻の文法は和洋折衷といわれ、和を伝承する責任があるにもかかわらず、自他論に関しては、和への重視が足りなく、洋を受け入れすぎる恐れがある。

2.3. 松下大三郎 (1923—1924)

本居春庭の後、松下大三郎の「動詞の自他被使動」(『国学院雑誌』1923—1924)の前の段階では、動詞は自他に二分し、他動詞はヲ格をとるといふ自他意識がだんだん落ち着いていた。ただ、大槻(1828)によって確立された自他の二分法は西洋流の文法によってもたらされたものであり、日本語の言

語事実にうまく当てはまらないところがある。それに伴い、自他、特に他動詞に関する論争があった。松下（1923－1924）がその論争について以下のよう
にまとめている。

「動詞の自他動に関し我が国現時の学者の意見は三派に分かれてゐる。一は実質派、二は外形派、三は懷疑派である。一の実質派は意義の実質によって自他動を区別しようとするもので例へば「人が酒を飲む」の「飲む」の様なもの
は他物を処置するのであるから他動だが「鳥が空を飛ぶ」「人が道を行く」の「飛ぶ」「行く」の様なのは「空」や「道」を処置しないから他動ではないという様な類である。二の外形派は意義の実質に拘らず、文字に現れた外形によって自他動を弁ずるもので、例へば「空を飛ぶ」の「飛ぶ」も「何々を」という客語を受けて居るから、意義の実質はどうでも、動詞は「酒を飲む」と同様他動詞であると論ずる。三の懷疑派は自他動の区別を疑ふもので動詞に自動他動などという厳正な区別はないといふのである。」

（松下 1923－1924 : 13²⁴）

松下（1923－1924）は、実質派が主張した「意義の実質によって自他動を分けようとするのは」「動詞の自他動ではなくて事件の自他動である」（松下 1923－1924 : 13）と鋭く指摘した。本論文の枠組みから言い換えれば、日本語の自他は、「事件」（事象構造）をうまく反映できない。事象構造と自他動詞の間に、重なるところもあるし、ずれているところもある。ヲ格の問題もそうであるし、本論文で扱う現象もそうである。

松下（1923－1924）はこのずれを処理するため、まず自他動詞を「対称的自他動」と「単独的自他動」に分けて整理した。この区別は、後の有対自動詞、無対自動詞と、有対他動詞、無対他動詞の先駆であると思われる。

その後、意志性に基づいて、「意志的他動」と「自然的他動」に分け、また、エネルギーの観点（本論文の枠組みからみれば「働きかけの力」の観点）に

²⁴ ページ数は須賀一好・早津恵美子編『動詞の自他』（1995）による。以下も同様

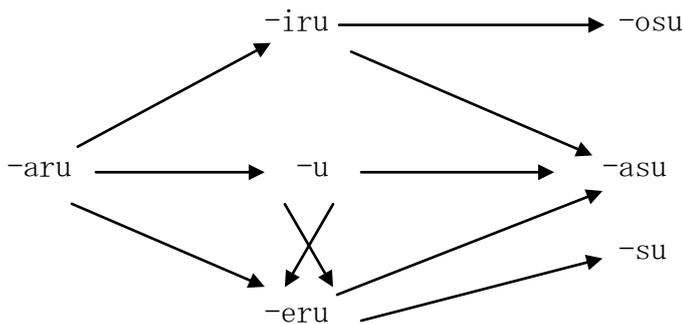
基づいて、「形式的他動」（形式上ヲ格を取る）と「実質的他動」（対象へ働きかける）に分けている（松下 1923-1924 : 23-25）。

さらに、松下（1923-1924）は、単念・複念の概念区分に基づいて、完全他動と使役他動、被動性自動詞と直接自動という語彙部門の動詞と、統語部門の使役・被動（受身）を分けようとしている。

日本語の形式（統語）と実質（意味）にギャップがある。たとえば、「空を飛ぶ」という文は、形式上ヲ格を取るにもかかわらず、実質上動作がヲ格名詞「空」に働きかけない。ヲ格名詞「空」を目的語と認めるか否かの問題は、形式と実質の間のギャップから生じる問題である。そのギャップを明らかに指摘し、形式と実質のそれぞれの基準を立て、自他のシステムを整理したのは松下（1923-1924）の意義である。

2.4. 佐久間鼎（1936）・西尾寅弥（1954）

1930年代以降、日本語の自他動詞の研究は、また一度形態に注目が集まっている。ただ、簡単に形態の対立を整理し、二列に並べることにとどまらず、各形態間の派生関係も問われた。佐久間鼎の『現代日本語の表現と語法』（1936）は、語末に現れる音形に注目し、次のように整理している。



（佐久間 1983 : 137²⁵）

「＜アル＞が特に自動詞的で、＜アス＞が特に他動詞的なのに対して、＜ウ＞と＜エル＞とは対立の模様でどっちにもなる」と述べている。佐久間は

²⁵ 本論文の佐久間（1936）に関するものは、『現代日本語の表現と語法（増補版）』（1983）による。

自他対応の形態の分布を静態的に記述するだけでなく、派生という動的な面からも取り上げている。

西尾寅弥の「動詞の派生について－自他対立の型による－」（1954）はさらに詳しく、<-eru>－<-aru>型による自動詞の派生を中心に、動的な観点から自動詞と他動詞の関係を論じている。具体的には、「受かる」という自動詞は、「受ける」という他動詞から派生されたと主張している。以下は西尾（1954）からの引用である。

…国語の動詞には

あげる－あがる かける－かかる かえる－かわる
かさねる－かさなる とめる－とまる まげる－まがる

などの如く、

<-eru>（他・下一）－<-aru>（自・ラ四）

（< >内の－は自他共通の部分を示す）

という形の自動詞・他動詞の対立の例が数多く存在する。…そして、「受かる」はこのような多数の自他対立への類推 Analogy によって「受ける」から派生したものと考えられる。…これに似た例が他にもある。たとえば、

つとめる（勤） つとまる
まける（負） まかる
いいつける（言付） いいつかる

（西尾 1954 : 42－43）

佐久間（1936）、西尾（1954）は多くの動詞の中から自他対応のあるものを拾い出し、それを二列に並べることにとどまらず、自動詞の語幹に、ある形態素を加えることによって、他動詞が作られる、いわゆる派生という動的な考え方から自他動詞を考察・分析している。

2.5. 奥津敬一郎 (1967)

奥津敬一郎の「自動化・他動化および両極化転形—自・他動詞の対応—」(1967)は、まず、自他対応の認定基準を規定している。前述した松下(1923—1924)は、有対と無対の自他動詞を明らかにしたが、奥津は有対であることは、対応を持つことと同じではないと明らかにした。有対の自他動詞の中で、以下のような対応を示すものだけが自他対応と認められる。

- (1) N1 ga N2 o [+V, +Transitive, X, Y]
N2 ga [+V, -Transitive, X', Y']

(奥津 1967 : 61²⁶)

松下(1923—1924)より進んでおり、奥津(1967)の(1)の規定はその時代において有意義である。しかし、その規定によって除外されたものをどう処理すればいいのかについては、奥津(1967)は言及していない。また、こう規定したら、動詞は文における動詞の具体的な用法に限られるようになったが、レキシコンの動詞をどう処理すべきかのことも、無視している。

次に、奥津(1967)は動態論(派生)の立場に立って、日本語動詞の自他対応には、以下の三つの派生方向があると主張している。

- (2) i 自動詞から他動詞への転化＝他動化
ii 他動詞から自動詞への転化＝自動化
iii ある共通要素から自動詞および他動詞への転化＝両極化

(奥津 1967 : 63)

奥津(1967)の自動化、他動化、両極化は、西尾(1954)よりさらに一歩進んで、形態的な派生だけではなく、意味的な派生も意味している。たとえ

²⁶ ページ数は須賀一好・早津恵美子編『動詞の自他』(1995)による。以下も同様。

ば、奥津（1967）は「乾く—乾かす」という自他のペアは意味的にも派生関係にあると主張している。以下は奥津（1967）からの引用である。

「乾カス」の場合、kawak-までは主語たる「私」の行為ではなく、目的語たる「着物」の上に生じた変化であり、「私」が関わるのは「着物」に対してこの変化を生ぜしめたということであって、直接には-as-に関係するのである。つまり、「着物」は一方ではkawak-の主語として働き、他方では-as-の目的語として働いている。…そこでこの特色をより適切に表現するためには、次の様な「入れ子転形」(embedding)を使うのがよい。

(27.1) 私ハ 着物ヲ (着物が kawak-) -as-ita⇒

(27.2) 私ハ 着物ヲ kawakas-ita

…つまり、これは単なる対応ではなく、他動詞と見える「乾カス」の中には自動詞の「乾ク」が含まれており、他動の-as-がつくことによって他動化する様にみえるが、実は自動詞を含む文と、-as-を含む他動詞文との複合体であって…

(奥津 1967 : 64–65)

自動詞と他動詞の間の意味関係は、「他動詞と見える「乾カス」の中には自動詞の「乾ク」が含まれており」、他動詞「乾かす」は自動詞「乾く」から派生されていると奥津（1967）が主張している。また、他動化と逆方向にあるのは、自動化である。たとえば、「はさまる」という自動詞には、他動詞「はさむ」が含まれている。自動詞「はさまる」は他動詞「はさむ」から派生される。その自動化辞は-ar-である。

奥津（1967）が指摘した他動化辞-as-と自動化辞-ar-は、佐久間（1936）が指摘した「<アル>が特に自動詞的で、<アス>が特に他動詞的」であるということと一致している。その後の影山太郎の『動詞意味論』（1996）もこの二つの接辞に焦点をあてて、自他動詞の派生関係を論じている。佐久間—

奥津一影山は、理論や枠組みが違うものの、形態を中心に、意味を形態に結びつけようとする点では、同じである。前述したように、日本語の自他動詞の形態は意味を完全に反映できなく、反映する部分とずれている部分がそれぞれある。したがって、形態を中心にアプローチすると、意味の一部だけを取り扱うことができるが、意味を全体的に把握することができない。たとえば、奥津（1967）は「はさまる」は「はさむ」から派生され、「入れ子転形」の形で他動詞「はさむ」を含んでいると述べたが、「この付近の地層は風化した泥岩層ですが、所々に白っぽい色をした薄い地層が挟まります。これは火山灰がかたまった凝灰岩です」「ライン川周辺の領土（ラインラント・ヴェストファーレン）とベルリンを中心とする国の中央部の間にハノーファーなど他国が挟まっていた」のような文に出てくる「挟まる」は、自然現象をあらわすため、他動的行為の「はさむ」の結果とは解釈しにくい。したがって、派生自動詞は他動詞を含む説、さらに-ar-は自動化辞という説も疑わしくなってくる。

本論文は、文に出てくる動詞、あるいは、動詞の具体的な用法を越えて、レキシコンの中の動詞そのものを詳しく分析・記述する必要があると考えられる。言い換えれば、（意味構造の）中に他動詞が含まれている「挟まる」（本に葉が挟まる）とそうでない「挟まる」（所々に地層が挟まる）を統一的に説明できる説を立てる必要があると主張する。

2.6. 早津恵美子（1989）・佐藤琢三（1994a）

前述した松下（1923－1924）は「対称的自他動」と「単独的自他動」を区別しようという提案で、自他動詞の有対と無対の区別を初歩的に提示している。自他動詞の有対と無対についてさらに詳しく記述したのは早津恵美子の「有対他動詞と無対他動詞の違いについて－意味的な特徴を中心に－」（1989）である。早津（1989）は、

「壊す、伸ばす、かける、はずす、埋める、回す、決める」などは、各々「壊れる、伸びる、かかる、外れる、埋まる、回る、決まる」に対応する有対他動詞であり、「置く、悲しむ、話す、考える、占める」などは無対他動詞である。

(早津 1989 : 179²⁷)

と述べている。そして、有対他動詞と無対他動詞の違いについては、以下のように指摘している。

- (3) [A]有対他動詞には、働きかけの結果の状態に注目する動詞が多い。
[B]無対他動詞には、働きかけの過程の様態に注目する動詞が多い。

(早津 1989 : 179)

さらに、構文上では、「反復可能性」、「副詞的な補語の種類」、「複合動詞の前項要素と後項要素」、「動作主名詞の派生」などの手段を用いて、(5)の主張を裏付けている。以上のような「結果注目」か「過程注目」かの考えは、奥田の一連のアスペクト研究の成果を踏まえたと思われる。言い換えれば、早津(1989)は自他動詞の研究をアスペクト研究と結びつけようとしたものである。

自動詞と他動詞は、普通は項構造(argument/thematic structure)・事象構造(event structure)と関連するもので、項構造・事象構造はアスペクト構造とは動詞の別々の構造である。動詞の項構造とは、簡単に言えば、動詞は一項をとるか、二項を取るかのことである(たまに、三項を取る動詞もある)。一項動詞は普通自動詞であり、二項動詞は他動詞である。一方、動詞のアスペクト構造は、時間と関連するものであり、項の数と直接関係ないはずである。しかし、日本語の他動詞は、有対であるか、無対であるか、言い換えれば、交替をするかしないかは、早津が指摘したように、結果に注目するか過程に注目するかという点で違うので、日本語の自他動詞を研究する際、単なる項構造では扱いきれず、アスペクト構造を同時に見なければならない

²⁷ ページ数は須賀一好・早津恵美子編『動詞の自他』(1995)による。以下も同様。

と思われる。項構造とアスペクト構造を結び付けて自他を考察するのが、早津（1989）の意義である。

早津（1989）に問題点がある。まず、「多い」「少ない」という記述自体が、傾向性を示すにとどまっている。また、早津（1989）自身は、この傾向性の発見によって、動詞の自他対応に関して何が明らかになったかという原理的説明が十分ではない。

佐藤琢三の「動詞の自他対応と様態指定」（1994a）は早津（1989）の問題点を補い、さらなる記述をしている。佐藤（1994a）は「動作過程の様態指定（動作様態の透明性と動作様態の特定性）」と「結果の事態の実現」という二つの特徴づけを用いて、対応の原理に基づいた意味構造の定式化を行っている。具体的には、相対（有対）他動詞は、動作過程の様態を指定してはいけない。また、相対（有対）他動詞は「結果の事態の実現」を含んでいるという特徴がある。一方、絶対（無対）他動詞は動作過程の様態に関しても、結果の事態の実現に関しても、一定の特徴を有しているとはいいがたいと主張している。

佐藤（1994a）には問題点がある。「動作過程の様態指定」と「結果の事態の実現」を判定する強いテストを提示していない。たとえば、佐藤（1994a）は、有対他動詞「つける」は、「太郎がハケをペンキにひたして、壁に着色した場合」でも、「太郎が壁にペンキをつけた」と言えるし、「太郎がバケツ入りのペンキを壁に投げかけて着色した場合」でも、「太郎が壁にペンキをつけた」と言えると述べている。動作者「太郎」がどの様なやり方で動作しても、意図した結果を実現していれば問題はない。それに対して、無対他動詞「塗る」は「太郎がハケをペンキにひたして、壁に着色した場合」では、「太郎が壁にペンキを塗った」とは言える一方、「太郎がバケツ入りのペンキを壁に投げかけて着色した場合」では、「太郎が壁にペンキを塗った」とは言えない。有対の「つける」は動作主の動きのあり方・様態を指定していないのに対して、無対の「塗る」は動作主の動きのあり方・様態を指定している。しかし、この結論は一般化できるのか。たとえば、「切る」も有対他動詞である。「切る」を「動作過程の様態を指定しない」、つまり、「動作過程の透明性」で特

徴づけることができるのか。『スーパー大辞林』は、「切る」について、「刃物などを使って、一続きのものを分離させる」と解釈している。他の辞書を引くと、ほとんど「刃物を使って」という解釈がついている。「刃物を使って」ということは、「切る」の動作主の動きの様態指定と認められないのか。「切る」は動作主の動きの様態を指定していないと主張するなら、それと「塗る」のような様態を指定している動詞との明確な線引きをしなければならない。つまり、判別テストが必要である。しかし、佐藤（1994a）はテストを提示していない。

問題点があるにもかかわらず、早津（1989）と佐藤（1994a）は、自他対応を「一項」、「二項」という項構造の観点だけではなく、「過程」と「結果」というアスペクトの観点から扱うという点において、本論文にとって非常に有意義である。

3. 意味中心の自他交替に関する研究

英語には交替現象がしばしば起こる。たとえば、英語の心理動詞は以下のような振る舞いをする。

- (4) a. John likes long novels.
- b. Peter fears dogs.
- c. Mary worries about the ozone layer.
- (5) a. Long novels please John.
- b. Dogs frighten Peter.
- c. The ozone layer worries Mary.

心理動詞に限らず、英語には dative alternation、locative alternation、against/with alternation などの交替現象がある。

- (6) a. John gave the newspaper to Tom.
- b. John gave Tom the newspaper.

- (7) a. John loaded the boxes onto the truck.
b. John loaded the truck with boxes.
- (8) a. John hit the stick against the fence.
b. John hit the fence with the stick.

さらに、自他（使役）交替の現象もある。

- (9) a. John broke the window.
b. The window broke.

以上の各種の交替は、同じ問題を抱えている。同じ意味役割（たとえば (4a) の John と (5a) の John）は正反対の Linking パターン（John→主語－John→目的語）を同時に持つのであろうかという問題である。この問題に対して、少なくとも二つの立場の解決案がある。立場Ⅰ：John の意味役割は確かに一つであり、それが統語に linking したあと、統語上の操作で二つの統語表現に分かれる。立場Ⅱ：John の意味役割はそもそも一つではない。一つのように見えるが、実際は (4a) における John は、(5a) における John と同質のものではなく、二つである。二つの意味役割はそれぞれ統語に linking した結果、当然二つの統語表現が現れる。

Belletti & Rizzi (1988) は立場Ⅰに立つが、あまり採用されない立場である。

一方、Pesetsky (1987) (1995)、Dowty (1991) は立場Ⅱに立つ。心理動詞を例にすると、(4a) の John は意志と意識をもつ存在 (animate and sentient being) であり、その意味役割は agent である。(5a) の John は状態変化を経験 (undergoing a change of state) するものであり、その意味役割は patient である。具体的な証拠は、A：(5) の各文は状態変化という意味が読み取れるのに対して、(4) の各文はそれが読み取れない。B：次の例における article は、(10a) では target であるのに対して (10b) では必ずしも target ではない。

(10) a. John is angry at the article.

b. The article angered John.

(10a) の article は John' s anger の target でなければならない。それに対して、(10b) の article は John' s anger の cause ではあるが、必ずしもその target ではない。article そのものが大好きで、ただその著作権などに腹が立つという意味も読み取れる。

本研究は以上の証拠によって立場Ⅱに従う。つまり、(4a) の John は (5a) の John と意味役割が違い、(4a) の John の意味役割は agent であり、(5a) の John の意味役割は patient であることを認める。言い換えれば、統語上の主語と目的語は、そもそも違う意味役割からマッピングされてきたものである。ただし、L&RH (2005) が指摘したように、このような分析を採用する人は、(4a) と (5a) や (6a) と (6b) などの交替している二文間の共通点と相違点をそれぞれ明らかにしなければならない。L&RH (1988) は locative alternation について以下のように分析している。まず (7) を (11) に再掲し、そしてその LCS を (12) のように示す。

(11) a. John loaded the boxes onto the truck.

b. John loaded the truck with boxes.

(12) a. load: [x CAUSE[y TO COME TO BE AT z]/LOAD]

b. load: [[x CAUSE[z TO COME TO BE IN STATE]] BY MEANS OF [x CAUSE[y TO COME TO BE AT z]/LOAD]

(12) で示したように、(11b) の with 文は (11a) を含意するが、その逆は成り立たない。(12a) の LCS は (12b) の LCS の一部分にあたり、BY MEANS OF の部分加わったら、(12b) になる。言い換えれば、交替する二つの文は、共通するところは (12a) の部分であり、違うところは (12b) は BY MEANS OF の部分加わっているところである。

この分析は、Pinker (1989) によって dative alternation と自他 (使役) 交替に広げられた。以下の (13) は交替している自他動詞の LCS である。他動詞の LCS は自動詞の LCS と (13a) を共有する。(13a) に [[x ACT ON y]CAUSE の部分が加わったら、(13b) となる。

- (13) a. 自動詞: [y BECOME[y BE AT z]/ROOT]
b. 他動詞: [[x ACT ON y]CAUSE [y BECOME[y BE AT z]/ROOT]

(13) の自他二文の意味的關係は広範に受け入れられている。(13) を用いて日本語の自他を説明しようという先行研究が多数ある。代表的には、影山太郎の『動詞意味論—言語と認知の接点—』(1996) が挙げられる。影山 (1996) に関しては、本論文の第七章で詳しく後述する。

第三章 Causal Relationship

動詞の意味は semantic frame によって決まるということは先行研究で統一的に認められている。Fillmore (1977) は、「意味はフレームに対応する (Meanings are relativized to frames)」としている。この観点は Goldberg (2010) に取り入れられている。Goldberg (2010) は、「each word sense evokes an established semantic frame.」と指摘している。

動詞の semantic frame にどのような制約があるのか。Croft (1991) は「causal chain」を提案し、動詞の semantic frame の制約について、かなり説明力のある解決案を提示している。Croft (1991) は「a possible verb must have a continuous segment of the causal chain in the event ICM [idealized cognitive model, aka frame] as its profile and as its base」と述べ、動詞は simple events、ないしは、各下位事象が[cause (引き起こし)]の関係にある complex events (complex events which the subevents are causally related) しか表すことができないと規定している。言い換えれば、Croft (1991) はすべての動詞の semantic frame は[cause]の関係で綴る下位事象の組み合わせであると規定している。

また、LCS (Lexical Conceptual Structure、「語彙概念構造」と訳されている) という動詞の意味構造の記述の仕方が広く採用されてきた。LCS を用いて、自動詞と交替をなしている他動詞の意味構造を記述する際、CAUSE という関数を用いるのが一般的である。

(1) [x ACT ON y] CAUSE [y BECOME [y BE AT z]]

[x ACT ON y]という節と [y BECOME [y BE AT z]]という節を結びつける関数は CAUSE である。管見の限り、今までの研究では、CAUSE だけが他動詞に関わる関数としてたてられてきた。Croft (1991) の主張と LCS の CAUSE という唯

一の関数からみると、従来の先行研究は動詞の各下位事象の間の[-cause]の関係を認めていないとわかる。しかし、詳しく観察すれば、[-cause]の関係はないわけではない。たとえば、Goldberg (2010) が return と appeal という動詞を挙げ、上記の主張の反論を出している。

- (2) a. Obama and Clinton returned from the campaign trail to vote.
www.opencongress.org/bill/110-h2381/
b. He appealed the verdict.
mercury.websitewelcome.com/4

(Goldberg2010 : 6)

「return (帰る)」は、あるところに行くということが前提となっている。どこかへ行かなければ、「帰る」ことは成り立たない。しかし、前件の「行く」は後件の「return」を引き起こさない。前件と後件の間には、[cause]の関係がみられない。「appeal」に関しても同様に考えることができる。このことから、Goldberg (2010) は以下のように述べている。

Croft' s (1991) proposed constraint cannot be correct as it stands, since there exist many verbs whose profiled event is not causally related to an event that is part of its background frame.

(Goldberg2010:5)

本論文は、Goldberg (2010) が挙げた例以外にも、多数多量の[-cause]の関係に基づく動詞が存在すると主張する。しかし、この主張を導くために、まず[+cause][-cause]とは何かを明らかにしなければならない。本章の第1-3節では、先行研究を踏まえた上で、[cause]の関係の判断基準を明確に立てる。そして、第4節でこの判断基準を用いて日本語の動詞の実例の動向をチェックする。チェックした結果を先取りに述べると、先行研究が主張した各下位事象の間の[+cause]の関係は確実に存在する。しかし、[+cause]の関

係はすべての動詞に当てはまらない。[+cause]の関係が存在するとともに、[-cause]の関係も存在する。[+cause]の関係は多くの先行研究に論じられてきたため、本論文はほとんどの先行研究に論じられていない[-cause]の關係に焦点を当てて考察・分析する。そして、[+cause]の關係と[-cause]の關係を合わせて、対応している自動詞と他動詞全般に対する理解を深めていく。

1. Causal Chain

1.1. Croft (1990, 1991)

本章は causal relation の判断基準を明確に立てることを目指している。causal relation についての研究は多数あるものの、causal relation あるいは causation そのものはいったい何のかということを明確に規定するものがまれである。Goldberg (2010) は causation の定義づけについて以下のように述べている。

It is not clear that we should expect any categorical definition for “causation” since such definitions are rarely available in any domain (Rosch 1975; Lakoff 1987; cf. also Croft 1991; Espenson 1991 for relevant discussion in the domain of causation in particular) The general issue of causation has been debated for centuries, and we are not likely to get to the bottom of it here.

(Goldberg2010:4)

定義することが難しいにもかかわらず、Goldberg (2010) は以下のことを述べている。

At the same time, it is possible to make some progress on the questions we set out to address by focusing on fairly clear cut cases.

(Goldberg2010:4)

そして、Goldberg (2010) は causation を以下のように定義している。

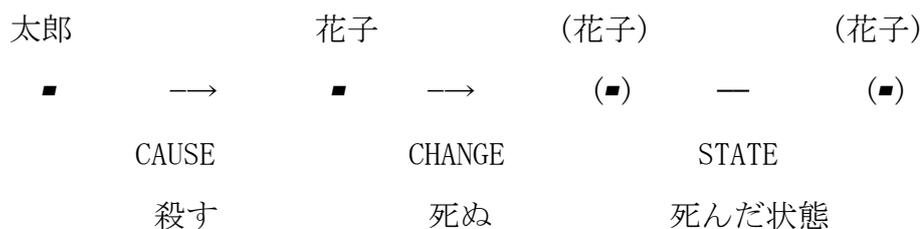
I will consider any event that is construed to be sufficient to lead to a new state or event to be a cause.

(Goldberg2010:4)

Goldberg (2010) の causation の定義は前件が必然的に後件を引き起こすという定義である。この定義は物理的な事象構造に基づいていると考えられる。本論文では、物理的な事象構造をもっとも詳しく分析・記述した Croft (1991) の causal chain 説を採用する。以下では、本論文の関心にかかわる範囲で、Croft (1991) を中心とした一連の研究を紹介する。

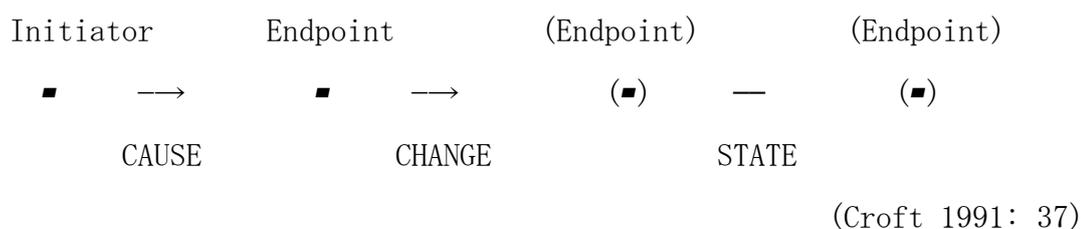
物理的な事象構造における各参与者間の力の伝達・移動の関係を研究対象とする説は、最初に Talmy (1976, 1988) により force-dynamic という名で提案され、そして、その後、Croft (1990, 1991)、Jackendoff (1990)、Langacker (1990, 1991) などにより発展されてきた。その中、Croft の一連の研究は causal chain を提案し、force-dynamic 説を明確にモデル化したため、重要な意味を持つ。causal chain とは、簡単に言えば、ある事象の各参与者 (participants) の間の力の伝達・移動 (force dynamic) で、各参与者が一つの chain に結ばれ、causal chain を構成するという説である。「太郎が花子を殺した」を例にして説明すると、事象の参与者は「太郎」と「花子」である。「殺す」という力が、太郎から、花子に伝達・移動する。花子はその力を受けて、「死ぬ」という変化を被る。図で表示すると、以下のようになる。

(3) 太郎が花子を殺した。



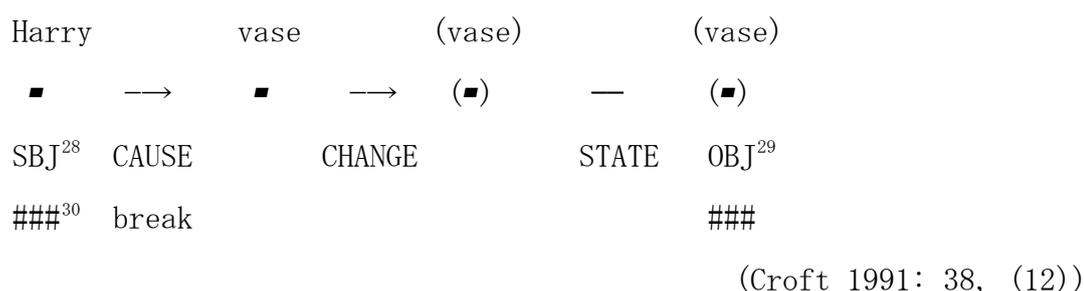
力を発するもの、つまり、causal chainの開始点を initiator と記し、力を受けるもの、つまり、causal chainの終止点を endpoint と記すと、(3)を(4)のように抽象化することができる。この抽象化は典型的な他動詞事象のモデル化でもある。

(4) Idealized Cognitive Model of a Simple Event:



(4)における点(■)は参与者である。矢印(→)は力の伝達・移動関係 (relationship of transmission of force) を表す。二つの参与者を組み合わせたら、節 (segment) になる。非矢印の直線(—)は非使役関係 (noncausal (stative) relation) を表す。()に入っている点 ((■)) は、当参与者は前の節における参与者と変わらないことを表す。Croft は以下の具体例をあげ、(4)のモデルをさらに詳しく説明している。

(5) Harry broke the vase.



²⁸ 「SBJ」は主語を指す。

²⁹ 「OBJ」は目的語を指す。

³⁰ 「###」は統語構造に現れる動作主と対象を標記する。

(5) の causal chain には三つの節がある。三つはそれぞれ、(i) Harry acts on the vase, (ii) the vase changes state, and (iii) the vase is in a result state (i. e. broken)である。事象の参加者は二つある。Harry と vase である。参加者間の関係は、まずは Harry と vase の間に、力の伝達関係がある (Harry → vase)。そして、vase の内部において、変化がある (vase → (vase)) iii 節において vase は変化しない ((vase) — (vase))。

Croft によると、(4) をはじめとした causal chain には、以下の四つ特徴がある。

(6)

- a. a simple event [i. e. what is named by the verb] is a (not necessarily atomic) segment of the causal network;
- b. simple events are nonbranching causal chains;
- c. a simple event involves transmission of force;
- d. transmission of force is asymmetric, with distinct participants as initiator and endpoint

(Croft1991:173)

causal chain というアプローチの特徴は、事象の参加者間の (力の伝達) 関係を明らかにすることである。また、Croft (1991) によると、causal chain は意味構造を決めるものであるため、参加者は causal chain のどこに位置するかはとても重要である。参加者は、causal chain 上の位置によって、その意味役割が決まる。力を発するものは、つまり、causal chain の開始位置にあるものは、通常、動作主体 (agent) である。力を受けるもの、つまり、causal chain の終止位置にあるものは、通常、動作客体 (patient) である。ある事象に動作主が存在すれば、動作主が initiator であり、文の主語にリンクするのも動作主である (例 (3))。ある事象に動作主が存在しない場合、経験者が動作主体の代わりに、causal chain の開始位置にある。つまり、initiator になる。この場合、主語にリンクするのは経験者である (例 (7))。経験者も

存在しなければ、原因が initiator になる。この場合、主語にリンクするのは原因である。(例(8))。さらに、原因さえも存在しなければ、道具が initiator になる。この場合、主語にリンクするのは道具である (例 (9))。

(7) ジョンは、交通事故にあった。 (経験者)

(8) 父の死が花子の運命を変えた。 (原因) (天野 1987 : 151)

(9) 小石が蟻の巣穴を塞いだ。 (道具) (田川 2004:9)

causal chain には潜在的に、動作主、経験者、原因、道具という順番で initiator の候補者が並んでいる。これらの候補者はいずれも働きかけの力の発する能力を持つものであるため、事象の initiator になる可能性がある。順番の前の候補者が優先的に initiator の位置を占めるが、その候補者が当該する事象に存在しないと、次の候補者が initiator の位置を占める。

このように力の伝達・移動という観点から causal relation を定義することは、原理的に説明力がある。物理的な世界で力の伝達・移動があれば、その力によって、前件は後件の変化を引き起こすので、前件と後件は[+cause]の関係にある。物理的な世界で力の伝達・移動がなければ、前件は後件を引き起こすことができなく、両者は[-cause]の関係にある。

1.2. Causal Chain というアプローチを取り上げる理由

まず、causal chain というアプローチを採用すると、リンキングの問題がうまく解決できる。Baker (1988) が The Uniformity of Theta Assignment Hypothesis (UTAH) という仮説を提案している。UTAH は Baker (1988) によると、以下のようなになる。

Identical thematic relationships between items are represented by identical structural relationships between those items at the level of D-structure.

(Baker1988:46)

Baker (1988) の UTAH は、一つの統語成分は一つの意味役割から投射され、一つの意味役割は一つの統語成分にしか投射しないという仮説である。

しかし、第二章第 3 節で提示して心理動詞などの例は UTAH の反例になりそうである。たとえば、心理動詞の例において、同じ意味役割が正反対の Linking パターンを同時に持つようである。心理動詞の例を以下の (10) (11) に再掲する。

- (10) a. John likes long novels.
b. Peter fears dogs.
c. Mary worries about the ozone layer.
- (11) a. Long novels please John.
b. Dogs frighten Peter.
c. The ozone layer worries Mary.

(10a) も (11a) も「ジョンは小説が好きだ」という意味を表し、John の意味役割が変わらないにもかかわらず、統語上では John は (10a) において主語の位置にあり、(11a) において目的語の位置にある。(10) と (11) からみると、意味役割は統語成分と一対一の間関係を保たないように見える。それで、UTAH の反例になる。

また、同じ「主語」という統語成分に投射する意味役割も違うようである。たとえば、

- | | |
|---------------------|------|
| (12) a. 太郎が花子をなぐった。 | 動作主 |
| b. 霧が太郎の視界をさえぎった。 | 自然現象 |
| c. 小石が蟻の巣穴を塞いだ。 | 道具 |
| d. 過渡の野心が彼の寿命を縮めた。 | 原因 |

(田川 2004 : 9³¹)

³¹ 例文番号を含め、一部改変。

(12) からみたら、主語という一つの統語成分に、「動作主」「自然現象」「道具」「原因」という四つの意味役割が対応している。意味役割と統語成分とは一対一の間係を保たないようである。(10) (11) や (12) のような UTAH の反例はリンキングの問題となっている。

(12) のように、主語にリンクする意味役割は一見ばらばらなようであるものの、causal chain の観点から改めて見れば、それらの意味役割はすべて causal chain 上の initiator という一つの意味役割にまとめられる。それで UTAH は保持され、リンキングの問題はうまく解決される。これが causal chain というアプローチを取り上げる理由の一つである。

causal chain というアプローチを取り上げる二つ目の理由は、このアプローチが明らかなモデルを提示している。Levin&RapaportHovav (2005) が causal chain というアプローチについて以下のように評価している。

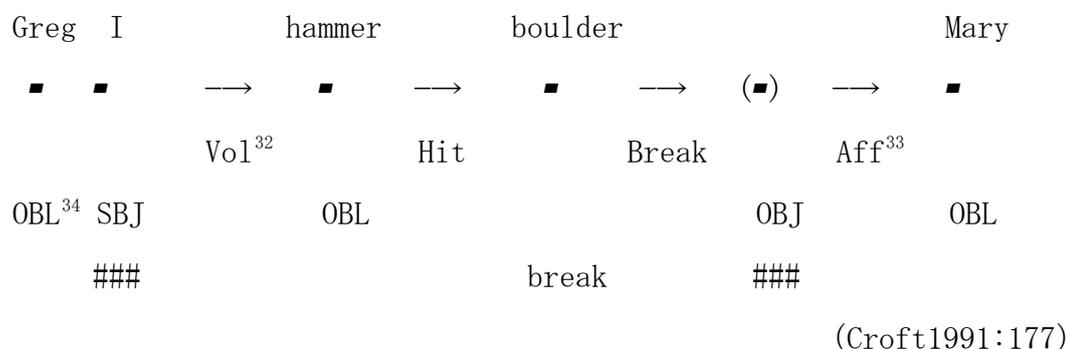
that the causal chain approach is different from semantic role approaches in one very crucial way: it delineates an explicit model of event structure and organizes the relationships between individuals in an event in a way that semantic role-based accounts cannot.

(Levin&Rapaport Hovav2005:119)

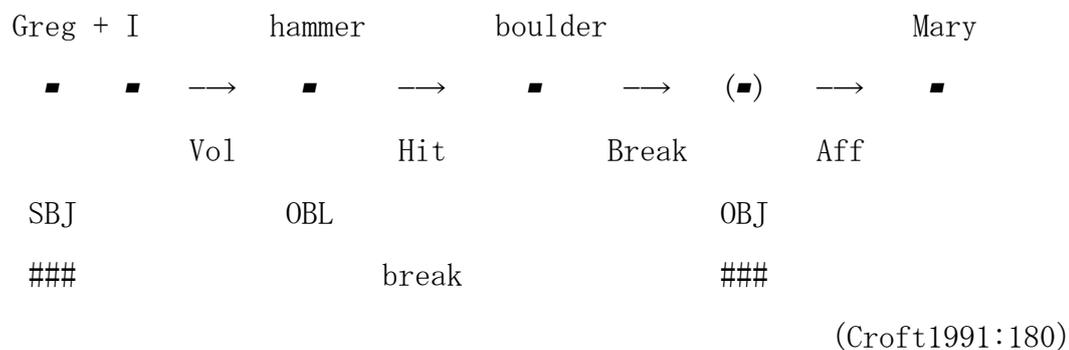
事象の各参加者がばらばらに存在するわけではなく、一つのチェーンに結び付けられることで、モデル化されているという点においては、causal chain というアプローチは他のアプローチより優れている。

causal chain というアプローチを取り上げる理由はもう一つある。言語表現は、文化や認知によって違う。しかし、物理的な力の伝達・移動は、客観的なものであり、文化や認知によって変わらない。そのため、物理的な力の伝達・移動という causal relation の判断基準は客観的であり、操作しやすい基準であると考えられる。たとえば、Croft(1991)は、以下の各文を同じ causal chain を用いて分析している。

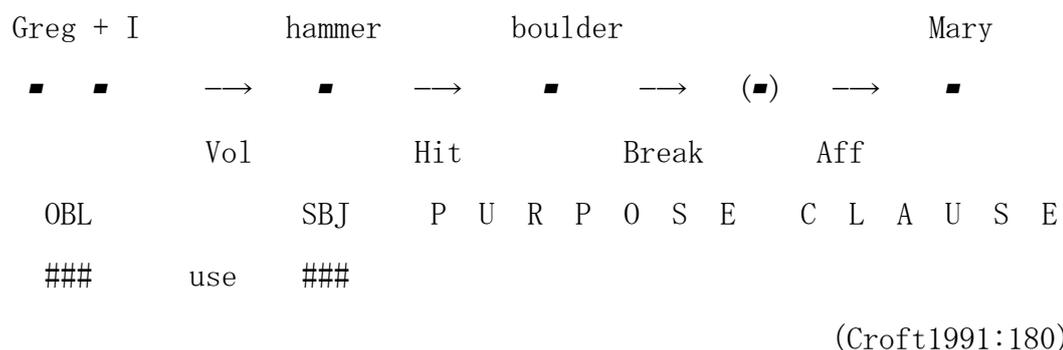
(13) I broke the boulder with Greg for Mary by hitting it sharply with a hammer.



(14) Greg and I hit the boulder with a hammer(breaking it).



(15) A hammer was used by Greg and me to break the boulder for Mary.



³² Vol arc という。Vol arc は主に causal chain 上の動作主の節を指す。

³³ Aff arc という。Aff arc は主に causal chain 上の被影響者（客体）の節を指す。

³⁴ 「OBL」は斜格を指す。

(16) The boulder broke into two pieces from the impact of the hammer.

Greg	I		hammer		boulder		Mary
■	■	→	■	→	■	→	(■)
			Vol		Hit		Break
			Change				
	0	B	L		SBJ		OBL
					###	break	###

(Croft1991:181)

(13) – (16) の各文は、統語構造が異なる。たとえば、Greg という参加者は、(13) においては斜格 (with Greg)、(14) においては主格 (Greg and I)、(15) においては by phrase (by Greg and me) として出現し、そして (16) においては出現しない。統語構造が異なるにもかかわらず、各文の背後にある物理的な事象構造が同じである。統語的にどう変わっても、物理的な事象構造が変わらなければ、causal relation は変わらない。また、統語構造はなぜ異なるかということ、事象構造のどの部分をプロフィールして言語化するかによって、統語構造が違って来るからであると Croft (1991) が主張している。

このような客観的な判断基準を立てると、各言語間の差違も処理しやすくなる。たとえば、

- (17) a. この番組はご覧のスポンサーの提供でお送りします。
 b. This part of the program is (was) brought to you by P&G.
 c. 本 節目 由 步步高智能手机 独家 赞助。
 この 番組 によって スポンサー名 だけ 援助する・される

以上の三つの言い方は当該する言語において、唯一の言い方ではない。たとえば日本語では、「この番組はご覧のスポンサーが提供します」のような他の言い方を作って、英語や中国語に対応しようとする、不可能ではない。ただし、(9a, b, c) は当該する言語において、当状況で一番観察される言い方

である。言い換えれば、その状況の下で、当該する言語が一番自然に選択する言い方である。

日本のテレビ番組をみると、一番よく耳にするのは (17a) の言い方である。(17a) の文の述語は「お送りする」である。「お送りする」という動詞の動作主は何なのかを考えると、アナウンサーないしアナウンサーが代表するテレビ放送局がそれに当たる。同じ状況で同じことを表す際、英語は (17b) になる。(17b) の述語は be brought であり、bring という動詞の動作主は何なのかを考えると、スポンサーがそれに当たる。また同じ状況で同じことを表す際、中国語は (17c) になる。(17c) の述語は「赞助 (援助する・提供する)」であり、「赞助」の動作主は何なのかを考えると、スポンサーがそれに当たる。

物理的な事象としては、(17a) (17b) (17c) には違いはない。まず、事象の参与者として、スポンサーがいて、そのスポンサーは経済的な援助などを出す。また、番組制作会社が存在するかもしれないが、その参与は今扱っている三つの言語ではどれも触れていないので、ここでは番組制作会社の存在を無視することにする。そして、テレビ番組が制作などによってできる。さらに、テレビ放送局が参与者として存在し、番組を放送する。最後に、テレビ番組を見る観客がいる。スポンサーから観客までの力の移動はどの国でも同じであり、どの言語で表現しようとしても、その物理的な力関係は変わらない。しかし、言語的に報告しようとするとき、事象の中のどの参与者に関心を持ち、どれを主語として選択し、またそれに応じてどの動詞を選択するのは言語によってかなり違う。

英語の (17b) においては、スポンサーと番組と観客が選ばれた。最初の起動力(お金を出す)を発する実体のスポンサーは agent、番組は theme/patient、また観客の you は与格 (oblique) として捉えている。英語のこの表現には、テレビ放送局について言及していない。一方、日本語の (17a) においては、番組、スポンサー、テレビ放送局と観客が選ばれている。最初の起動力(お金を出す)を発する実体のスポンサーは日本語では agent として捉えられていない。スポンサーに「提供」を加えて、そして「スポンサーの提供」全体を原因・道具のデ格として捉えている。agent はテレビ放送局になる。番組は

同じく theme/patient であるものの、「提供する」の theme/patient ではなく、「お送りする」の theme/patient である。また、観客は明確的に文には現れていないが、「お送りする」には「あなたにお送りする」という含意があるので、日本語のこの表現は観客まで言及していると思われる。一方、中国語の (17c) においては、番組とスポンサーだけが選ばれている。最初の起動力 (お金を出す) の発する実体のスポンサーは、中国語では agent として捉える。そして、番組は「援助する (提供する)」という動詞の theme/patient として捉えている。中国語のこの表現には、テレビ放送局や観客について言及していない。

以上の各言語における各個別現象を統一的に比較・分析する際、三者の共通しているところから出発しないとできない。その共通しているところは何なのかというと、各参与者間の力の伝達・移動関係であると考えられる。つまり、「スポンサー→テレビ放送局→番組→観客」という物理世界における客観的な力の伝達・移動関係だけが言語によって変わらない。したがって、本論文は、このような力の伝達・移動の関係を用いて、causal relation の判断基準とする。

2. その他の先行研究

2.1. Langacker (1990, 1999)

Langacker は一連の研究で行為連鎖モデル (billiard-ball model) を提案している。行為連鎖モデルは、外界の存在物をすべてビリヤードボールのような「物体」に見立て、個々の存在物が力を伝達したり、他から受けた力によって変化を起こしたりすることで、連鎖的に事態が生じると見なすモデルである。Langacker のモデルは、その趣旨が、上記の Croft が提案した causal chain にほぼ一致するため、その詳細を省く。

2.2. Jackendoff (1990)

Jackendoff (1990) は意味役割を thematic tier (dealing with notions of motion and location) と action tier (dealing with actor-patient relation)

という二つの tier にわけて処理する。Jackendoff (1990) の action tier では、以下に示すように、ある要素が統語上の主語の位置にリンクするか、目的語の位置にリンクするかは、その要素の action tier における役割によって決まるという。Croft の causal chain と同様の解釈がなされている。

The actor, if there is one, is always the subject, and any nonfactor analyzed as a patient on the action tier is realized as a direct object

(Jackendoff1990: 257-262).

ここに現れる actor と patient の区別については、以下のようなテストを提示している。

(18) action tier における actor と patient の判断テスト

Actors : What NP did was...

Patients : What happened to NP was...

What Y did to NP was...

(Jackendoff1990:257-262)

この観点は、ある事象において、参与者間 force-dynamic 関係、つまり力の伝達・移動の関係をとり上げる観点と本質的に一致しているので、Jackendoff (1990) に深入りしない。ただ、実際に動詞をチェックする際、(10) のテストの日本語版を使って、各下位事象の間の引き起こしの関係の「±」を判断する。NP1 は「NP は何を働きかけたか」というと、…」に当てはまり、NP2 は同じ事象において「NP に何が起こったか」というと、…」に当てはまれば、NP1 と NP2 は引き起こしの関係にある。どちらか一方が当てはまらない、もしくは両方とも当てはまらない場合は、NP1 と NP2 の関係は引き起こしの関係ではないと規定する。

2.3. 田川 (2002, 2004)

2.3.1. 田川 (2002, 2004) のまとめ

日本語において、主語にリンクする意味役割は、「動因者」であるという説がある。田川拓海の『現代日本語における動作主の意味論と統語論』(2004)はこの説を提唱している。動因者動作主説はその趣旨が causal chain 説と同じであると考えられる。田川 (2002) は次のような動作主の下位分類を想定している。

(19)

動作主	太郎が花子をなぐった。
自然現象	霧が太郎の視界をさえぎった。
道具	小石が蟻の巣穴を塞いだ。
原因	過渡の野心が彼の寿命を縮めた。

田川 (2002 : 50)

そして、田川 (2002) は、これらの要素の持つ、「事象 (event) を引き起こす」という性質を重要であると考え、この性質を「動因性」と名付けている。つまり、「動因性」を持っていることが動作主の条件であるとする。

田川 (2002) によると、「動因性」の定義は次のとおりである。

(20) 動因性：当該の要素が事象を引き起こす第一要素であるかどうか。
任意の要素が動因性を持つとき、その要素は動作主としての資格を持つ。

(田川 2002: 50)

この定義に即して、田川 (2004) は「太郎が走った」という自動詞文における「太郎」のステイタスについて次のように分析している。

この場合の「太郎」は使役主とは考えられない。しかし、このような要素も「走る」という事象を引き起こしていると考えられるので、動因性は持つ（すなわち、動作主である）と分析されるのである。

（田川 2004 : 9）

田川（2004）は、動作主の構成要素には、「動因性」以外に、「現実性」と「意志性」という素性があると主張している。「現実性」とは、当該の要素が現実の世界において具体的な動きを伴うかどうかという素性であり、「意志性」とは、当該の要素が意志性を持つかどうかという素性である。しかし、この三つの素性の中、もっとも決定的な素性は「動因性」である。以下はまた田川（2004）からの引用である。

…

(14) 動作主

- a. 動因性 [+]
- b. 現実性 [+]
- c. 意志性 [+]

(15) 自然現象、道具

- a. 動因性 [+]
- b. 現実性 [+]
- c. 意志性 [-]

(16) 原因

- a. 動因性 [+]
- b. 現実性 [-]
- c. 意志性 [-]

…

(14) - (16) の表示では動因性と他の意味素性が同一に並べられており、かつ「動作主」「原因」などがあたかも独立した意味役割として存在しているかのような印象を与えてしまう。そこで、次のように表示方法を改定しよう。

(17) [動因者]: α

a. 動因性 [+]

b. 現実性 []

c. 意志性 []

ここでは[動因者]が意味役割としてのラベルであることを示しており、 α にその下位分類としての便宜的な名称を表示することにする。また、動因性だけが意味役割としての違いを決定するので、そのことを強調するために動因性を で囲ってある。この表示法を用いると、例えば(14) (16)はそれぞれ次のようになる。

(18) [動因者]: 動作主

a. 動因性 [+]

b. 現実性 [+]

c. 意志性 [+]

(19) [動因者]: 原因

a. 動因性 [+]

b. 現実性 [-]

c. 意志性 [-]

(田川 2004 : 11)

田川は、田川 (2004) の枠組みでは動因性という素性一つで動作主 ([動因者]) と統語位置の連結の問題を捉えることができると述べている。

2.3.2. 田川 (2002, 2004) の再分析

田川 (2004) は causal chain というアプローチを採用していない。しかし、その結論は causal chain の観点から導かれた結論とほぼ一致している。両者はともに「引き起こす」がキーワードである。また、causal chain 上の initiator は、始動者である。始動者は、causal chain 上の最初の位置にあ

るだけではなく、力を発するものでもあり、事象を引き起こすものでもある。この意味では、initiator は田川でいう「動因性」をもつ要素と内実が一致している。「動因者」は、「動作主、自然現象、道具、原因」などの主語に投射する意味役割を統一的にまとめられると同様に、causal chain の initiator もそれらの意味役割を統一的にまとめられる。

ただし、「引き起こす」とは何かについては、田川（2004）はあまり触れていないのに対し、causal chain のアプローチでは、「力の伝達・移動」が各参与者の間にあるか否かで、「引き起こし」の有無を判断することができる。この点において、causal chain のアプローチは田川説より緻密であると考えられる。したがって、本論文は causal chain のアプローチを採用して、causal relation の意味的な判断基準とする。

3. Causal Relationに関するさらなる記述

3.1. 下位事象間の相関関係

causal chain という事象分析のアプローチでは、他動詞が表す動作事象は、自動詞が表す変件事象とともに、「引き起こす」という上位事象の下にあるとされている。たとえば、「太郎はドアを開けた」という他動詞文では、「太郎の働きかけ」という動作下位事象は、「ドアが開く」という変化下位事象を引き起こす。自動詞文の「ドアが開く」という事象は「ドアに働きかける」という事象とともに「引き起こす」の下位事象である。図で示すと、以下のようになる。

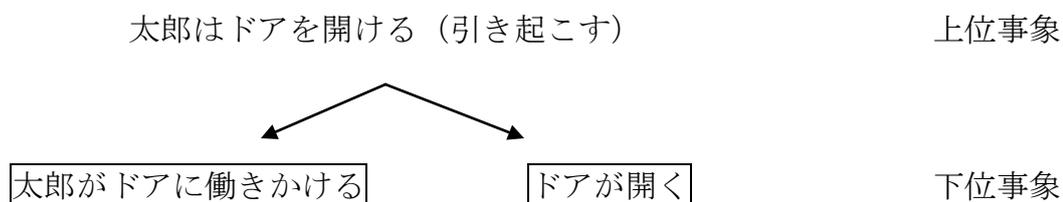


図 1

さらに、形態的に関連しておらず、意味的に関連するペアについても、同じ分析が用いられる。たとえば、「太郎は花子を殺した」を例にすると、太郎の働きかけという動作下位事象は、「花子が死ぬ」という変化下位事象を引き起こす。「花子が死ぬ」は「太郎が働きかける」とともに、「引き起こす」という上位事象の下にある。図で示すと、以下のようになる。

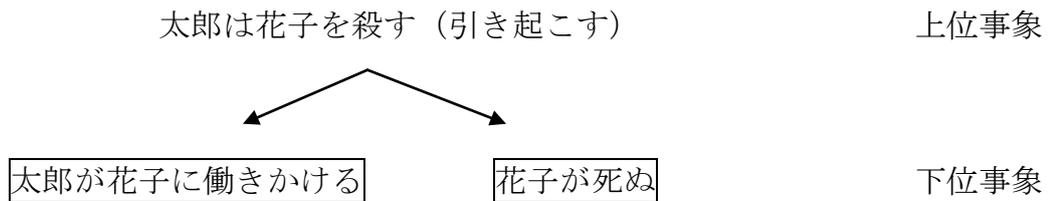


図 2

図 1 と図 2 がいずれも引き起こしの関係が上位にあり、対象に生じる変化（自動詞事象）が下位にあるということを示す。語彙概念構造のアプローチでも、同じ観点が見られる。

- (21) a. [x ACT ON y]CAUSE [y BECOME[y BE AT z]]
 b. y BECOME[y BE AT z]

他動詞の語彙概念構造は通常 (21a) のように示され、自動詞の語彙概念構造は通常 (21b) のように示される。(21b) の y BECOME[y BE AT z]という自動詞事象は、(21a) の x CAUSE [y BECOME[y BE AT z]]という全体的な他動詞事象の一部分にあたる。(21a) は上位にあり、(21b) は下位にある。

3.2. 交替している自動詞の意味特徴

Levin&Rappaport Hovav(1995)³⁵も自動詞（非対格動詞）と他動詞の相関関係を論じている。L&RH(1995)の論述は、Croft (1991) より進んでいると思われる。L&RH(1995)は他動詞が基本で、他動詞から、「反使役化」という過程を

³⁵ 以下では、便宜のため、L&RH(1995)と略する。

経て、自動詞が派生されると主張している。この主張は、「反使役化」に制限があるという点においては、Croft (1991) より緻密だと考えられる。「反使役化」の制限とは、「反使役化」によってできた自動詞が自立 (internally caused) という性質を持つものに限っているという制限である。

The internally caused eventualities such as break can come about independently in the sense that it can occur without an external agent.

(Levin&Rappaport Hovav1995 : 104)

Croft (1991) に即すれば、他動詞事象のcausal chain上の一部 (変化の部分) にプロファイルしたら、自動詞が生まれると理解してもよい。しかし、実際は、そう簡単にはいかない。その変化の部分は、他動詞事象、言い換えれば、他動的行為に依存してはいけないという制限がある。つまり、自立 (internally caused) という性質を持たない変化は、causal chain上の変化部分がプロファイルされても、自動詞は生まれない³⁶。L&RH(1995)はcutの例を挙げて、それについて説明している。cutは、自動詞化という操作を許さない。

…this specification, in turn, implies existence of a volition agent. The very meaning of the verb *cut* implies the existence of a sharp instrument that must be used by a volitional agent to bring about the change of state described by the verb.

(Levin&Rappaport Hovav1995 : 103)

他動詞cutには、必ず意識的動作主 (volitional agent) がいる。この意識的動作主が脱落できない。変化の部分の事象³⁷は、事象全体に意識的動作主がないと、成り立たない。つまり、変件事象は意識的動作主に依存している

³⁶ その代わりに、統語構造では、他動詞受身が生まれるのかもしれない。

³⁷ 日本語の「切れる」という自動詞が表す事象に当たる。

ため、自立という性質を持たない。このような相関関係にある各下位事象は、たとえ変化の部分の下位事象がプロファイルされても、自動詞が生まれない。英語のcutや killのような他動詞は、「反使役化」という操作を許さない。言い換えれば、英語のcutや killのような他動詞に、対応する自動詞が存在しない。

- (22) a. John cut the fish.
b. *The fish cut.
cf. The fish was cut.

- (23) a. John killed Mary.
b. *Mary killed.
cf. Mary died.
Mary was killed.

以下も意識的動作主が脱落できないがゆえ、「反使役化」できない例である。

- (24) a. Granny made a doll.
b. *A doll made.
- (25) a. Marry wrote a long letter.
b. *A letter wrote.
- (26) a. The workers built a house.
b. *A house built.
- (27) a. The waiter cleared the table.
b. *The table cleared.

3.3. まとめ

以上の先行研究を踏まえて、causal relation の認定基準を以下のようにまとめる。

(28) 下位事象間の causal relation の意味的な判断基準

I. 力の伝達・移動が物理的に観察されるか否か。

II. 力を受けるものに生じる変化は、当該する causal chain 以外に、自立の解釈を持つか否か。

(29) 下位事象間の causal relation の具体的な判断テスト

NP1: 「NP は何を働きかけたか」というと、…」

NP2: 同じ事象において「NP に何が起こったか」というと、…」

4. 実例の動向

本節では、以上の (28) (29) の基準を用いて、動詞の実例の動向を観察する。

4.1. 観察の手順

4.1.1. 動詞リスト

『日本語基本動詞用法辞書』から他動詞を抽出し、観察対象とする動詞のリストを作成する。今回の調査は和語動詞のみを対象とした。漢語動詞を取り上げないようにする。また、「受け取る」のような複合動詞も除外した。漢語動詞と複合動詞を今後の課題にしたい。

(30) 他動詞リスト

a. 無対他動詞

諦める、与える、扱う、謝る、洗う、争う、言う、致す、頂く、祈る、祝う、伺う、失う、歌う、疑う、打つ、訴える、奪う、選ぶ、得る、追う、拝む、置く、送る、贈る、行う、抑える、押す、恐れる、おっしゃる、覚える、思う、買う、飼う、限る、書く、嗅ぐ、囲む、飾る、数える、語る、悲しむ、構う、噛む、考える、感じる、着せる、嫌う、着る、下さる、配る、組む、比べる、くれる、削る、蹴る、試みる、擦る、断る、殺す、探す、避ける、

挿す、差す、指す、誘う、叱る、敷く、縛る、示す、しゃべる、調べる、記す、印す、信じる、吸う、掬う、救う、勧める、薦める、奨める、捨てる、攻める、責める、剃る、炊く、焚く、抱く、確かめる、出す、尋ねる、訪ねる、叩く、畳む、楽しむ、頼む、食べる、騙す、試す、使う、掴む、作る、包む、務める、勤める、努める、連れる、手伝う、閉じる、取る、採る、撮る、捕る、眺める、殴る、投げる、なさる、為す、習う、握る、憎む、縫う、脱ぐ、盗む、塗る、願う、捻じる、望む、臨む、述べる、飲む、図る、測る、計る、量る、穿く、履く、掃く、運ぶ、話す、嵌める、払う、貼る、張る、引く、弾く、開く、拾う、拭く、吹く、含む、防ぐ、踏む、振る、干す、褒める、誉める、掘る、巻く、増す、待つ、招く、真似る、守る、磨く、認める、迎える、剥く、結ぶ、申す、用いる、持つ、求める、貰う、養う、雇う、遣る、譲る、茹でる、許す、止す、寄せる、呼ぶ、読む、忘れる

b. 有対他動詞

明かす、開ける、空ける、上げる、預ける、温める、暖める、集める、当てる、改める、表す、合わせる、生かす、痛める、傷める、入れる、植える、浮かべる、受ける、動かす、写す、映す、移す、生む、売る、終える、起こす、興す、教える、落とす、驚かす、折る、下す、降ろす、卸す、返す、帰す、変える、代える、替える、換える、隠す、重ねる、貸す、傾ける、固める、掛ける、被せる、乾かす、聞く、決める、切る、崩す、暮らす、加える、消す、越す、転がす、壊す、裂く、割く、下げる、刺す、定める、冷ます、覚ます、醒ます、沈める、閉める、締める、知らせる、過ごす、進める、済ます、育てる、揃える、倒す、足す、助ける、立てる、建てる、溜める、貯める、縮める、付ける、着ける、点ける、伝える、続ける、繋ぐ、潰す、詰める、積む、照らす、通す、解く、溶く、届ける、飛ばす、止める、留める、泊める、治す、直す、流す、無くす、亡くす、鳴らす、並べる、逃がす、煮る、抜く、濡らす、残す、乗せる、載せる、伸ばす、延ばす、挟む、始める、外す、離す、放す、生やす、冷やす、広げる、ぶつける、増やす、殖やす、減らす、曲げる、混ぜる、交ぜる、間違える、纏める、回す、見付ける、向

ける、戻す、燃やす、漏らす、焼く、妬く、休める、破る、止める、緩める、汚す、弱める、沸かす、湧かす、分ける、渡す、割る

※下線 (____) を引いた語は、それ自身ないしそれに対応する自動詞が『日本語基本動詞用語辞典』に収録されていないが、本論文はその自他対応を認めるため、観察の対象として動詞リストに入れた語である。

4.1.2. BCCWJにおける動詞の実例

以上の他動詞を『現代日本語書き言葉均衡コーパス・NINJAL LWP for BCCWJ』でその実際の用例を集める。ヒットした用例の中で、使用頻度の高い用法を、一番高いものから5位まで、用例を採取する。たとえば、「明かす」という動詞を検索したら、ヒット数は478件であった。中にヲ格目的語を取るもの(「一を明かす」)が301件であった。「～を明かす」の301件のうち、「(一) 夜を明か～」という用例が一番多く、合わせて67件。その次は「ことを明か～」という用例で、42件。三番目に多いのは「うちを明か～」という用例で、12件。同じく三番目に多いのは「正体を明か～」という用例で、12件。そして、五番目に多いのは「秘密を明か～」という用例で、11件。これらの頻度の最も高い五つの例を「明かす」という動詞の実例として採取する。

4.1.3. [±cause]の判断について

(30a)のほとんどがCroft(1991)でいう simple event (単一事象)を表す。たとえば、「待つ」や「読む」などの動詞の実例は、ヲ格を取るにもかかわらず、対象の変化を伴わない。つまり、対象はものとしての対象だけであり、(下位)事象を構成しない。[±cause]の判断は下位事象間の判断であるため、simple event 他動詞を判断対象から外す。

そして、simple even でない他動詞の実例を上(28)(29)という基準を用いて判断する。たとえば、用例数の1位の「夜を明かす」の具体例は、「場合によっては、わたし独りでここで夜を明かしてもかまいません」のようなものである。この例文のNP1の「わたし」が、「わたしは夜に何を働きかけた

かという、明かした」というテストに通らない。したがって、「夜を明かす」という用法の「明かす」の「主語の動作」という下位事象は「対象の変化」という下位事象と、[-cause]の関係にあると判断する。また、用例数の5位の「秘密を明かす」の具体例は、「おれは自分の仕事の秘密を明かさなないよ」のようなものである。この例文のNP1の「おれ」は「おれは秘密に何を働きかけたか」という、明かした」というテストに通る。しかし、NP2の「秘密」は「秘密には何が起こったか」という、明けた」というテストに通らない。したがって、「秘密を明かす」という用法の「明かす」の「主語の動作」という下位事象は「対象の変化」という下位事象と、[-cause]の関係にあると判断する。実は、他動詞文の目的語名詞を主語にし、自動詞文を作ると、「夜が明ける」以外には、自動詞文は非文法的である。

- (31) a. 夜を明かす。
 b. 夜が明ける。
- (32) a. ことを明かす。
 ??b. ことが明ける。
- (33) a. うちを明かす。
 ??b. うちが明ける。
- (34) a. 正体を明かす。
 ??b. 正体が明ける。
- (35) a. 秘密を明かす。
 ??b. 秘密が明ける。

4.2. 分析

(28) (29) を用いて、他動詞の実例の下位事象間の[±cause]の関係を判断した結果、Croft (1991) の「すべての他動詞の各下位事象が cause の関係で結びついた」という主張が日本語において正しくないとわかる。つまり、

下位事象間に[+cause]の関係が観察されるものもあれば、[-cause]の関係が観察されるものもある。

[+cause]の関係が「割る」のような他動詞に観察される。

- (36) a. 群衆がドイツ軍事務所窓ガラスを割って、なかに侵入した。
b. そのとき、いきなり窓ガラスが割れた。

「割る」という他動詞は二つの下位事象に分割できる。「群衆が窓ガラスに働きかける」という下位事象と「窓ガラスが割れる」という下位事象である。「群衆が窓ガラスに働きかける」という下位事象は「窓ガラスが割れる」という下位事象を引き起こすと解釈できる。つまり、両者は causal chain にはめ込むことができる。一方、(36b)の「窓ガラスが割れる」という変化事象は自立的な事象と解釈できる。(36a)と(36b)は(29)のテストにも通る。

一方で、[-cause]の関係が「明かす、過ごす」、「切る、直す」、「落とす、なくす」などの他動詞に観察される。これらの他動詞は三つのタイプに分けられる。

第一のタイプは「明かす、過ごす」タイプである。「明かす」についても述べたが、「夜を明かす」ことは「夜が明ける」ことを引き起こさないため、両下位事象は[-cause]の関係にある。

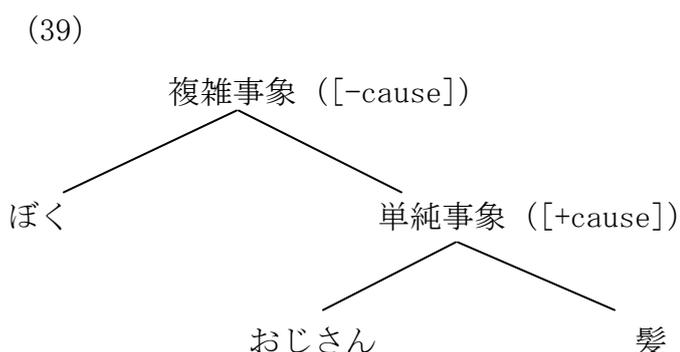
第二のタイプは「切る、直す」タイプである。

(37) ラオスの床屋で「おまかせ」で髪を切ったらこんな感じになった。
…髪を切ってから街に出て愕然としたのは、こんな髪型の地元民は誰一人いなかったということです。

(38) 修理工場で車を直したいのですが…。

(37) の実際に髪を切(てくれ)たのは床屋のおじさんである。事象構造の観点から見ると、「おじさんが髪に働きかける」という下位事象は「髪が(こんな感じに)切れた」という下位事象を引き起こすと解釈される。両下

位事象は[+cause]の関係にあると判断できる。しかし、この二つの下位事象から構成された上位事象の上に、さらに上位的な事象がある。話者の「ぼく」がおじさんに依頼するという事象である。上記の[+cause]の関係にある両下位事象から構成された事象を単純事象と呼ぶことにする。単純事象にさらに上位事象が加わっている事象を複雑事象と呼ぶことにする。図で示すと、以下の通りになる。



英語は、Croft (1991) が主張したように、上記の単純事象のみが一つの動詞の意味構造に収められる。上記の複雑事象を一つの動詞の意味構造に収められない。複雑事象を表すために、英語は「have」やヴォイス変化などの迂言形式を使わなければならない。英語の動詞そのものは、複雑事象を表すことができない。

本論文の観点からみると、Croft (1991) が述べた simple event と complex event という概念は、単純事象の下位分類である。simple event は一つの事象から構成される。complex event は二つ、あるいは、二つ以上の下位事象から構成されるが、各下位事象は一つの causal chain、あるいは、semantic frame に収められる。一つの causal chain に収められる complex event は単純事象である。それに対して、複雑事象は一つの causal chain に収められない事象である。

日本語は複雑事象まで一つの動詞の意味フレームに収められる。しかし、動詞の意味構造と直接的に関わる上位事象は一つの causal chain に収められない。(39) を用いて説明すると、「おじさんが働きかける」と「髪が切れる」

という一番下にある二つの下位事象は、一つの causal chain に収められ、[+cause]の関係にあるとわかる。しかし、文の主語の「ぼく」と「おじさんが髪を切る」という単純事象という両者が、上位的な複雑事象を構成するが、[cause]の関係をなしていない。つまり、両者は[-cause]の関係にある。

(38) も同様に考えられる。実際に車に働きかけるのは修理工場の業者であり、業者が車と[+cause]の関係にある。それより上位的な「車」の持ち主の「私」は、「業者一車」という単純事象と[-cause]の関係にある。

(37) (38) のようなタイプは「介在性の表現」と先行研究に名付けられている。本論文は第四章で、「介在性の表現」という先行研究を踏まえて、[-cause]の関係という観点から、このタイプの動詞を改めて考察・分析を行う。

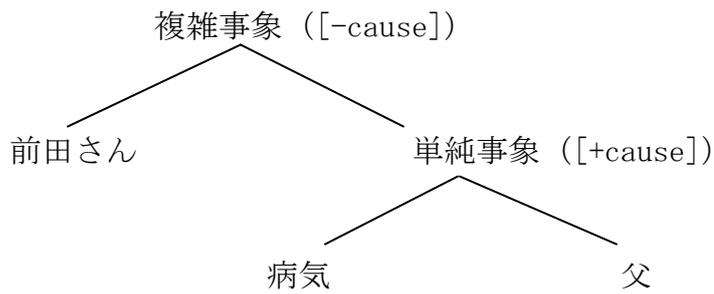
第三のタイプは「焼く、なくす」タイプである。

(40) 田中さんは空襲で家を焼いた。

(41) 前田さんは、幼いころ、父を病気でなくしていた。

このタイプの他動詞も複雑事象を表す他動詞である。たとえば、(41)の「前田さん」は「父」に働きかけて、父の死を引き起すわけではない。「父の死」を引き起こしたのは「病気」である。「病気」の意味役割は第二のタイプにおける「おじさん」の意味役割と異なっている。「おじさんが(ぼくの)髪を切る」という下位事象において、「おじさん」が動作主である。一方、「病気」の意味役割は動作主ではなく、原因である。しかし、前に述べたように、「動作主」や「原因」や「経験者」などは、initiator という一つの意味役割にまとめられる。力を発して、対象の変化を引き起こすものとして考えれば、「動作主」は「原因」と変わらない。「病気が父の死を引き起こした」と考えれば、「病気一父」は一つの単純事象を構成し、両者は[+cause]の関係にあると考えられる。一方、上位的な複雑事象の「前田さん」と「病気一父」との間は[-cause]の関係にある。

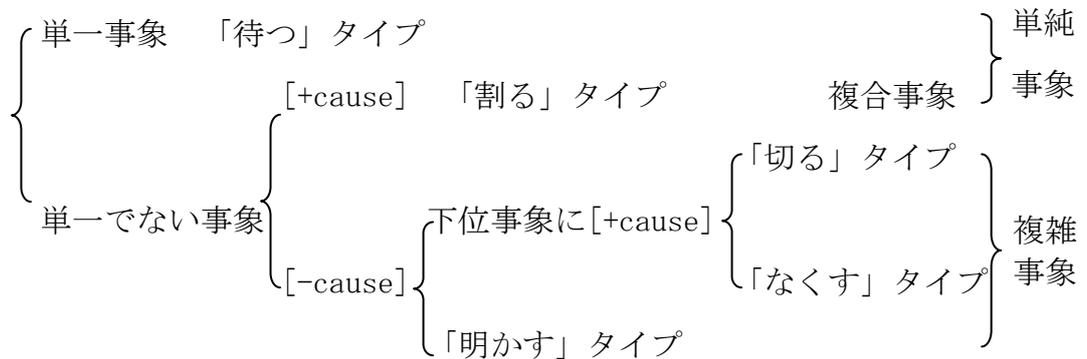
(42)



このような第三タイプは「状態変化主体の他動詞文」と先行研究に名付けられている。本論文は第五章で、「状態変化主体の他動詞文」という先行研究を踏まえて、[-cause]の関係という観点から、このタイプの動詞を改めて考察・分析を行う。

以上の動詞の実例の動向をまとめると、以下の通りになる。

(43)



「花子を待つ」のような単一事象 (Croft (1991) の simple event に当たるもの) と、「窓ガラスを割る」のような複合事象 (Croft (1991) の complex event に当たるもの) は一つの causal chain に収められるものである。本論文はこのような事象を「単純事象」とする。そして、下位事象が二つ、あるいは二つ以上あり、しかも、事象全体が一つの causal chain に収められないものを複雑事象とする。「ラオスの床屋で髪を切った」「父を病気でなくす」「夜を明かす」などは複雑事象である。

第四章 他動詞の面からみた[-cause]の関係 I

第三章の4節の観察の結果分析からわかるように、自他のペアは[+cause]の関係をなす場合もあれば、[-cause]の関係を成す場合もある。[+cause]の関係にある自他のペアは先行研究に多数扱われる一方、[-cause]の関係にある自他のペアはほとんど扱われていない。そのため、本論文は[-cause]の関係を中心に論を進めたい。第四章と第五章では、[-cause]の関係を他動詞の面から見る。第四章ではいわゆる「介在性の表現」という現象を[-cause]の観点から改めて考察・分析する。

1. 現象

第三章の4節で動詞の実例を観察した際に、「ラオスの床屋で「おまかせ」で髪を切ったらこんな感じになった。…髪を切ってから街に出て愕然としたのは、こんな髪型の地元民は誰一人いなかったということです」「修理工場で車を直したいのですが…」のような用例が出てきた。このような例は、先行研究では「介在性の表現」として取り扱われている。本節では、まず、「介在性の表現」という先行研究を概観し、そして、その問題点を指摘する。

1.1. 先行研究

1.1.1. 佐藤（1994b, 1997）の概観

本節では、佐藤(1994b, 1997)を概観する。「介在性の表現」は佐藤(1994b, 1997)によって提唱された概念である。佐藤(1994b, 1997)によると、「介在性の表現」は、日本語の他動詞構文の中で特殊な意味的特徴を持つ表現であるとされている。通常、日本語文において述語のヴォイスの形態が無標の場合は、述語動詞の示す行為の主体は文の主語である。

しかし、一部には「山田さんが家を建てた」や「患者が注射をした」のように、述語のヴォイスの形態が無標であるにもかかわらず、主語が動詞の示す行為の主体ではないという解釈をも許すものがある。佐藤（1994b、1997）は、このような表現を「介在性の表現」と名付けている。

佐藤（1994b、1997）は、「介在性の表現」の特徴・位置づけについて、使役と対比的に検討を加えており、「介在性の表現」の成立要因について分析している。佐藤（1994b）は使役的状况について、以下のように述べている。

(1) 使役的状况の過程

事態 1=causing event （使役者が被使役者に対して何らかの行為をするように働きかける過程）

事態 2=caused event （被使役者が当該の行為を行う過程）

（佐藤 1994b : 57）

通常、他動詞は事態 2 を表す。事態 1 と事態 2 を合わせたら、使役者、被使役者（行為の主体）、行為の客体という三つの項があり、使役的状况になる。このような使役的状况を表すためには、「させる」という迂言的統語形式（ヴォイスの形態）が必要であるが、「介在性の表現」は、ヴォイスの形態が無標のまま、「させる」文などと同様に使役的状况としての意味的特徴を有しているとする。たとえば、「山田さんが家を建てた」という「介在性の表現」で考えると、その表す狀況は発注者である「山田さん」が工務店に対して建築の依頼をする過程（事態 1=causing event）と依頼を受けた大工さんが家を建てるという行為を行う過程（事態 2=caused event）という大きく二つの過程から構成されているとするのである。

つまり、「介在性の表現」は、意味的に、使役者は、被使役者を介して、述語動詞が表す行為を遂行する表現である。述語には「他動詞+させる」の意味特徴が期待されながら、裸の他動詞が用いられる表現である。しかし、被使役者という仲介者は、現実の世界においては実際に存在しているが、それを表現する格は述語から付与されないのである。たとえば、

(2) 山田さんが (*大工さんを/に/で) 家を建てた。

(佐藤 1994b : 56)

動詞「建てる」の示す行為の主体である「大工さん」を表現することができない。ヲ格を使っても、ニ格を使っても、デ格を使っても、大工さんを文に導くことができない。「介在性の表現」は、「話者が実際に存在する被使役者を無視して、あたかも主語自身がすべての過程を自分で行ったかのようにとらえている表現」であると特徴づけられている。

「介在性の表現」の位置づけについて、佐藤 (1994b、1997) は以下のように述べている。(1)「介在性の表現」は、自動詞に見られない、他動詞文に特有の問題である。(2) また、統語的には他の他動詞表現と違いはない。従って、統語的に独立したカテゴリーとしてではなく、他動詞表現の意味的バリエーションの一つとしてとらえるべきであると述べている。

「介在性の表現」の成立要因についての佐藤 (1994b、1997) の主張を以下のようにまとめる。

要因一：主語 (使役者) の被使役者による行為の過程 (事態 2) をも含めた、事態の全過程のあり方をコントロールする能力が高いことが必要である。つまり、「介在性の表現」が叙述事態においては、被使役者による行為の過程やそれによってもたらされる結果のあり方は、基本的に主語 (使役者) が指定する能力が相対的に高く、被使役者の主観などによって左右されやすい性質のものではない。

(3) (浩が写真屋に依頼して、顔写真を撮ってもらった場合)

浩が顔写真をとった。 (介在性)

(4) (浩が画家に依頼して、似顔絵を描いてもらった場合)

*浩が似顔絵をかいた。 (介在性)

(佐藤 1994 : 58)

「顔写真をとる」という行為は、その行為の主体の主観などによって結果が左右される可能性が低いものである。それに対し、「似顔絵をかく」という行為は、A という画家に依頼するか、B という画家に依頼するかによって、大きく結果が異なってくると予想されやすいものである。

要因二：「介在性の表現」における述語の動詞には、ある一定の結果性が必要である。また、それと表裏一体の関係になるが、動詞の意味がそれによってもたらされる結果のあり方よりも、動作者自身の動作の過程のあり方に焦点をおく度合いが強い場合は、「介在性の表現」が成立しにくい。

(5) (花子が人に依頼して洋服を作ってもらった場合)

花子が洋服をつくった。 (介在性)

(6) (花子が人に依頼してセーターを編んでもらった場合)

*花子がセーターを編んだ。 (介在性)

(佐藤 1994 : 60)

(5) の「つくる」という動詞は、どのような動作過程を経るかという点には関心がなく、結果として当該の生産物を生み出しているという点のみに関心があるため、「介在性の表現」に成りうる。しかし、(6) の「編む」という動詞は動作過程のあり方がどのようなものであるかという点を特定する度合いが非常に高く、その点で「つくる」とは大きく性格が異なる。そのため、「編む」は動作者自分自身の手を使って行為したという解釈しか許されず、「介在性の表現」にはならないと述べている。

1.1.2. 佐藤 (1994b, 1997) の問題点

1.1.2.1. デ格の重要性

佐藤 (1994b) は「介在性の表現」を「話者が実際に存在する被使役者を無視して、あたかも主語自身がすべての過程を自分で行ったかのようにとらえている表現」と特徴づけている。その例として、以上の (2) を挙げている。以下では、(2) を (7) に再掲する。

(7) 山田さんが（*大工さんを/に/で）家を建てた。

（佐藤 1994b : 56）

佐藤（1994b）に即すれば、動詞「建てる」の表す行為の主体である「大工さん」を表現することができない。ヲ格を使っても、ニ格を使っても、デ格を使っても、大工さんを文に導くことができない。本論文は、ヲ格と二格に関しては、たしかに佐藤（1994b）の指摘した通りであると認めるものの、デ格が「介在性の表現」の成立に大きく関わっていると考える。デ格が文に現れる場合、「介在性の表現」として解釈しやすい。たとえば、「太郎は美容室で髪を切った」においては、「美容室で」というデ格句が文に現れると、太郎は美容室に行って、髪を切ることを頼んで、切ってもらったと解釈しやすい。太郎は普段自分で道端で髪を切るが、今回だけ美容室で髪を切ったという解釈は取れないわけではないが、通常は前者の意味がとれるだろう。一方、場所デ格を削除し、「太郎は髪を切った」になると、「太郎は自分で髪を切った」「太郎は美容室に依頼して、髪を切ってもらった」という多義性が生じる。ここのデ格は場所デ格と判断する日本語母語話者が多いが、しかし、それは純粋な場所を示すデ格だけではなく、その場所にいる専門業者を同時に暗示する。事象からみると、そこにいる専門業者こそが働きかけの力を発するものである。

さらに、「山田さんは地元の工務店で家を建てた」という文においては、「地元の工務店で」というデ句は、場所デ句と解釈しにくい。山田さんは工務店という場所で自分の家を建てるわけではないからである。この場合のデ格は、道具デ格に近いと考えられる。事象でいう「建てる」という動作の主体、言い換えれば、働きかけの力を発するものは、地元の工務店である。山田さんは地元の工務店を介して「建てる」という動作を行う。事象における動作の主体は道具デ格としてとらえられているが、完全に「無視」されるわけではないと考えられる。

また、「話者が実際に存在する被使役者を無視して、あたかも主語自身がすべての過程を自分で行ったかのようにとらえている表現」と佐藤（1994b、1997）は「介在性の表現」について分析しているが、被使役者は完全に無視されたか否かを考察すると、以下のような例が出てくる。

(8) 知り合いの工務店で家を建てた。

(9) Earth³⁸で髪を切りましょうか。

(10) 近所の修理屋さんで車を直した。

(11) ガソリンスタンドで車を洗った。

(8) – (11) においては、デ格が実際に存在する被使役者を暗示する。デ格を取り除くと、自分で動詞の表す動作を行うか、他人に依頼して、その動作をやってもらうかという多義性が生じるが、デ格が文に現れると、多義性がなくなり、後者、つまり、「介在性の表現」の解釈が取れる。佐藤（1994b、1997）はこのデ格の重要性を指摘していない。

1.1.2.2. 「介在性の表現」の位置づけおよび他動詞の意味的構造の全体像

佐藤（1994b、1997）は、「介在性の表現」の位置づけについて、「他動詞表現の意味的バリエーションの一つとしてとらえるべき」と述べている。この位置づけは、佐藤（1994b、1997）の枠組みで考えると、特に問題はないが、しかし、佐藤（1994b）本人が今後の課題のところ以下のように指摘している。

³⁸ 美容室名

日本語の他動詞文の中には、「私たちは、空襲で家財道具を焼いた」のように、主体から客体への働きかけを表さず、自動詞文相当の意味を持つ表現も見受けられる。このようなタイプの表現をもあわせ、他動詞表現の表す意味的構造の全体像をどのようにとらえるべきかという問題もさらに検討されるべきであろう。

(佐藤 1994b : 62)

つまり、佐藤は、「介在性の表現」と「状態変化主体の他動詞文」とのつながりを示唆はするものの、両者の異同や両者を含む他動詞表現の枠組みを示し得ず、結局は「意味バリエーションの一つ」といった例外的処置にとどまらざるを得なかった。

本論文は、第六章で詳しく述べるように、いわゆる典型的な他動詞文、つまり、統語構造の主語は意味構造の主体、事象構造の initiator に対応する他動詞文は単純事象を表す他動詞文であり、「状態変化主体の他動詞文」と「介在性の表現」は複雑事象を表す他動詞文と分析し、他動詞表現の意味構造の全体像をそれでとらえるべきだと主張する。

1.2. 他言語における類似現象——英語の「have」構文

上記の (1) の使役的状况を表すために、英語では、「have」構文を使うのが普通である。

(12) Taro had his hair cut.

(13) Mr. Yamada had his house build.

英語では、「介在性の表現」が表す使役的状况を表現するために、「have」という迂言形式が必要である。Ritter and Rosen (1993) では、「have」は新しい項を統語的に導入する機能を持つと指摘している。それと表裏一体の関係に、新しい項を統語的に導入するために、「have」という迂言形式の使用が必要である。迂言形式を使わず、他動詞そのままの形では、使役的状况を表

すことができず、単純事象を表さなければならない。日本語の「介在性の表現」の解釈が取られる「太郎は美容室で髪を切った。」という意味を表すために、「Taro had his hair cut」という「have」構文を使うべきである。迂言形式「have」の使わない他動詞文「Taro cut his hair」は、「介在性の表現」の使役の意味が読み取れない。太郎は、はさみを手に取って、自分の髪を切ったという意味解釈しかとれない。

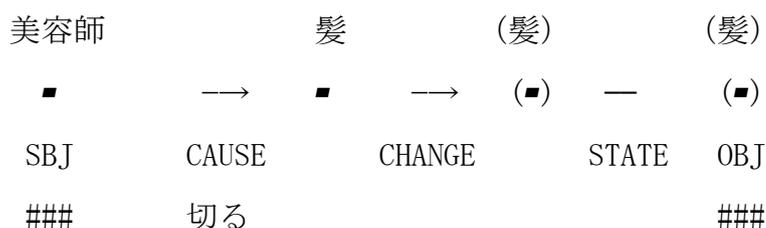
日本語の「介在性の表現」には、事象構造に三つの項 (NP1 (使役者)、NP2 (被使役者)、NP3 (対象)) があり、使役的状况を表すため、「have」に相当する迂言形式が期待される。それにもかかわらず、日本語の「介在性の表現」は、形態的に迂言形式が使われず、裸の他動詞をそのまま用いる。

2. Causal Chain の観点からの分析

2.1. 単純事象レベル

causal chain の観点からみれば、佐藤 (1994b) が (1) で述べた「事態 2」において、主体の下位事象 (美容師が切る) は客体の下位事象 (髪が切れる) と、causal relation、つまり「+cause」の関係にあると考えられる。たとえば、「太郎は美容室で髪を切った」という例では、力を発するのは美容室の「美容師」であり、「美容師」から「髪」へ力が伝達・移動する。「美容師」という項は統語構造に明確に現れていないが、事象構造に存在することは認められる。佐藤 (1994b) の言葉を借用すると、美容師という「被使役者」は「実際に存在する」。事態 2 の事象構造、あるいは、causal chain を図で示すと、以下の通りになる。

(14) 美容師が髪を切った。



また、「山田さんは知り合いの工務店で家を建てた」という「介在性の表現」において、「(工務店の) 大工さんが家を建てる」という「事態2」も、(14)と同じように分析することができる。

(15) 大工さんが家を建てる

大工さん		家		(家)		(家)
■	→	■	→	(■)	—	(■)
SBJ	CAUSE		CHANGE		STATE	OBJ
###	建てる					###

ただ、「建てる」は「切る」と違い、生産動詞である。「髪を切る」という場合、「髪」はそもそも存在するものである。「切る」という動作によって、髪の形などが変化する一方、「家を建てる」という場合、「家」はそもそも存在しないものである。「建てる」という動作によって、家がゼロから生まれる。事象構造からみれば、「建てる」という動作は材料などに働きかけるが、「家」に働きかけていない。しかし、働きかけは[cause (引き起こす)]と異なることである。働きかけは対象という実体に関わっているが、[cause (引き起こす)]は対象の変化に関わっている。「建てることによって、家ができた」、「建てることによって、家が建った」とは言える。「家」は「ない状態からある状態になった」という変化を経る。その変化は「建てる」という動作に引き起こされる。要するに、「大工さん一家」という事象に<働きかけ性>はないのにもかかわらず、[+cause]の関係は成り立つ。

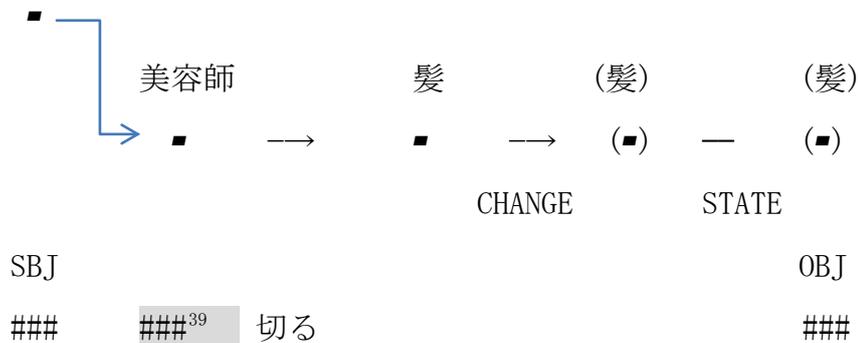
以上で分析したように、(14)と(15)では、主体の下位事象（美容師が切る）と客体の下位事象（髪が切れる）は、[+cause]の関係にあることが確認される。このような[+cause]の関係は、「窓ガラスを割る」のような普通の単他動詞の各下位事象間の関係と同じである。

2.2. 複雑事象レベル

上記のような単純事象の上に、さらに別の主体（山田さん、太郎）が加わると、複雑事象になる。佐藤（1994b）が述べた（1）でいうと、他動詞「建てる」や「切る」は、事態2だけではなく、事態1も同時に表す。「事態1+事態2」という事象全体は、複雑事象であると考えられる。事象の引き起こし手は一つしかないという制限があるため、「大工さん」、「美容師」が実際の働きかけの力を発するもの、また、対象の変化事象の引き起こし手と確認されたら、主体の「山田さん」、「太郎」は引き起こし手ではないことが同時に確認される。つまり、単純事象（事態2）における[+cause]の関係が確認されることと表裏一体の関係になるが、「山田さん」、「太郎」という主体の下位事象は、「家」「髪」という客体の下位事象（「家が建つ」「髪が切れる」）との間に、[-cause]の関係にあることが同時に確認される。「山田さん」「太郎」を主体とした[-cause]の複雑事象を図で示すと、以下の通りになる。

(16) 太郎が美容室で髪を切った。

太郎

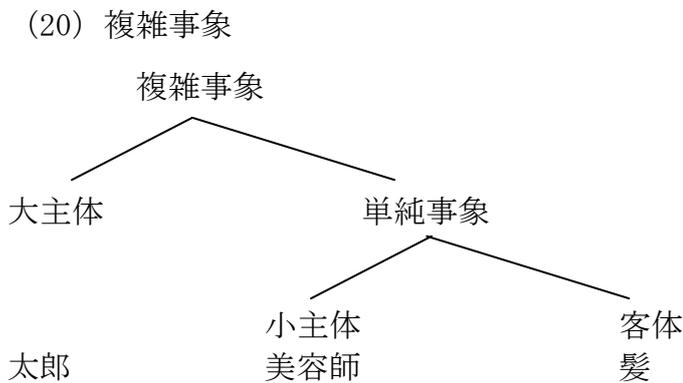


³⁹ 単純事象の動作主「美容師」は、複雑事象に入ると、統語構造に現れなくなる。

それと対比的に、普通の単純事象を表す他動詞は、その主体は客体と、直接的な関係で結んでいる。



複雑事象を表す他動詞は、項と事象の関係を表すのに対し、単純事象を表す他動詞は、項と項の関係を表す。(18) をさらに詳しく記述すると、以下の通りになる。



簡単にまとめると、単純事象は「実体対実体」の関係を表す。それに対して、複雑事象を表す他動詞は、「実体対実体」ではなく、「実体対事象」の関係を表す。

便宜のため、単純他動詞事象の主体である「美容師」を小主体とし、複雑事象、あるいは事象全体の主体である「太郎」を大主体とする。大主体と単純事象との間の関係は、[-cause]の関係であることを確認したが、[-cause]の関係がいったい何の関係であるかはまだはっきりとしていない。それについては次節で分析する。

(17) に関しては、同じように分析することができる。「大工さん」から「家」までの直線で表示したチェーンは、単純他動詞事象の causal chain と同じである。この単純事象に、さらに「太郎」という項が加わると、事象全体が折線のチェーンで表さなければならなくなる。ここの折線は、直接的な引き起こしの関係でないことを表す。そして、事象全体の主体である「山田さん」は、「大工さんが家を建てる」という事象との間の関係は[-cause]の関係にあると確認できる。

2.3. 複雑事象を表す他動詞文における主体の意味役割

本節では、複雑事象を表す他動詞文における主体の意味役割、言い換えれば、主体と単純事象（事態 2）との関係を明らかにすることを目的とする。

1.2 節で明らかにしたように、日本語の「介在性の表現」は英語の「have」構文と事象構造的に類似している。両者はともに事象構造に三つの参加者がある。「使役者（大主体）」、「被使役者（同時に動作者）（小主体）」と「客体」である。統語的な主語に投射する「使役者」は<意志性>という素性を持つ。しかし、「客体」に直接的に働きかけていないため、客体の角度からみれば、<働きかけ性>という素性を持たない。ただ、事象構造においては、使役者は発注や依頼などの働きかけの力を発するため、「have」に当たる「△働きかけ性⁴¹」を持つ。また、「客体」は<変化性>という素性を持つ。「被使役者—客体」は単純（他動詞）事象をなしている。単純事象の上に、「使役者」がさらに加わっており、複雑事象が構成されている。

日本語の「介在性の表現」と英語の「have」構文との違いは、英語の「have」構文は「have」という迂言形式を使用する一方、日本語はそれに相当する迂言形式を使わず、他動詞がそのままの形で、「have」構文の意味を表す。したがって、本論文は日本語の「介在性の表現」の事象構造（意味構造）には、「have」に相当する要素が存在すると分析する。また、主体と単純事象（事態 2）との間の関係は、[have]の関係であると主張する。[have]の関係を上記の (16)、(17) において明記すると、以下の (21)、(22) の通りになる。

⁴¹ △は「+」と「-」の中間段階を表す。

を建てる」という行為や、「韋孝寛」が自分の手で「槐を植える」という行為や、また、「後鳥羽上皇」が自分自身で「兵を集める」という行為をしておらず、誰かの実際の行為者を介してその行為を実現したというところで共通している。先行研究は、この共通点を持つ文を「介在性の表現」と呼び、その意味的特徴を分析している。本章は、そのような先行研究を踏まえた上、事象構造という観点から該当する現象を改めて分析した。具体的には、「介在性の表現」は複雑事象を表す他動詞文である。事象構造においては、被使役者（実際の行為者）は対象と、単純事象をなしている。その上に、さらに統語的な主体が加わっており、複雑事象をなしていると本論文が主張した。また、主体と単純事象との関係は[have]の関係であると主張した。

第五章 他動詞の面からみた[-cause]の関係Ⅱ

第四章では、いわゆる「介在性の表現」を中心に、他動詞でありながら、各下位事象の間に[-cause]関係が観察される現象を考察・分析した。本章では、いわゆる「状態変化主体の他動詞文」に着眼し、[-cause]関係を続けてみる。

1. 現象

第三章の4節で動詞の実例の動向を観察した際に、「前田さんは、幼いころ、父を病気でなくしていた」「3日前に財布を落としてしまいました」のような用例が出てきた。

このような例は、先行研究では「状態変化主体の他動詞文」として取り扱われている。本節では、まず、天野(1987)を概観することによって問題となる現象を確認するとともに、天野の解釈の問題点を指摘する。ついで、さらに現象の観察を加えて、causal chain の観点から分析を試みる。

1.1. 先行研究

1.1.1. 天野(1987)の概観

「状態変化主体の他動詞文」は、天野(1987)によって指摘されている。天野(1987)によると、「状態変化主体の他動詞文」は、従来の「他動性」論の枠からはみ出してしまう現象であるとされている。「状態変化主体の他動詞文」の表す事象において、主体から客体への働きかけていないし、客体の変化を引き起こさない。文主語の実体は事象の引き起こし手ではないという点で通常他動詞文と異なる。

(1) 私たちは、空襲で家財道具をみんな焼いてしまった。

(天野 1987 : 152⁴²)

(2) 勇二は教師に殴られて前歯を折った。

(天野 1987 : 152)

(3) 気の毒にも、田中さんは昨日の台風で屋根を飛ばしたようだ。

(天野 1987 : 152)

(1) の主語「私たち」、(2) の主語「勇二」、(3) の主語「田中さん」の意味役割は何かというと、事象の引き起こし手ではない。(1) では「家財道具が焼けた」という出来事を引き起こしたのは「空襲」であり、「私たち」ではない。「私たち」は「焼く」という動作を直接的に行うのでもないし、原因として間接的に出来事を引き起こすのでもない。天野 (1987) は、「空襲」が原因として働いているため、「私たち」という「主体」⁴³を欠いても、「家財道具が焼けた」という出来事が成立しうるとしている。天野 (1991) は、「家財道具が焼けた」が「私たち」という主体と独立して成立する事象であると述べている。

「私たち」が、「焼く」という動作、あるいは「家財道具が焼けた」という事象の引き起こし手ではない。また、「私たち」から「家財道具」への働きかけもないため、「私たち」が主語の位置に現れるのは、不自然である。そのため、天野 (1987) はこの現象を「従来の他動性の枠からはみ出してしまう」現象だと位置付けている。

天野 (1987) は以下の (4) - (6) のような通常の経験者と上記の (1) - (3) のような他動詞文における経験者を、経験者 a と経験者 b に分類して、(7) のように示している。

⁴² ページ数は須賀一好・早津恵美子編『動詞の自他』1995による。以下も同様。

⁴³ 「主体」は、天野 (1987、1991) の用語である。

(4) ジョンは、思わず窓に手をついて、窓をこわしてしまった。

(天野 1987 : 152)

(5) 母は買った品物をうっかり店に置いてきてしまった。

(天野 1987 : 152)

(6) 金さんはお皿を不注意で落としてしまった。

(7) 経験者の二分類

経験者 { a 主体が引き起こし手であるもの…例文 (4) - (6)
 b 主体が引き起こし手でないもの…例文 (1) - (3)

(天野 1987 : 153)

そして、引き起こし手であるという点においては、経験者 a と動作主や原因とは同じであり、経験者 b はそれらと異なる。以下のような対立が成り立っている。

(8) 主体の下位分類

主体 { 引き起こし手であるもの——動作主・原因・経験者 a
 引き起こし手でないもの——経験者 b

(天野 1987 : 153)

天野 (1987) は経験者 b が主体になる他動詞文を「状態変化主体の他動詞文」と呼び、その構文の特徴を記述し、「状態変化主体の他動詞文」となるための必要な条件も述べている。さらに、なぜそうした条件の下では、他動詞文が「状態変化主体の他動詞文」と解釈できるのかについて述べている。まず二つの条件は以下のとおりである。

(9) 「状態変化主体の他動詞文」の成り立つ条件

条件1：状態変化主体の他動詞文をつくる他動詞は、主体の動きと客体の変化の二つの意味を含む他動詞である。

条件2：状態変化主体の他動詞文のガ格名詞とヲ格名詞は、全体部分の関係にある。

(天野 1987 : 155-158)

なぜ上の二つの条件が必要かについて、天野 (1987) は以下のように述べている。

…条件1について… (動き他動詞と対比的に) 動き変化他動詞は主体の動きの他に客体の変化の意味も持っている。この場合、主体の動きの意味が希薄になったとしても、客体の変化の意味が跡に残る。したがって、主体の動きの側面は、動き他動詞の表すそれと同じように個々の動詞の持つ実質的な動きの意味である必要がない。つまり、主体の動きの意味が個々の動詞の持つ実質的なものである場合の他に、その実質性を失ってどの他動詞にも共通するような希薄なものであることも可能なのである。そして、こうした動き変化他動詞が持つ複数の意味の側面に対応して、主体の意味も多様なのである。主体の動きが実質的なものである場合には、主体はその動きを行う直接の仕手である。…これに対し、主体の動きの側面が希薄でただ<何かの事態を引き起こす>というような、動詞ごとの違いが捨て去られた意味の場合には、その主体は実際の動き手ではなく<何かの事態を引き起こす>者、つまり、間接的な原因を意味することになる。これが原因主体他動詞文と呼ばれるものである。

このように、動き変化他動詞が述語動詞である場合には、主体として実際の動き手 (動作主・経験者 a) 以外のものになることも出来る。主体として動き手以外のものも取り得るといふこの選択の幅があるからこそ状態変化主体の他動詞文を作ることも出来るのであろう。状態変化主体の他動詞文は、主体の実質的な動きの意味がなく、又、間接的に<何かを引き起こす>という意味さえなく、その主体の動きの側面に相当する意味を捜すならば、<客体に起こった変化を所有する>、<ある事態を所有する>というきわめて動作性の低い意味

になるであろう。主体の動きと客体の変化との二重的な意味を持つ動き変化他動詞を述語成分に持つ文は、主体として、このような、ある事態を所有する者、即ち状態変化の主体も取ることが出来るのである。

…

条件2について、前述した<所有する>という意味が成り立つためには、主体が所有者であり、客体についての変化が主体の所有物であることが必要なのである。

(天野 1987 : 159-160)

1.1.2. 天野（1987）の問題点

1.1.2.1. デ格の重要性

本論文は、以上の二つの条件は妥当であると認める。しかし、児玉（1989）が指摘したように、以上の二つの条件以外に、「デ格の重要性」も考えなければならぬ。児玉（1989）は以下の例文をあげ、「ガ格名詞がウゴキの引起こし手でなくなるためには、主体とは別に直接的な事態の引起こし手が必要なのである」と述べている（児玉 1989 : 71-72）。

(10) 伯母は丹精こめた菊の花を枯らした。

(児玉 1989 : 71)

(11) 伯母は丹精こめた菊の花を霜で枯らした。

(児玉 1989 : 72)

(10) は意図的に水をあげずに、菊の花を枯らしたという解釈もでき、非意図的に菊の花に水をあげ忘れて枯らしてしまったという解釈もできるが、いずれにせよ、主体の「伯母」は事態の「引起こし手」とであると解釈される。意図的の場合では、主体が天野（1987）でいう「動作主」にあたり、非意図的の場合では、主体が天野（1987）でいう「経験者 a」にあたる。一方、(11) のように「霜で」を付けると、主体の「伯母」が「経験者 b」、つまり、状態

変化主体と解釈されるようになる。デ格の性質についてさらなる考察の余地があると考えられるが、「状態変化主体の他動詞文」の成立に関して、デ格が大きく関わっていることが示唆される。この「デ格の重要性」については、天野（1987）は言及しなかったが、後の天野（2002）に受け入れられることになる。

1.1.2.2. 二つの条件の必要性についての説明

前節では、二つの条件以外にも、他の条件が考えられるという問題を指摘したが、天野（1987）の二つの条件の必要性についても、問題点があると考えられる。

なぜ二つの条件が必要かについては、天野（1987）は「動き変化他動詞は多義であるため、対応する主体も多様なのである。したがって、主体として動き手以外のものも取り得るというこの選択の幅があるからこそ、「客体に起こった変化を所有する」ものさえも他動詞文の主体として取り得る」と指摘している。

たしかに、天野（1987）が指摘したように、動き変化他動詞は「(主体の)動き」と「(客体の)変化」という両側面がある。「(客体の)変化」の側面がプロファイル⁴⁴されるとき、「(主体の)動き」の側面が希薄化する可能性もあるし、「(主体の)動き」の側面がプロファイルされるとき、「(客体の)変化」の側面が希薄化する可能性もある。しかし、動き変化他動詞は「動き」と「変化」以外に「所有」という側面があることが証明しにくい。そのため、「所有者」まで主体として許容することは考え難い。「選択の幅があるから」とはいえ、すべてのものが主体として許容されるわけにはいかない。なぜ他の要素ではなく、「所有者」が許容されるかということも十分な理由づけがない。天野の「選択の幅がある」という解釈は根拠性が低い。

田川拓海の『現代日本語における動作主の意味論と統語論』（2004）は、天野（1987）の問題点を指摘した際に、本論文とほとんど同じ観点を述べている。以下は田川（2004）からの引用である。

⁴⁴ プロファイルという言葉は、Croftの一連の研究からの引用である。

天野は主体の動作性が極限まで低くなった時に、＜客体に起こった変化を所有する＞、＜ある事態を所有する＞という意味が生まれ、状態変化主体の解釈になると述べている。すなわち、次のようなスケールを想定していると考えられる。

(14) 動作性のスケール



...

しかし、果たして動作性をどんどん低くしていけば状態変化主体という解釈が得られるのであろうか。確かに動作性のスケールという観点からは上のような連続性が見られるかもしれない。しかし、動作主から原因までは差はあれどある事象の引き起こし手である。一方、状態変化主体というのは引き起こし手としての意味はない。それらが果たして上のスケールのように滑らかに連続していると考えられるのであろうか。天野の説明はこの点に関する意味論的な保証を補わなければ成立しないであろう。

(田川 2004 : 66)

田川 (2004) が指摘した天野 (1987) の問題点を本論文の causal chain の観点から解釈すれば、以下のようになる。第三章で確認したように、「動作主」でも、「経験者 a」でも、「原因」でも、(働きかけの) 力を発するものであり、causal chain 上の initiator になることが可能である。しかし、「状態変化主体の他動詞文」においては、状態変化の主体、つまり経験者 b から力を発することもないし、力の伝達・移動もまったくない。たとえば、「私たちは空襲で家財道具を焼いてしまった」という事象では、「私たち」は力を発さない。また、事象において力の伝達・移動があるものの、その力は「私たち」から「家財道具」へという方向で伝達・移動していない。「空襲」から「家財道具」

へという方向の伝達・移動である。つまり、「私たち」という状態変化主体は causal chain 上の initiator になる可能性はない。要するに、力を発するものとして、causal chain 上の initiator になれるか否かという点において、「経験者 b」は「動作主」、「経験者 a」、「原因」と性質が違うから、連続性が見られない。「選択の幅がある」とはいえ、initiator と質的に同じものを統語的な主語に投射してよいが、質的に違うものまでが統語的な主語に投射できることは、十分な根拠をあげないと説明力がないが、天野（1987）はその根拠について触れなかった。

鈴木容子は「日本語の他動詞文におけるデ格と主語の意味役割」（2006）において、「天野（1987）は、同じような他動詞文を集め、その成立条件を考察した後に、その他の他動詞文との共通点をさぐる方法を採用している」と指摘している。本論文は、そもそも「通常他動性からはみ出してしまう」現象なのに、それなりの特徴を無視し、通常他動詞との共通点をさぐるという天野の方法は妥当ではないと思われる。

また、天野（1987）は「状態変化主体の他動詞文」が従来の他動性モデルと連続したものとし、従来の他動性の枠の中に入れようとしている。天野（1987）は他動性の再構築を図るものではない。

1.2. さらなる記述

デ格に関しては、仁田（1993）は以下のように指摘している。

意志的な事象を形成しうる動詞に対しては、[Nデ] は、[手段-道具] 的に解釈される。「僕はうっかり金槌で窓ガラスを割ってしまった」のように、無意図的に行ってしまった動きにも、[手段-道具] の [Nデ] が共起することがないわけではない。

（仁田 1993 : 10）

非意図的な事象を表す文にあつては、[Nデ] は、原因的に解釈される傾向にある。

（仁田 1993 : 10）

仁田の指摘と表裏一体の関係にあるのは、原因デ格を伴う文が、非意図的な事象を表す文と解釈されやすいということである。つまり、文に原因デ格があると、主語の意志性が弱まるという。

鈴木（2006）は、「それは、原因というのは引起こし手だからである。一文の中に引起こし手は一人（一つ）しか存在できない。その制約により、＜原因＞のデ格を表示すると主語に＜動作主＞という意味役割を付与することができず、＜経験者＞という意味役割になり、その結果「非意図的である」という解釈が生じるのだろう」と述べている。

以上に述べた＜意志性＞を持たない主体は、動作主ではない。また、その主体は客体へ働きかけないし、客体の変化を引き起こさない。「伯母は丹精こめた菊の花を霜で枯らした」という文における「伯母」は、菊の花に、働きかけも変化の引き起こしも、何もしていない。ただ「菊の花は枯れた」という事象は、「伯母」の身に降りかかってきたのである。要するに、「状態変化主体の他動詞文」において、状態変化主体は＜意志性＞もないし、＜働きかけ性＞もない。客体に＜変化＞があるものの、その変化は状態変化主体から引き起こされるわけではない。

事象構造分析の観点から説明すると、以下のようなになる。事象構造における事象の「引起こし手」が、統語構造では、原因デ格として現れている。言い換えれば、デ格名詞が表す実体が事象の「引き起こし手」である。「引き起こし手」がすでに事象に存在するため、ガ格名詞は、事象の「引き起こし手」になる可能性がなくなる。言い換えれば、「状態変化主体の他動詞文」が表す事象における引き起こし手は、主体ではなく、原因デ格名詞であるという。

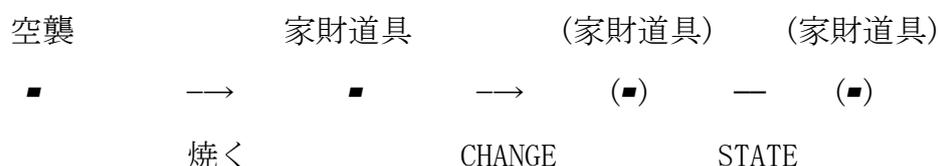
2. Causal Chain の観点からの分析

2.1. 単純事象レベル

1.2 節で確認したように、「状態変化主体の他動詞文」におけるデ格名詞が表す実体は、事象の引き起こし手である。causal chainの観点からみると、事象構造においては、「デ格名詞－客体」の間には、力の伝達・移動がある。

「デ格名詞－客体」という事象は、一つのcausal chainに収められる単純事象となっている。デ格名詞は「原因」という意味役割として、この単純事象のinitiator⁴⁵の位置を占める。(1)を用いて説明すると、以下のようになる。力を発するのは、「空襲」という原因である。空襲から家財道具に力が伝達・移動する。言い換えれば、空襲が家財道具に働きかける。そして、家財道具の変化を引き起こす。したがって、単純事象のcausal chain上のinitiatorは「空襲」のはずである。(1)と同じ事象を表すために、英語では、The air raid destroyed our houseのような文を使うのが普通である。事象構造のinitiator、「the air raid (空襲)」は、統語構造の主語にリンクしている。英語と異なり、日本語文の(1)では、単純事象のinitiatorとなっている「空襲」が、統語構造の主語にリンクしておらず、原因デ格にリンクしている。原因デ格名詞と客体の間には、[+cause]の関係が観察される。図で示すと、以下の通りである。

(12) 原因デ格名詞と客体間の causal relation



2.2. 複雑事象レベル

以上はデ格に着眼して分析し、原因デ格名詞が表す実体が、事象の引き起こし手である、また、「原因デ格名詞－客体」という事象は一つのcausal chainに収められる単純事象であると確認した。

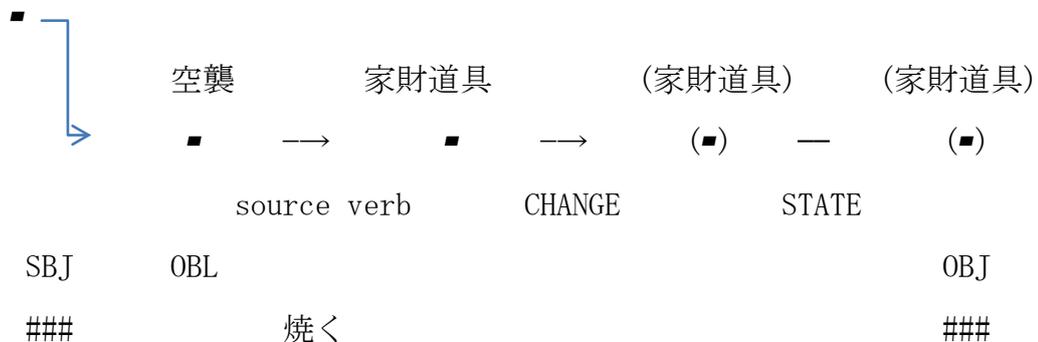
上記のような単純事象の上に、さらに別の主体（私たち）が加わると、複雑事象になる。事象の引き起こし手は一つしかないという制限があるため、原因デ格名詞（「空襲」）が実際の働きかけの力を発するもの、また、対象の

⁴⁵第三章で述べたように、動作主、経験者、原因、道具という意味役割がcausal chain上のinitiatorになる可能性がある。

変化事象の引き起こし手と確認されたら、主体の「私たち」は引き起こし手ではないことが同時に確認される。つまり、単純事象における[+cause]の関係が確認されることと表裏一体の関係になるが、「私たち」という主体の下位事象は、「家財道具」という客体の下位事象（「家財道具が焼けた」）との間に、[-cause]の関係にあることが同時に確認される。「私たち」を主体とした[-cause]の複雑事象を図で示すと、以下の通りになる。

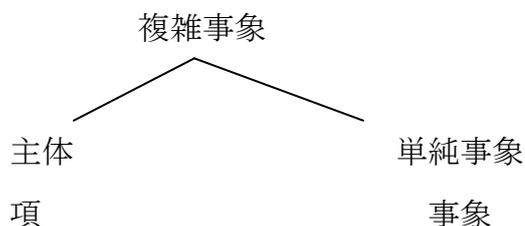
(13) 私たちは空襲で家財道具をみんな焼いてしまった。

私たち



(13) においては、「空襲」から「家財道具」までの直線で表示したチェーンは、前節で確認した通り、単純他動詞事象の causal chain と同じである。この単純他動詞事象の各下位事象、つまり、「空襲」という主体の働きかけと「家財道具」という客体の変化との間では、[+cause]の関係がみられる。この単純他動詞事象に、さらに「私たち」という項が加わると、事象全体が折線のチェーンで表さなければならなくなる。ここの折線は、直接的な引き起こしの関係でないことを表す。「私たち」は折線のチェーンで表された事象全体（複雑事象）の主体である。また、単純事象における主体は、客体と直線的なチェーンを構成し、客体と直接的に関係するが、複雑事象に入ったら、initiator の資格を「私たち」という大主体に譲らなければならない。言い換えれば、大主体は、客体のような項と直接的に結びつかず、下位的な単純事象と結びついている。図で示すと、以下の通りになる。

(14) 複雑事象



簡単にまとめると、単純事象は「実体対実体」の関係を表す。それに対して、複雑事象は、「実体対実体」ではなく、「実体対事象」の関係を表す。英語をはじめ、他言語においては、他動詞は（例外があるにもかかわらず）単純事象を表すのが普通である。一方、日本語では、他動詞は単純事象を表すこともでき、複雑事象を表すこともできる。「状態変化主体の他動詞文」は、複雑事象を表す他動詞文である。

大主体と単純事象との間の関係は、[-cause]の関係であることを確認したが、[-cause]の関係がいったい何の関係であるかはまだはっきりとしていない。それについては次節で分析する。

2.3. 複雑事象を表す他動詞文の主体の意味役割

複雑事象の主体である「私たち」にはどの意味役割が付与されたのか。つまり、「主体」は [デ格名詞—客体] という単純事象との間には、[-cause]の関係が確認されるが、[-cause]の関係はいったい何の関係なのかを明らかにする必要がある。「私たち」の意味役割については、いくつかの説がある。たとえば、天野（1987）はそれを「ある事態の所有者」とし、田川（2004）はそれを「非影響者」としている。劉（2012a）（2012b）は「主体」と「デ格名詞—客体」は[lose]関係にあると分析している。

2.3.1. 所有者説

天野（1987）は、主体の「私たち」という主体は、〈ある実態を所有する〉と指摘した。以下は天野（1987）からの引用である。

状態変化主体の他動詞文は、主体の実質的な動きの意味がなく、又、間接的に〈何かを引き起こす〉という意味さえなく、その主体の動きの側面に相当する意味を捜すならば、〈客体に起こった変化を所有する〉、〈ある事態を所有する〉というきわめて動作性の低い意味になるであろう。主体の動きと客体の変化との二重的な意味を持つ動き変化他動詞を述語成分に持つ文は、主体として、このような、ある事態を所有する者、即ち状態変化の主体も取ることが出来るのである。

（天野 1987 : 159-160）

「所有」は、主体と客体との関係であるのか、もしくは主体と事態（本論文でいう事象）との関係であるのかに関しては、天野（1987）は区別して言及しなかった。言い換えれば、天野（1987）は、状態変化主体の他動詞文に関しては、ほかの他動詞文と共通点を見つけようとした方法を採用したため、主体は、いったい客体と関わるのか、あるいは、客体ではなく、事態（事象）と関わるのかはまだ混同して扱っている。ただし、主体と文全体の関係については、天野（1987）は〈ある事態を所有する〉と述べており、主体が、客体ではなく、「客体に起こった変化」という「事態」に関わると主張していると理解してよい。

また、その「関係」は、「所有する」と述べている。「所有」とは、いったいどのような関係なのかについては、天野（1987）は言及しなかった。普通、「所有する」は、「もの」を所有すると理解されやすいが、「事態」を所有するや、「変化」を所有するというのは、どのようなことであろうか。それは説明されなかったが、とにかく、主体と事態の関係づけは、〈所有する〉という関係であると天野（1987）が主張している。

2.3.2. 消極的な動作主説

石田尊の「行為者解釈を持たない主語について」(1999)は、「状態変化主体の他動詞文」に主眼を置くものではない。ただ、「状態変化主体の他動詞文」についてすこし言及したことがある。「主体はまったく動き手としての性質を持たないとする解釈があり得るか否かについては、判断の難しい部分がある。

(主体は) … (中略) … 抽象的な「動き」をしたと話者は見なしているのではないか、という可能性を考えねばならないであろう」と述べている。

客観的な事象構造においては、主体がまったく動き手としての性質を持たないものの、主体がその性質をもつと話者は主観的にみなしているという可能性がある。佐藤(1994b)が「介在性の表現」について論じたとき、「「介在性の表現」は表現する事態と言語形式の間に大きなずれがあるのである」と述べているが、本節で取り扱う現象も佐藤(1994b、1997)の主張で説明できると思われる。言語形式は客観的な事態だけではなく、話者の主観認識にも関わっている。話者は主観的に主体が動き手としての性質を持つと認識するという可能性がある」と本論文は認める。

2.3.3. 非影響者説

天野(1987)は(1)の主語の「私たち」の意味役割について、「状態変化の主体」と分析し、それは、<客体に起こった変化を所有する>もの、<ある事態を所有する>ものと主張している。天野(1987)の観点に対して、田川(2004)は(1)の主語の「私たち」の意味役割は、「被影響者」とであると分析している。「動作主、経験者 a、原因は全て[動因者]である。一方、状態変化主体は[被影響者]であった」という。両者の事象との関わりを分かりやすく表示すると次のようになる。

(15) [動因者] → 事象

(16) [被影響者] ← 事象

すなわち、事象との関係から見れば、両者は一つのスケール上の高低で表されるようなものではなく、むしろ能動文と受動文のような関係に近いと考えられるのである。田川（2004）は、天野（1987）の「状態変化主体の他動詞文」という現象を、「[被影響者]他動詞文」と呼び、それが受動文に似た解釈を持つと述べている。

(17) 私たちは、空襲で家財道具をみんな焼かれてしまった。

(18) 気の毒にも、田中さんは昨日の台風で屋根を飛ばされたそうだ。

田川（2004）によると、[被影響者]他動詞文は(17) (18) のように受動文で言い換えることができる。この言い換えの可能性は、通常他動詞文と[被影響者]他動詞文が能動文と受動文の関係に近いという直感の意味的根拠であるとされている。

そして、[被影響者]に対応するガ格句の統語的性質は、主題でもなく、二重ガ格構文の大主語でもない。普通の他動詞主語であると主張している⁴⁶。つまり、[被影響者]は[動因者]と同様に、外項位置に現れる。この仮定によれば、他動詞主語の位置に現れる意味役割は、動因者のほかに、被影響者も存在する。そうすると、この仮定は明らかにUTAHの反例になる。UTAHとは、統語上の他動詞主語は意味役割と一対一に対応しているという原理である。田川の分析によれば、統語上の他動詞主語が意味役割との一対一の対応は保持されない。UTAHを保持するために、田川は被影響者と動因者について以下のように説明している。

- a. 日本語において、[+EXT]の素性を持つ自他交替に関わる接辞は、統語構造に外項を導入するという機能のみを持つ。その外項が[動因者]であるか[被影響者]であるかは事象との関わり方およびその他の要因によって決定される。
- b. 外項が[動因者]であるか[被影響者]であるかは、次のように事象との影響関係のベクトルによって決定される。

⁴⁶ その原因は田川（2004）を参照。

外項→事象：[動因者]

外項←事象：[被影響者]

[被影響者]の解釈を得るには、外項が事象に関与していなければならない。

(田川 2004 : 77)

田川 (2004) は、[被影響者]が格句の統語的性質は、主題でもなく、二重ガ格構文の大主語でもない、普通の他動詞主語であると主張しているため、当該する現象(「状態変化主体の他動詞文」(天野 1987 による)、あるいは[被影響者]他動詞文(田川 2004 による))は、複雑事象ではなく、単純事象を表すという立場をとることになる。しかし、分析する際、[外項→事象]、[外項←事象]という分析の仕方採っているため、やはり、本論文が主張する「他動詞は複雑事象を表す」という観点と類似点がある。つまり、外項は、内項(家財道具)と直接関係するより、内項を含む事象(家財道具が焼けた)と関係しているのではないかと思われる。

また、主体と事象の関係については、田川は、主体は、事象に「被影響」、つまり、影響されるということを主張している。また、[被影響者]は事象に「関与」しているとも主張している。

田川説を、causal chainの観点を用いて改めて考えてみよう。力は、左方向の矢印が示したように、事象から主体(田川 2004 でいう「被影響者」)へという方向で伝達・移動した。(外項←事象：[被影響者] 田川 2004 : 77)。言い換えれば、initiatorが事象になり、endpointが主体である。このようなcausal chain上の前後位置関係は、Croft (1991) が立てた The Causal Order Hypothesis に違反する。The Causal Order Hypothesis は、「The grammatical relations hierarchy SBJ<OBJ<OBJ subsequent corresponds to the order of participation in the causal chain. …」という仮説である。つまり、initiatorは常に主語に、endpointは常に直接目的語にリンクする。しかし、「私たちは空襲で家財道具をみんな焼いてしまった」という文の主語「私たちは」、仮に田川が分析したように、被影響者であれば、causal chainのendpointに位置し、直接目的語に現れるはずであり、主語に現れるわけには

いかないのである。The Causal Order Hypothesis を保持するという観点からみれば、田川の分析がさらに検討する必要があると思われる。

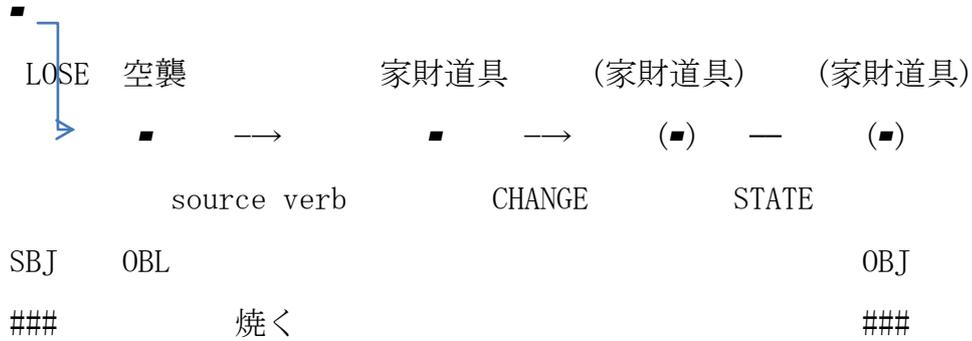
2.3.4. [lose]説

田川 (2004) は、他動詞の意味構造には、能動文のような関係とともに、受動文のような関係もあると主張した。劉 (2012a) (2012b) は、まず、単純事象を表す他動詞文と複雑事象を表す他動詞文を分ける。そして、「状態変化主体の他動詞文」は、ある意味では、典型的でない他動詞文であり、このような他動詞文の主体は、典型的な他動詞文の主体と、共通点をさぐる必要がないと考えた。典型的な他動詞文は、単純事象に基づいているが、典型的でない他動詞文は、複雑事象に基づいていると主張した。

また、「状態変化主体の他動詞文」という複雑事象を表す他動詞文において、主体と下位にある単純事象の間では、[lose]の関係にあると分析した。つまり、(1) における「焼く」は、目に見えない意味要素が含意されている。「私たちは空襲で家財道具をみんな焼いてしまった」という文においては、その目に見えない要素は、「失う」ということになる。つまり、「私たちは空襲で家財道具をみんな焼いてしまった」における「焼く」は、「焼く」だけではなく、「焼いて失う」、「焼いてなくす」との複合的な意味を表す。言い換えれば、主体は「焼く」という形で家財道具を失ったと考えたい。目に見えない「失う」を[lose]と記し、[lose]によって、もともとの単純事象の「空襲が家財道具を焼いた」は、いわゆる主体の「私たち」と結びつけられ、複雑事象が作れる。図で示すと、以下のようなになる。

(19) 私たちは空襲で家財道具をみんな焼いてしまった。

私たち



もともとの単純事象における initiator が複雑事象の causal chain に入ると、複雑事象全体の causal chain においては、大主体の「私たち」と客体の「家財道具」の真ん中に位置する。その位置はまさに原因・道具の位置であるため、原因か道具のデ格が付与される。

この分析のよさは、UTAH も、The Causal Order Hypothesis も、田川の「動因者」説もうまく保持される点である。

initiator はやはり物を失う人（物）である。「もともと持っているものをなくした」という力は、ある種の「手放し」のような抽象的力である。もともとは持っている・コントロールしている状態は、ロープが張っているような状態であるが、コントロールがなくなると、張っているロープが切れたように、一種の力が放出される。このような力の放出は、やはり、物を失う人が起点であり、物が終点である。言い換えれば、initiator は他動詞主語の位置に現れる要素であり、endpoint は目的語の位置に現れる要素である。受動文が表す事象における力の伝達・移動は、これと逆である⁴⁷。そのため、Croft が主張した The Causal Order Hypothesis が保持される。

また、田川が主張した「被影響者」説は、「動因者動作主」説と矛盾するところがある。田川は「[動因者]と[被影響者]は両者とも外項位置に現れ、相補分布を成す」などを用いて、両者を統一的に説明しようとしたが、本論文

⁴⁷受動文の causal chain 分析は Croft (1991 : 247-255) を参照

の主張は、「物を失う人」そのものが動因者と認められるため、田川論文に生じた矛盾がないため、田川の「被影響者」説より説明力があると思われる。また、同じ原因で、UTAH もうまく保持される。

3. まとめ

コーパス調査では、「前田さんは、幼いころ、父を病気でなくしていた。」「3日前に財布を落としてしまいました。」のような例が多数出てくる。このような用例の特徴は、主体がまったく働きかけをしておらず、客体の変化事象を引き起こさない。主体の身にその事態が降りかかってきたという点である。

先行研究は、このような特徴を持つ文を「状態変化主体の他動詞文」と呼び、その主語の意味役割や文の成立条件などを分析している。本章は、そのような先行研究を踏まえた上、事象構造という観点から同じ現象を改めて分析した。具体的には、「状態変化主体の他動詞文」は複雑事象を表す他動詞文である。事象構造においては、統語的なデ格名詞と絡んでいる実際の行為者は客体と、単純事象をなしている。その上に、さらに統語的な主体が加わっており、複雑事象をなしていると本論文は主張する。

第六章 他動詞の意味的構造の全体像

第四章と第五章では、先行研究が指摘した「通常他動性の枠からはみ出してしまう」現象である「介在性の表現」と「状態変化主体の他動詞文」を causal chain の観点から改めて分析し、この二種類の文はともに、動詞が表す事象には、統語上の主語とは別に、他の引き起こし手が存在すること、つまり、事象の本当の引き起こし手は、客体と [+cause] の関係の単純事象をなす。そして、統語上の主体は、その単純事象と [-cause] の関係の複雑事象をなすことを確認した。

「介在性の表現」に関する佐藤（1994b、1997）の先行研究と「状態変化主体の他動詞文」に関する天野（1987）の先行研究は、それぞれの枠組みで、現象を正しく記述し、現象についての分析も有効であると認める。しかし、この二つの現象はいままで別々の現象として捉えられ、それらを合わせ、他動詞の意味的構造の全体像を描くことは、これまでなされてこなかった。本章は、この二つの現象の共通点をまとめ、その共通点に基づいて、他動詞の意味的構造の全体像をどうとらえるべきかという問題を解決することを目指す。

1. 「介在性の表現」と「状態変化主体の他動詞文」との共通点

「介在性の表現」は迂言形式を使わず、裸の他動詞がそのままの形で、使役的状况を表す。統語的に出てこないが、事象構造では、他動詞が表す動作の実際的な主体（「髪を切る」という事象における「美容師」のような「小主体」）が存在する。小主体と客体の間に、通常他動詞の下位事象間の引き起こしとの関係がみられる。言い換えれば、小主体の動作事象と客体の変化事象は [+cause] の関係にある。「小主体—客体」という事象は一つの causal chain に収められるため、単純事象であると確認できる。そして、「介在性の表現」の統語的な主体（小主体に対して、大主体としている）は、この単純事象と、

使役関係に近い、いわゆる[have]の関係にある。事象において、大主体が発注や依頼などの動作をする。この動作は通常<意志性>も伴うし、<働きかけ性>も伴う。ただ、大主体からの働きかけは、文の述語（「切る」）の働きかけと違う。たとえば、「切る」の働きかけは美容師から髪へ力を加えるということである一方、大主体からの働きかけは私たちから美容師への依頼などのような働きかけである。また、同事象の客体は<変化性>という素性を伴う。

一方、「状態変化主体の他動詞文」は、迂言形式を使わず、裸の他動詞がそのままの形で、間接受身に近い複雑事象を表す。統語的に、ガ格として現れていないが、事象構造において、他動詞が表す動作の実際的な引き起こし手（「空襲」など）が存在する。動作の実際の引き起こし手と客体の間に、通常他動詞の下位事象間の[+cause]の関係がみられる。「引き起こし手—客体」は単純事象をなす。そして、「状態変化主体の他動詞文」の統語的な主体とこの単純事象[lose]の関係にあると分析した。「状態変化主体の他動詞文」の統語的な主体は、意志的に動詞が表す動作も行わないし、その主体から客体への働きかけもない。つまり、通常他動詞の<意志性>も観察されないし、<働きかけ性>も観察されない。一方、同事象の客体は<変化性>という素性を伴う。

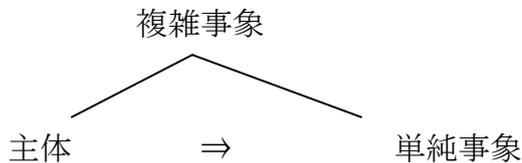
まとめてみると、「介在性の表現」と「状態変化主体の他動詞文」との両者は、<意志性>と<働きかけ性>などの他動詞性質の点では異なっている。

「介在性の表現」は、「+意志性」「△働きかけ性」「+変化性」という素性を伴うのに対して、「状態変化主体の他動詞文」は、「-意志性」「-働きかけ性」「+変化性」という素性を伴う。両者は客体の変化という素性において共通点を示すだけで、主体の<意志性><働きかけ性>という素性において相違点を示す。

しかし、事象構造の観点から改めて考えると、両者の間では、共通点がみられる。つまり、両者はともに複雑事象を表す。その複雑事象に、通常他動詞が表す単純事象が含まれている。単純事象の上に、さらに別の主体が加わっている。言い換えれば、事象構造の観点から見れば、両者は同じシステ

ムにあるとみなすことができる。そのシステムを図で示すと、以下の通りになる。

(1) 複雑事象を表す他動詞の意味的構造



両者の違いは、ただ、主体と単純事象との間の具体的な関係というところにある。(1)においては、主体と単純事象との間の具体的な関係を矢印(⇒)で示す。「介在性の表現」においては、その関係が[have]であり、「状態変化主体の他動詞文」においては、その関係が[lose]であるというところにおいて両者は相違点を示す。具体的な関係が異なるからこそ、<意志性>や<働きかけ性>などの素性において両者は異なるが、事象構造という大きなシステムにおいては、両者は共通している。

複雑事象説は「介在性の表現」と「状態変化主体の他動詞文」の受身文の格形式に裏付けられる。通常他動詞の能動態と受動態の転換は以下の通りである。

- (2) a. 先生が花子を叱る。
- b. 花子が叱られる。

動作・作用を受ける対象である「花子」はガ格をとり、主語に立てられる。しかし、「介在性の表現」と「状態変化主体の他動詞文」の受身文は、動作・作用を受ける対象であるものはガ格を取らず、能動態と同様にヲ格を取る。

- (3) 太郎は髪を切られた。
- (4) 私たちは家財道具を焼かれてしまった。

「切る」という動作・作用を受ける対象は「髪」である。普通の受身文の転換ルールであるによれば、「髪」はガ格を取り、「髪が切られた」という受身文をなすはずである。しかし、実際に「髪が切れ」という文字列で『現代日本語書き言葉均衡コーパス・少納言』で調べたら、ヒット数は0件であった。「太郎は美容室で髪を切った」の受身文は「太郎は髪が切られた」のではなく、「太郎は髪を切られた」という形をする。

なぜ受身文においてヲ格がそのまま保持されるのか。本論文は以下のように説明する。「太郎」は「髪」という項に関わるわけではなく、「髪を切る」という事象に関わっている。つまり、「実体対実体」の関係ではなく、「実体対事象」の関係である。したがって、受身文「太郎は髪を切られた」は、「髪」という実体が何かを受けるという意味を表すことができず、太郎が「髪を切る」という事象を受けるという意味を表す。

「私たちは家財道具を焼かれてしまった」についても同様に考えることができる。

2. 複雑事象の成立条件

2.1. 「介在性の表現」と「状態変化主体の他動詞文」

他動詞はどの場合で複雑事象を表し、どの場合で単純事象を表すのかという複雑事象の解釈がとれる条件をはっきりとしなければならない。

佐藤 (1994b) 「介在性の表現」の成立条件、そして、天野 (1987) は「状態変化主体の他動詞文」の成立条件についてそれぞれ述べている。「介在性の表現」の成立条件は、以下の (5) のとおりである。

(5) 「介在性の表現」の成立条件

- I 主語（使役者）の被使役者による行為の過程（事態2）をも含めた、事態の全過程のあり方をコントロールする能力が高いことが必要である。
- II 「介在性の表現」における述語の動詞には、ある一定の結果性が必要である。

（佐藤 1994b : 57-62）

「状態変化主体の他動詞文」の成立条件は、以下の(6)のとおりである。

(6) 「状態変化主体の他動詞文」の成立条件

I 状態変化主体の他動詞文をつくる他動詞は、主体の動きと客体の変化の二つの意味を含む他動詞である。

II 状態変化主体の他動詞文のガ格名詞とヲ格名詞は、全体部分の関係にある。

(天野 1987 : 155)

2.2. 「have」構文

第四章で扱った英語の「have」構文は、使役に近い意味が取れるだけでなく、受身、特に間接受身に近い意味も取れる。言い換えれば、英語の「have」構文は、「介在性の表現」の事象構造を表す場合もあれば、「状態変化主体の他動詞文」の事象構造を表す場合もあり、曖昧な表現である。

(7) John had his watch stolen by Mary.

(Washio1993: 46)

(8) John had his students walk out of class.

(Ritter and Rosen1993: 520)

(7) は「John が Mary に時計を盗ませた」という使役の解釈と「John が Mary に時計を盗まれた」という受身の解釈を許し、曖昧 (ambiguous) である。(8) も「John が生徒を授業から退出させた」という使役の解釈と「John が生徒に授業から退出された」という受身の意味を持つ。

「have」構文に関する先行研究は、Washio(1993)と Ritter and Rosen (1993) などが挙げられる。Ritter and Rosen は「have」構文の持つ二つの解釈を、使役 (cause) の解釈と経験 (experience) の解釈と呼び、それぞ

れの主語を使役主 (causer)、経験者 (experiencer) と呼んでいる。そして、「have」構文がそのような二つの解釈を示すメカニズムについて分析している。まず、「have」は語彙的意味 (lexical semantic content) を持たず、単に新しい項を統語的に導入するという機能のみを持っているということである。そして、「have」によって導入された項の意味役割はその補部にとる文のアスペクト的特性に基づいて計算されると主張する。具体的には、使役主は事象 (event) の開始点、経験者は事象の終了点から定義されるということである。つまり、核となる事象が明確な開始点を持つ場合 (動作主があるなど) には使役主として解釈され、明確な終了点を持つ (すなわち telic である) 場合には経験者として解釈されるのである。

以上のことを、本論文の観点から再解釈すると、核となる事象が明確な開始点を持つ場合には、「have」構文が「介在性の表現」に近い意味が取れ、明確な終了点を持つ場合には、「have」構文が「状態変化主体の他動詞文」に近い意味が取れる。さらに解釈すると、「have」構文は、「介在性の表現」に近い意味が取れる条件は、「アスペクト的な開始点」、「状態変化主体の他動詞文」に近い意味が取れる条件は、「アスペクト的な終止点」であると解釈される。

2.3. 本論文の主張

2.1 と 2.2 で挙げた先行研究はともに、動詞のアスペクト構造 (aspect structure) に着眼して該当する現象が成立するという条件を付けている。「介在性の表現」の成立条件Ⅱとして、佐藤 (1994b) は、「「介在性の表現」における述語の動詞には、ある一定の結果性が必要である」と述べている。〈結果性〉というのは、動詞のアスペクト的な素性である。また、「状態変化主体の他動詞文」の成立条件Ⅰとして、天野 (1987) は、「状態変化主体の他動詞文をつくる他動詞は、主体の動きと客体の変化の二つの意味を含む他動詞である」と述べている。つまり、「主体の動作」にとどまらず、「客体の変化」という局面の意味も含む他動詞でさえあれば、「状態変化主体の他動詞文」が成り立つ。「客体の変化」も、動詞のアスペクト的な素性である。

本論文は、第四章と第五章で「介在性の表現」と「状態変化主体の他動詞文」を<意志性><働きかけ性><変化性>などの素性を用いて分析したとき、両者は<意志性>と<働きかけ性>において異なり、<変化性>において同じであるという結果を出している。その結果を表1の通りにまとめることができる。

表1

	意志性	働きかけ性	変化性
介在性の表現	○	△	○
状態変化主体の 他動詞文	×	×	○

本論文の第四章・第五章で行った素性分析からもわかるように、<変化性>というアスペクト的な素性が「介在性の表現」と「状態変化主体の他動詞文」の成立条件に大きくかかわっている。この点において本論文は先行研究と一致している。

さらに一歩進んで、本論文は、アスペクト構造だけではなく、動詞の事象構造 (event structure) に着眼して、「介在性の表現」と「状態変化主体の他動詞文」の成立条件を取りまとめる必要があると本論文は主張する。

本論文は事象構造において、統語上の主体とは別に、動詞が表す動作の実際の主体が存在することが確認できれば、複雑事象が成り立つと主張する。以下の言い換えができるか否かを、そのテストとする。

- (9) a. 山田さんは知り合いの工務店で家を建てた。
 →b. 知り合いの工務店の大工さんが (山田さんの) 家を建てた。
- (10) a. 太郎は美容室で髪を切った。
 →b. 美容室の美容師が (太郎の) 髪を切った。
- (11) a. 私たちは空襲で家財道具を焼いた。

→b. 空襲が（私たちの）家財道具を焼いた。

(12) a. 気の毒にも、田中さんは昨日の台風で屋根を飛ばした。

→b. 昨日の台風が（田中さんの）屋根を飛ばした。

(9b) のように、事象構造に実際に存在する動作主体がガ格名詞として文に現れても、(9a) と意味が変わらない。(10) - (12) も同様に考えることができる。

3.2 で引用した Ritter and Rosen (1993) の「have」構文の各意味解釈の成立条件、つまり、核となる事象が明確な開始点を持つ場合（動作主があるなど）には使役主として解釈され、明確な終了点を持つ（すなわち telic である）場合には経験者として解釈されるという条件づけも、開始点と終止点に着眼しているため、動詞のアスペクト的な特徴に注目した条件づけである。佐藤 (1994b) で言う被使役者、本論文でいう動作の実際の主体は、迂言形式「have」によって統語的に導入されたため、英語の「have」構文の各意味解釈の成り立つ条件を付けるとき、項構造の問題がなく、アスペクト構造だけに注目してよいが、一方、日本語の「介在性の表現」と「状態変化主体の他動詞文」の成立条件を付けるとき、「have」のような迂言形式を使わない、言い換えれば、統語構造と事象構造の間にずれがあるため、アスペクト構造だけではなく、項構造も同時に見なければならぬ。ここでいう項構造は、統語的な項構造ではなく、事象構造における参与者という意味の項構造である。その意味の項構造をも重視すべきだと本論文は主張する。

事象構造とアスペクト構造は動詞のもっとも重要な意味的構造であり、両者を合わせて動詞を分析する先行研究は、宮腰 (2008) が挙げられる。宮腰 (2008) は、アスペクト構造を横軸にし、動力学を縦軸にして、並行事象構造という分析の方法を提示している。

本論文は宮腰 (2008) と同じ立場をとる。それを踏まえた上、第四章で扱った「介在性の表現」という現象と第五章で扱った「状態変化主体の他動詞文」という現象は、アスペクト構造より、事象構造において明確な共通点がある。

あり、両現象を合わせ、他動詞の意味的構造の全体像をとらえる際、事象構造の分析がより有効であると思われる。

3. 他動詞の意味的構造の全体像

表1で示したように、「介在性の表現」と「状態変化主体の他動詞文」はともに客体の「変化性⁴⁸」という素性を伴う。それ以外の<意志性>や<働きかけ性>などの素性を伴わなくても、「介在性の表現」と「状態変化主体の他動詞文」は問題なく成立するが、<変化性>という素性を伴わなければ、両文は成立しなくなる。ここで少なくとも<変化性>という素性が「介在性の表現」と「状態変化主体の他動詞文」の成立に大きくかかわっていると言えるだろう。

角田太作は「他動性の研究の概略」(2007)で、「意図性⁴⁹」と「被動作用性⁵⁰」について、以下のように述べている。

他動詞文と呼ばれる文の格枠組みの実現に関しては、他動性の意味的特徴の中で、「I 被動作用性」が最も重要であり、「被動作用性」と「E 意図性」などが食い違った場合には「被動作用性」が優先すると主張した。

(角田 2007 : 5)

角田の主張は、他動性の意味的素性の中で、最も重要な素性は<変化性>であると解釈されてもよい。角田の主張についてさらに検討の余地があると考えられるが、<変化性>の重要性が示唆される。

本論文は、<変化性>という素性が[-cause]の関係にとって非常に重要な素性であると主張する。客体の変件事象があれば、この変件事象は自立なのか、主体によって引き起こされるのか、統語的に出てこない被使役者によって引き起こされる（「介在性の表現」）のか、それともある原因によって引き起こ

⁴⁸ 先行研究によって、<結果性>と呼ばれることもある。

⁴⁹ <意志性>に相当する概念である。

⁵⁰ <変化性>に相当する概念である。

される（「状態変化主体の他動詞文」）のかなどは重要ではない。そして、主体はこの変化になんらかの関係で結び付けられたら、他動性が成り立つ。[+cause]の関係も以上に述べた「なんらかの関係」の中の一つであると考えられる。言い換えれば、主体は変化に「引き起こし」という形で結びつけても、それ以外の関係で結びつけても他動性の成立を妨げない。つまり、主体が変化を引き起こしてもよいし、引き起こさなくてもよい。主体が変化を引き起こす場合、「割る」のような通常他動詞の[+cause]の関係がみられる。主体が変化を引き起こさない場合、主体が変化になんらかの関係（たとえば[have]や[lose]などの関係）で結びついたら、他動性は依然として成立する。この場合、「通常他動性からはみ出してしまふ」[-cause]の関係がみられる。以上で述べた「なんらかの関係」について、さらに考察の余地があると考えられるが、現段階の考察で、それを「責任的関与」関係とまとめる。「責任的関与」を以下のように定義する。

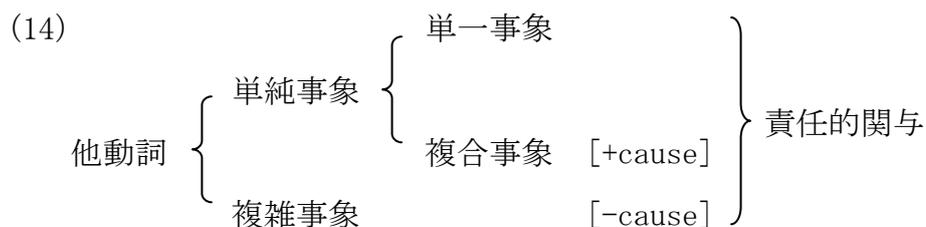
ある事象がまずある。その事象は自動詞事象であれ、他動詞事象であれ、<変化性>を伴う事象であればよい。そして、ある意識的主体がその変化事象に意識的に自分の身を入れようと、あるいは、その変化事象に関係を結び付けようとする、意識的主体と事象は「責任的関与」の関係にある。意識的主体が変化の達成の過程と関わらず、変化の結果に責任をもっていれば、「責任的関与」関係が成り立つ。変化の達成の過程というのは、変化はものそれ自身の力で変化するか、主体によって引き起こされて変化するか、主体以外のものによって引き起こされ変化するかという過程を指す。

「責任的関与」は以下のようにまとめることができる。

- (13) 責任的関与 { [+cause]
[-cause] have lose…

さらに、主体が客体に向かう、あるいは及ぶが、客体が変化しないという事象を表す他動詞が存在する。例えば、「待つ（「太郎が次郎を待つ」）や「読

む」(「太郎が本を読む」)のような他動詞が挙げられる。このような他動詞の事象構造には主体の動作という一つのみの事象がある。客体の変化事象がない。一つのみの事象は単一事象 (simple event) である。単一事象他動詞の主語は行為事象に責任を持つため、責任的関与に収められる。単一事象を合わせて、他動詞の全体像は以下のようにまとめることができる。



(14) に素性分析を合わせてまとめると、以下の表 2 の通りになる。

表 2

	動詞	用法	自他 対応	責任的 関与性	意志 性	働きか け性	変化 性	下位事象 の個数	単純/ 複雑
1	歩く	道を歩く	×	○	○	×	×	1	単
2	思う	心から彼を思っているわ	×	○	○	×	×	1	単
3	待つ	浩二はヤンを待った	×	○	○	×	×	1	単
4	見る	富士山を見る	○	○	○	×	×	1	単
5	割る	群衆が窓ガラスを割る	○	○	○	○	○	2	単
6	明かす	夜を明かす	○	○	○	×	○	2	複
7	落とす	思わず皿を落とした	○	○	×	○	○	2	単
8	失う	10分で4000円を失う	×	○	×	×	△	?2	単
9	切る	ラオスの	○	○	○	△	○	3	複

		床屋で髪を切った							
10	焼く	私たちは空襲で家財道具を焼いた	○	○	×	×	○	3	複

まず、事象構造に事象が一つあるというのは、単なる行為事象、ないしは、単なる変化事象のことを指す⁵¹。事象構造に事象が二つあるというのは、通常は行為事象と変化事象という二つの事象が同時に存在することを指す。時には、責任者の関与事象と変化事象という二つの事象が存在する場合もある。事象構造に事象が三つあるというのは、責任者の関与事象、変化事象、直接的に変化をもたらす事象という三つの事象が存在することを指す。

また、日本語の他動性に関しては、意志性より、責任的関与性が根本的であると考えられる。「思わず皿を落とした」や「私たちは空襲で家財道具を焼いた」などの例における主体は<意志性>を持たず、<責任的関与性>を持つ。

さらに、動詞は用法によって、表2のどの行に入れられるかが変わる。たとえば、表2で挙げた9の「切る」は「ラオスの床屋で髪を切った」という文の事象構造に「髪の変化事象」、「床屋の直接変化をもたらす事象」、「話者の関与事象」の三つの事象があり、「介在性の表現」の用法である。この用法の「切る」は9に入る。しかし、同じ「切る」でも、「太郎は封筒の端を切った」のような用法は「太郎の行為事象」と「封筒の端の変化事象」の二つの事象があり、また、5の「割る」と同じ素性分布を示すので、5に入るべきである。また、10の「焼く」は「状態変化主体の他動詞文」の用法であり、その事象構造に三つの事象があるので、10に入る。しかし、「ママは魚を焼く」のよう用法は5に入る。

1の「歩く」は形式的にヲ格を取るにもかかわらず、自動詞である。場所のヲ格は内項にならないためである。意味素性からみると、<意志性>を除く

⁵¹本論文は自他対応をなしている動詞に主眼を置くが、事象構造分析の有効性は無対の動詞まで及ぶと考える。

と、「歩く」は、他動性の意味特徴としての素性、たとえば<働きかけ性>や<変化性>などを持たず、事象構造としては行為事象のみの単一事象である。

2の「思う」の用法のほとんどは、内容を表すト格を伴うものであるにもかかわらず、「思う」はヲ格を取る他動詞でもある。このヲ格を伴う用法は、人が意図的に思考するもので、意図性を持つと分析できる。しかし、「光ったと思ったら」「寒いと思って」などの用法は、素性から見ると、他動詞の意味素性をほとんど持っていない。「思う」は他動詞の中で、自動詞に近いものであると考えられる。「他動詞文と自動詞文は峻別できない。連続体をなす」と主張する先行研究⁵²によれば、「思う」は自他の真ん中にあるニュートラルなものではないかと思われる。

3の「待つ」もヲ格を取る他動詞である。他に「辞書を持つ」や「本を読む」などの例があげられる。意味素性からみると、<意志性>を除くと、他動性の意味特徴としての素性、たとえば<働きかけ性>や<変化性>などを持たない。事象構造からみれば、「人を待つ」ことは人の変化を引き起こさないため、事象構造には事象が一つしかない。つまり、「待つ」は単一事象を表す他動詞である。以上の素性分析と事象構造分析からみれば、「持つ」タイプも自動詞に近いと考えられる。

この結果は本居春庭(1828)と一致しているところがある。本居春庭(1828)は第一段の自動詞を「おのつから然る」と「みつから然する」とに分けている。「みつから然する」というグループのメンバーには、現代日本語文法でいう自動詞のみならず、他動詞も含めている。たとえば、本居春庭は「多行より佐行にうつりて自他のわかるる例」のところで、多行四段活の例として、「うつ、かつ、たつ、まつ、もつ」という動詞を挙げ、これらを「みつから然するをいふ詞」であるとしている。「うつ(打つ)」「まつ(待つ)」「もつ(持つ)」は現代日本語文法では、他動詞と分類されるが、本居春庭(1828)に「みつから然する」という自動詞分類に入れられている。

「待つ」や「持つ」のような動詞は、ヲ格目的語を取るにもかかわらず、目的語が表す客体の変化を引き起こさない。そのため、話者は動作主体のみ

⁵² Hopper&Thompson(1980)を参照

に関心を持つ。春庭は、このようなところから、目的語をとっても「みつか
ら然する」自動詞タイプであると認定したのだと考えられる。

現代日本語文法の自他の分類は、大まかに言って、項構造に基づいている
とされる。一項動詞なら自動詞、二項動詞なら他動詞という分類基準を採用
している。「待つ」は主体と客体という二つの項を取る、また、直接受身にな
れるため、春庭の主張のように自動詞に分類されるわけにはいかない。しか
し、素性分析と事象構造からみると、「待つ」は他動詞の中で、自動詞により
近いものであることを示すことができる。

4の「見る」は、素性分析と事象構造分析から見れば、3の「待つ」と違い
はない。ただ、「見る」は自他対応をなしている。「見る」に対応して、自動
詞「見える」が存在する。ここで注意されたいのは、「見る」は客体の変化を
引き起こさない。つまり、<-変化性>である。「見る」という動作は必然的
に「見える」という結果を引き起こさない。見ても見えない場合が多数ある。
「見る」と「見える」は因果関係をなさない。つまり、[-cause]の関係にあ
る。このような[-cause]の関係については、第七章から自動詞を中心に詳しく
後述する。

5の「割る」は<+意志性><+働きかけ性><+変化性>という素性を持
ち、典型的な他動詞と言える。事象構造から見れば、主体の働きかけの動作
という下位事象と、客体の変化という下位事象がある。二つの下位事象は
[+cause]の関係にある。一つの causal chain に収められるため、事象全体は
単純事象である。

6の「夜を明かす」のタイプには、「仕事を終える」「時を過ごす」などの例
が挙げられる。

- (15) ときには弁当とお茶を持参して星空の下で夜を明かすなんてことも
珍しくない。
- (16) 仕事を終えてスターバックスに向かうときには雪が降ってきました。
- (17) 知り合った男爵、博士によって楽しい時を過ごす。

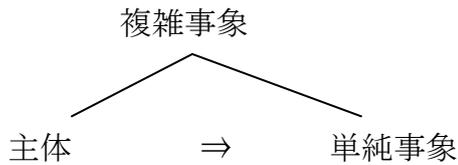
(15) の素性分析を行うと、以下のようなになる。文に現れていないが、主体の「私」は意図的に「夜を明かす」という行為をする。つまり、(15) は<+意志性>である。「私」は「夜」に働きかけていない。「私」から「夜」への力の伝達・移動はない。つまり、(15) は<-働きかけ性>である。「夜が明ける」という自立的な変化がある。「私が夜を明かす」という他動的な事象があってもなくても、「夜」は自然的に「明ける」。つまり、(15) は<+変化性>である。

また、事象構造からみると、主体の行為事象と客体の「夜があける」の変化事象があるから、事象構造には二つの下位事象があり、事象全体は単一事象ではない。「私の行為」は「夜の変化」を引き起こさないため、二つの下位事象は一つの causal chain に収められない。両者は[-cause]の関係にある。

いままで見てきた「介在性の表現」と「状態変化主体の他動詞文」という現象においては、他動詞が複雑事象を表す際、その下位的な単純事象はすべて[+cause]の関係が含まれている複合事象である。この点においては、「夜を明かす」は以上の両現象と異なる。「夜を明かす」の下位にある「夜が明ける」という単純事象は複合事象ではなく、単一事象である。

しかし、複雑事象という観点からみれば、「夜を明かす」という現象は上記の両現象と共通している。つまり、「夜が明ける」という自動詞的な<+変化性>の単純事象がまずある。そして、主体の私は、「夜が明ける」までずっと目が覚めた状態にいる。「私」が「夜が明ける」ことに、自分を結び付けようとする。つまり、「私」が「夜が明ける」という事象に「keep myself up」という形で責任的関与している。「私」が「夜」と「実体対実体」の関係を成さずに、「私」が「夜が明ける」と「実体対事象」の関係をなしている。「私」という実体と「夜が明ける」と事象の間関係は[-cause]の関係であると考えられる。

(18) 複雑事象を表す他動詞の意味的構造



要するに、複雑事象を表すという点において、「夜を明かす」文は「介在性の表現」や「状態変化主体の他動詞文」と共通している。主体と下位的な単純事象との関係は責任的関与の関係である。ただ、下位的な単純事象の事象構造というところでは、「夜を明かす」文、上記の両者と異なる。「介在性の表現」や「状態変化主体の他動詞文」の下位的な単純事象は他動的な複合事象である一方、「夜を明かす」文の下位的な単純事象は自動的な単一事象である。

7の「落とす」のタイプに、以下のような例も挙げられる。

(19) ジョンは、思わず窓に手をつけて、窓をこわしてしまった。

(天野 1987 : 153)

(20) 岡村はぼんやりして煙草の灰をこぼしてしまった。

(天野 1987 : 153)

(21) 母は買った品物をうっかり店に置いてきてしまった。

(天野 1987 : 153)

また、「落とす」に関しては、以下の中国人の自他動詞誤用の実例が興味深い⁵³。ある中国人はレストランでアルバイトをしていた時、手が滑って皿をパッと落としてしまった。中国人はパッと落としたという場合、「哎呀, 掉 (落ちる) 了!」という発話が一番自然である。その人は中国語の発想のまま「あら、落ちた!」という日本語を口に出し、これを見た店長に、「落ちたじゃないくて、あなたが落としたんでしょ」といわれたという。「わざとじゃなく

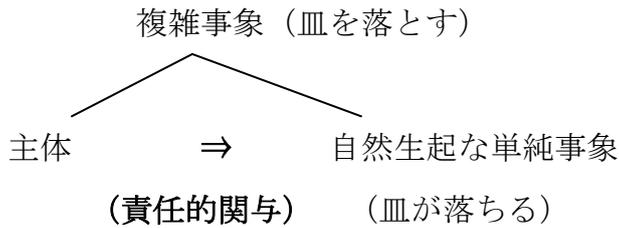
⁵³ 当実例は筑波大学博士課程5年次の金玉英氏の口述による。

て、不注意なのに」と中国人は思いながら、なぜ店長が「落ちる」という自動詞を「落とす」という他動詞に言い直したのだろうか。

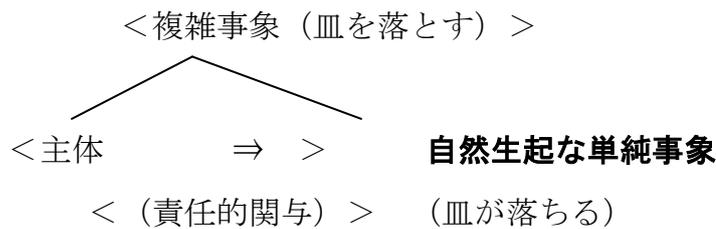
他動詞「落とす」を使うなら、「わざと」という<意志性>が思いつくのは、当然のことだろう。<意志性>は、他動性の中でもっとも重要な意味素性の一つである。「ご飯を食べる」「本を読む」などの普通の他動詞は、常に<意志性>を伴う。しかし、上記の例では、店長がその中国人の行動をずっと見ているから、「わざとではない」ことはわかるはずである。したがって、店長は、<意志性>という意味素性を強調して他動詞を選択するわけではない。

本論文は、店長が<意志性>を強調するために、誤用者の「落ちる」を「落とす」に直したわけではなく、<責任的関与>を強調するのであると考える。まず、「皿が落ちる」という<+変化性>の単純事象がある。この事象を言語化して表現する際、「あら、落ちた」のように、自動詞を選択して表現するならば、「皿が自ら落ちた」「皿が自然に落ちた」の意味が出てくる。しかし、アルバイトとしての誤用者は、「落とさないように保持すべき」「責任がある」などのように、「皿が落ちる」という変化に関与している。この責任的関与の関係を表現するなら、店長の「落とす」という他動詞を選択して表現しなければならない。「あら、落ちた」という自動詞文を使うなら、「変化」が自然生起のように表現され、店長が考えた誤用者の「変化」への責任的関与がキャンセルされる。図で示すと、以下の通りになる。(22)の他動詞文は「責任的関与」を強調するが、(23)の自動詞文は、自然生起な単純事象だけが強調され、誤用者との間の責任的関与の関係が無視されるようになる。誤用者は、(23)の〈 〉付きの部分を表さず、変化事象だけを表すだけであったので、店長から、責任的関与をはっきりさせる「落とす」という他動詞が提示されたのである。

(22) あなたが落としたんでしょ。



(23) お皿が落ちた。



8の「失う」は自他対応をなしていない。たとえば、「4000円を失う」は、意志的に4000円を失うわけでもないし、4000円に働きかけて、「4000円を失う」という変化を引き起こすわけでもない。＜－意志性＞＜－働きかけ性＞が判断される。ただ、＜4000円がなくなる＞という＜＋変化性＞が判断される。＜－意志性＞＜－働きかけ性＞＜＋変化性＞という素性分布は、下のタイプ10と同様である。

9の「切る」タイプと10の「焼く」タイプは複雑事象を表すものである。タイプ9については、第四章ですでに分析した。タイプ9は＜＋意志性＞＜△働きかけ性＞＜＋変化性＞という素性をもつ。タイプ10については、第五章ですでに分析した。タイプ10は＜－意志性＞＜－働きかけ性＞＜＋変化性＞という素性を持つ。

4. 他動詞の意味的構造の全体像の再整理

4.1. 再整理

まず、単一事象は行為事象ないし変化事象である。

表 3

	責任的関 与性	意志性	働きかけ性	変化性
1	○	○	?	×
2	×	×	×	○

可能性 1 は行為事象であり、可能性 2 は変化事象である。

可能性 1：＜－変化性＞の行為事象に限って単一事象となる。行為事象を表す他動詞には「見る」「待つ」「読む」「感じる」などがある。このうち、「見る、待つ、読む」などは＜意志性＞があるが、「感じる」のように主語に経験者を取る動詞は＜意志性＞を認めにくい。一方、「読む」などは対象への働きかけ性が認められるが、「見る、待つ、感じる」は働きかけ性を認めにくい。行為事象を表し、＜意志性＞はないが働きかけ性をもつ表現は現時点では確かなものは見いだしていない。

可能性 2 としての変化事象を表す他動詞は、調べた限りでは見いだしていない。

次に、事象を二つもつ他動詞は、各素性の組み合わせの可能性として、以下のように予測することができる。

表 4

	責任的関与性	意志性	働きかけ性	変化性
1	○	○	○	○
2	○	○	×	○
3	○	×	○	○
4	○	×	×	○

事象構造に事象が二つある場合、その一つは変件事象である。したがって、＜変化性＞はいずれの場合でも「○」である。また、もう一つの事象は、変件事象を直接的にもたらす行為事象、ないしは、変件事象に間接的に関与する関与事象である。変件事象を直接的にもたらす行為事象でも責任的関与しているため、責任的関与性においては、いずれの場合でも「○」である。後の＜意志性＞と＜働きかけ性＞の組み合わせで、二つの事象を表す他動詞の意味的構造は、全部で四つの可能性が予測される。

可能性1に当てはまるのは、「群衆が窓ガラスを割る」「太郎は手で封筒の端を切った」「ママは魚を焼く」のような典型的な非対格動詞と対応する他動詞文である。

可能性2に当てはまるのは、「夜を明かす」のような他動詞文である。主体は「夜」に働きかけない。「夜」はそれ自身で「明ける」。

可能性3に当てはまるのは、「思わず皿を落とした」のような他動詞文である。＜意志性＞はないが、変化を直接引き起こしたため、＜働きかけ性＞はある。

可能性4に当てはまるのは、「4000円を失う」のような他動詞文である。「4000円を失う」という例では、＜意志性＞も＜働きかけ性＞もない。

事象構造に事象が三つある場合も、上記の表4と同様に、四つの可能性が予測される。

表5

	責任的関与性	意志性	働きかけ性	変化性
1	○	○	○	○
2	○	○	×	○
3	○	×	○	○
4	○	×	×	○

しかし、本論文の調べた限りでは、三つの事象を含む他動詞文は、「介在性の表現」と「状態変化主体の他動詞文」しか見いだしていない。可能性1に、「介在性の表現」が当てはまり、可能性4に、「状態変化主体の他動詞文」が当てはまる。ただ、「介在性の表現」の「働きかけ性」は完全な「○」の働きかけ性ではないというところで、予測される可能性1と若干違う。可能性2と可能性3に当てはまるものは見つからなかった。

三つの事象を含む他動詞文においては、＜働きかけ性＞は＜意志性＞に依存する可能性があると考えられる。

4.2. 自動詞へのあてはめ

以上の素性分析と事象構造分析の組み合わせを用いて、自動詞を分析することもできる。自動詞の事象構造には、通常一つの事象がある。それは行為事象ないしは変件事象である。ただし、日本語の自動詞には、行為事象と変件事象という二つの事象を同時に持つ自動詞が存在する。

一つの事象を持つ自動詞の意味的構造の可能性は、以下のように予測される。

表 6

	意志性	働きかけ性	変化性
1	○	×	×
2	×	×	○
3	×	×	×
4	○	×	○

＜責任的関与性＞は他動詞事象にのみ関わる素性であるので、自動詞を分析する際、＜責任的関与性＞を外す。また、対象を持たないため、＜働きかけ性＞は、いずれの可能性においても「×」となる。

可能性1は行為事象である。可能性1としての行為事象は<+意志性>であるが、対象を持たないため<-働きかけ性>、<-変化性>である。この可能性に、「歩く、走る」などの非能格動詞が当てはまる。

可能性2は変化事象である。可能性2としての変化事象は、<-意志性><-働きかけ性>である。この可能性に、「割れる」などの非対格動詞が当てはまる。

可能性3に当てはまるのは、「風が吹く」や「雨が降る」のようなものである。<-意志性><-働きかけ性><-変化性>という素性を示す。

可能性4に当てはまるのは、「立つ」のようなものである。<意志性>もあるし、動作主体自身に「変化」も生じるため、<+変化性>が確認される。

そして、二つの事象を事象構造にもつ自動詞文は、「家が建っている」、「木が植わっている」などのようなものが挙げられる。事象構造に二つの事象があるなら、その中の一つは変化事象である。したがって、二つの事象を持つ自動詞は、必ず<+変化性>である。二つの事象を持つ自動詞の<変化性>を分析する際、<変化性>をより細かく分類する必要がある。みずからないしおのずから然る変化（「自立変化」と呼ぶ）と、他動的行為が前提となっている変化（「非自立変化」と呼ぶ）にわけて自動詞の<変化性>を扱う。

表7

	意志性	働きかけ性	変化性	
			自立	非自立
1	○	×	×	○
2	○	×	○	×
3	×	×	○	×
4	×	×	×	○
5	×	×	×	△

可能性 1 と可能性 2 は、他動詞になるため、それに当てはまる自動詞はない。可能性 3 は、単一事象自動詞になるため、それに当てはまる「一単一事象」自動詞はない。可能性 4 に当てはまるのは「建つ、植わる」のような自動詞である。そして、可能性 5 は「売れる、煮える」のような自動詞が当てはまる。二つの事象を持つ自動詞文の事象分析は、第七章で行うようにする。

第七章 自動詞の面からみた[-cause]の関係

1. はじめに

第1章で述べたように、本論文は事象構造の観点から日本語の自他動詞を再整理することを目的とする。第四章から第六章までは、他動詞を中心に考察・分析したが、本章から自動詞を中心に論を進める。

第六章の4.2節で示した「建つ、植わる」のような自動詞は、日本語の枠内からみれば、特に問題とならないのかもしれないが、英語や中国語と対照してみたら、その特殊性がわかってくる。簡単に言えば、日本語には「建つ—建てて」「植わる—植える」のような自他のペアがあるのに対して、英語には「*build—build」「*plant—plant」のような自他のペアがない。中国語には、他動詞の「盖（建てて）」「种（植える）」に対応するのは、「盖好（建て—出来上がる）」「种好（植え—出来上がる）」のようなVV（verb compound/動補構造）である。「建つ」「植わる」に相当する純粋な自動詞は存在しない。

英語の break, sink などの動詞は自他交替をなす。

- (1) a. John broke the window.
b. The window broke.
- (2) a. The sailor sank the ship.
b. The ship sank.

一方、前に述べたように、build, plant などの動詞は自他交替を成さない。

- (3) a. Sam built a house.
*b. A house built
- (4) a. Mary planted a tree.

*b. A tree planted.

「break, sink」のような交替をなす動詞と「build, plant」のような交替をなさない動詞はどう違うのか。言い換えれば、英語の自他交替をなす動詞の意味にはどのような制約があるのか。Levin&Rappaport Hovavの

『Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface』⁵⁴ (1995)によると、交替をなす自動詞が「internally caused」という意味特徴を持たなければならないとされている。L&RH (1995) を引用すると、以下のようになる。

- (5) The internally caused eventualities such as break can come about independently in the sense that it can occur without an external agent.

(Levin&Rappaport Hovav1995 : 104)

そして、L&RH (1995) はなぜ cut が自他交替をなさないかについて以下のように説明している。

…this specification, in turn, implies existence of a volition agent. The very meaning of the verb *cut* implies the existence of a sharp instrument that must be used by a volitional agent to bring about the change of state described by the verb.

(Levin&Rappaport Hovav1995 : 103)

外在的な volitional agent に頼らなければならない変件事象の事象構造に、volitional agent が脱落できない。したがって、cut のような他動詞からの自動詞化は許されない。したがって、cut のような他動詞に、対応する自動詞が存在しない。

⁵⁴ 以下本文においては、便宜のため、L&RH (1995) と略する。

同様に、a house が外的な力に頼らなければ、自ら build することができないため、internally caused と解釈できない。したがって、他動詞 build から、自動詞が派生されない。build は自他交替をなさない。要するに、交替をなす自動詞の意味的制約は、「come about independently in the sense that it can occur without an external agent」という制約である。本論文の観点から L&RH (1995) の主張を解釈すると、該当する変件事象は単一事象である。そして、外在的な agent によって引き起こされなければならない事象は、事象構造に「外在的な agent の行為事象」と「変件事象」という二つの事象があるから、単一事象ではないと考えられる。したがって、上記の意味制約は「自動詞が単一事象を表さなければならない」という「+単一事象」制約と解釈される。

英語の自動詞は「+単一事象」という点によって、自動詞が存在するか否かが決まる。break、sink などは、「単一事象」になれるため、自動詞として存在する一方、「plant, build, cut」などは、どうしても「単一事象」にならないため、自動詞としては存在しない。

中国語の動詞も「±単一事象」という点によって区別される。「+単一事象」なら、「破、碎」のように、純粹な自動詞で現れ、「-単一事象」なら、「盖好、种好」のように、「他動詞+結果」という VV (verb compound/動補構造) で現れる。

英語や中国語と違って、日本語の自動詞は「±単一事象」と関係なく、他動詞と自他対応をなす。言い換えれば、日本語の自他対応に関して、「自動詞が単一事象を表さなければならない」という意味的制約が無効になる。たとえば、

(6) 公園にはさまざまな種類の木が植わっていた。

(影山 1996 : 184)

(7) 駅前に細いビルが建っている。

影山は(6)について「たとえば自動詞の「木が植わる」は、誰かが木を植えるという使役行為を前提としている。山に自然に生えている木について、「植わっている」とは言えない」と説明している(影山1996:184-185)。本論文の事象構造の観点から言い換えれば、「木が植わる」の事象構造には二つの事象がある。「誰かの使役行為」という事象と「木の変化」という事象である。「木が植わる」は「-単一事象」である。「-単一事象」であるにもかかわらず、他動詞「植える」に対応して、「植わる」という自動詞が存在する。「建つ」も同様に考えられる。要するに、日本語には、「+単一事象」という意味的制約を守らない自動詞が存在する。

なぜ日本語の自動詞には「+単一事象」という意味的制約を守らないものが存在するのか。「-単一事象」自動詞はどのようなものがあるのか。本章はこれらの問題を解決することを目指している。まず、影山(1996)の先行研究を概観する。影山(1996)が提案した「脱使役化」説へ批判しながら、本論文の主張を提示する。

2. 先行研究および再分析

2.1. 影山(1996)の「脱使役化」

前節で述べたように、日本語の自動詞は、「+単一事象」という意味的制約を守るものと守らないものがそれぞれある。影山(1996)は、この現象を、自動詞の二分類という方法で扱った。制約を守るものを、-e-自動詞と呼び、反使役化(他動詞から自動詞への派生)に当てはめ、制約を守らないものを、-ar-自動詞と呼び、脱使役化という新しいカテゴリーを設立して処理している。そして、脱使役化自動詞の意味構造には、使役的行為が存在しながらも、使役主がそのまま意味構造で脱落したと主張している。

以下では、まず、影山(1996)の「反使役化」と「脱使役化」に 관련된部分进行概観し、そして、その後、影山の問題点を指摘する。

影山(1996)は、まず、形態的な基準を採用し、「他動詞から自動詞への転換」と「自動詞から他動詞への転換」と大いに二分する。この分類は、おそらく、形態基準を採用した奥津(1967)の<自動化><他動化><両極化>

という説に影響を受けていると考えられる。この点において、影山は形態的派生と lexicon 内の語彙派生を混同しているという恐れがあるが、これについて後節で詳しく述べる。

他動詞を基本として、そこから自動詞が派生されるという部分で、影山は、〈自動詞化〉に係わる接尾辞を抽出し、-e- と -ar- とに大別している。ここまでは、影山はまだ形態基準を採用している。そして、その後、〈自動詞化〉も、-e- という接辞による反使役化と、-ar- という接辞による脱使役化という二種類に分けられると主張している。

- (8) ・反使役化：自動詞化接辞-e-は、使役主を変化対象と同定することで、自動詞化を行う。
- ・脱使役化：自動詞化接辞-ar-は、使役主を意味構造で抑制し統語構造に投射しないことで自動詞化を行う。

(影山 1996 : 184)

(8) の規定によって、形態を意味に結び付けようとしている。前にも述べたが、日本語には、L&RH (1995) が述べた制約を守るものもあれば、守らないものもある。影山 (1996) は、L&RH (1995) の制約を守る日本語の自動詞を、「反使役化」自動詞というカテゴリーに当てはめた上、「反使役化」自動詞を、形態的な下位分類の-e-自動詞と同定している。

また、影山 (1996) は、L&RH (1995) の制約を守らないものを、「脱使役化」という新しいカテゴリーを設立して処理しようとしていた上、「脱使役化」自動詞を、形態的な下位分類の-ar-と同定している。本論文で「一単一事象」自動詞は、意味構造からみると、「脱使役化」自動詞と同様である。影山 (1996) によると、「脱使役化」自動詞は、形態的に-ar-という特徴があり、意味的に動作主の存在が前提となっているとされている。

- (9) a. 公園にはさまざまな種類の木が植わっていた。
- b. 壁にピカソの絵がかかっていた。

- c. (募金運動をして) 目標額が集まった。
- d. (海底トンネルによって) イギリスとフランスがつながった。
- e. 値段はもうこれ以上まからない。
- f. 段ボール箱に雑誌がいっぱい詰まっている。

(影山 1996 : 184)

以上の例はいずれも動作主が努力した結果として、その事態が生み出されることを意味している。したがって、「難なく」や「どうしても」という副詞がつくことができる。

- (10) a. (募金集めて) 難なく目標額が集まった。
- b. (力をあわせて押すと) 鉄の扉は難なく閉まった。

(影山 1996 : 185)

- (11) a. どうしても、この木はうまく植わらない。
- b. どうしても、目標額が集まらない。

(影山 1996 : 185)

それと対照的に、使役関係を含まない完全な非対格動詞は、「難なく」などの副詞と相容れない。

- (12) *a. 難なく交通事故が起こった。
- *b. 地震で難なく地面がゆれた。

(影山 1996 : 185)

また、-ar-自動詞は、道具ないし手段表現と共起する。

(13) a. クレーンを使って、ようやくその大きな木が植わった。

b. 四方八方、手を尽くして、ようやく目標額が集まった。

(影山 1996 : 185)

また、影山 (1996) は、脱使役化自動詞は、「動作主なしに」という意味の「勝手に」と共起できないと述べている。

(14) *a. 勝手に、箱に本が詰まった。

*b. 勝手に、庭に木が植わった。

*c. ピカソの絵が勝手に壁にかかった。

(影山 1996 : 189)

それに対して、反使役化自動詞は「勝手に」と共起できる。

(15) a. 取っ手が勝手に外れた。

b. 紙が勝手に破れた。

c. ページが勝手にめくれた。

(影山 1996 : 189)

-ar-自動詞が他動詞（つまり使役構造）を土台としていることを中心に影山は主張しているが、意味上の動作主は統語的にどうなるだろうかという点、「その使役主の存在は意味的に推定されるだけで、統語構造には証明できない」と影山 (1996) は答えている。つまり、意味上の動作主は意味構造に存在する。しかし、同じ意味構造でそのまま抑制されている。したがって、統語構造に投射しない。

影山 (1996) は、-ar-自動詞の語彙概念構造を、以下のように示している。

(16) x CONTROL [y BECOME [y BE AT z]]

|

∅

(影山 1996 : 188)

x が語彙概念構造でそのまま落ちたという。また、語彙概念構造から統語構造への投射を、以下のように示している。

(17) 概念構造 : x CONTROL [y BECOME [y BE AT-z]]

|

∅

↓

統語構造 :

内項

(影山 1996 : 188)

x が意味構造でそのまま脱落したので、統語構造に投射しない。統語構造に投射するのは、y だけである。

2.2. 先行研究の再分析

影山 (1996) は、日本語の自動詞には、特殊な語彙概念構造をもつもの、つまり、いわゆる脱使役化自動詞が存在すると提案している。この提案は重要な意味をもちながら、欠点も大きいと思われる。

問題一 : L&RH (1995) によると、volitional agent によってもたらさなければならない変件事象は、volitional agent につよく依存しているため、volitional agent が脱落できないと規定している。日本語においては、まったく同じ状況で、volitional agent がそのまま脱落できると影山 (1996) が主張している。なぜそれができるのかというと、日本語には-ar-接辞が存在するからであると影山 (1996) が答えている。しかし、変化能力を持ってい

ないもの、言い換えれば、それ自身で変化する可能性のないものが変化するという事象において、その変化が volitional agent に強く依存するということは、簡単に否定できないことである。特殊な接辞があるがゆえ、その依存がなくなるわけにはいかないと思われる。したがって、-ar-接辞が動作主を抑制するという意味的機能があると影山が主張しているが、その主張について、さらに検討の余地があると考えられる。

問題二：また、影山（1996）は、-ar-接辞が動作主を抑制するという機能を果たすと同時に、「脱使役化」自動詞の形態的特徴でもあると主張している。しかし、実際に調べたら、-ar-接辞は「脱使役化」の必要条件でもないし、十分条件でもない。たとえば、

(18) マンションは神田川支流ぞいに建っているんですが、…。

(19) ミルクに砂糖が入っている。

(18) (19) は、意味上の脱使役化動詞は必ずしも、-ar-という形態的な特徴をもたないということを示す。マンションは人の意識的な「建てる」という動作を前提としないと、おのずから建つことができない。木などのような、自然にある場所に生えているものについては、「建っている」とは言えない。また、

(20) 一条工務店のおかげで、夢の家が難なく建った。

(21) 四方八方、手を尽くして、ようやく家が建った。

のように、影山（1996）の副詞・道具ないし手段表現テストにも通るため、「建つ」は使役構造、あるいは、外在的な動作主の働きかけを土台として確認できる。要するに、「建つ」は脱使役化自動詞の意味的特徴が備えているため、意味的には脱使役化自動詞であると判断できる。しかし、形態的には「-u」語尾動詞であり、-ar-という形態を持たない。(19)の「入る」も同様

に考えることができる。意味的に脱使役化自動詞の意味的特徴が備えているが、形態的に-ar-という形態を持たない。

次に、-ar-という形態特徴をもつ自動詞は、必ずしも「脱使役化」という意味特徴を持たない。たとえば、影山（1996）の脱使役化自動詞「集まる」の例は、「(募金運動をして) 目標額が集まった」という例である。この例において、動作主の存在が前提となっているが、しかし、コーパスで「集まる」を調べると、以下のような用例が出てくる。

- (22) a. 数人の主婦たちが集まって、洗濯したり、井戸端会議に花を咲かせていた。
- b. 岩場に波がぶつかることにより、岩にいる貝やカニが水中に落ち、それをねらって、魚が集まってきている。
- c. 恐いと感じると、瞬時に危機を避けられるよう、心拍数や体温が上昇し、万が一の出血を最小限に抑えるよう血液が体の中心に集まるため、血圧が上昇します。
- d. 米大統領就任式オバマ大統領の就任演説に注目が集まっていますね～。

(22a, b) における「集まる」は人間や動物の意志的な動作を表し、非能格動詞であり、その意味構造に、「目標額が集まる」という事象に潜んでいる「募金者」とのような別の事象の引き起こし手（動作主）が存在しないと判断できる。(22c) の「(血液が) 集まる」は、人間・動物（動作主）の意志的な動作ではないが、誰かの動作主の意志的な努力が背景に存在するわけでもない。血液の移動はむしろ自然現象に近い事象ではないかと思われる。(22d) の「注目が集まる」は一見動作主が背景に存在するように見える（注目する人）が、実際、オバマはこの文において主語でもなく、その演説が注目を集めようとした結果、注目が集まるわけでもない。つまり、(22d) の「集まる」は、意味上、「建つ」と同じような「脱使役化」構造を持つと分析できないだろう。

また、「詰まる」をコーパスで調べると、「集まる」と同じ傾向が見られる。確かに影山（1996）が挙げた「段ボール箱に雑誌が詰まっている」という例においては、動作主の存在が確認できる。誰かの動作主が雑誌を詰めないと、雑誌がそれ自身の力で段ボール箱に入ることもできないし、詰まるようになることもできない。しかし、「詰まる」のコーパス用例の多数は「鼻が詰まる」や「水道が詰まる」のようなものである。「鼻が詰まる」や「水道が詰まる」という事象は、動作主や他動的な行為の存在が前提となっていない事象である。

さらに、「動作主なし」の意味の「勝手に」テストに通る-ar-自動詞が多数存在する。以下はインターネットから取り出した例である。

(23) 三尋木プロの可愛い画像が勝手に集まるスレ

<http://logsoku.com/thread/hayabusa.2ch.net/livejupiter/1338091875/>

(24) 助けるのではなく、勝手に助かっている。

<http://logsoku.com/thread/toro.2ch.net/bggame/1329744926/>

(25) 例えばセリフの行間を 130%程度で設定し、一部にルビを入力すると右隣の行との間が勝手に詰まってしまいます。

http://www.clip-studio.com/clip_site/support/request/detail/svc/9/tid/13574

要するに、形態的に-ar-という特徴を持つ自動詞は必ずしも「脱使役化」の意味特徴を持たない。

以上は形態と意味という角度から見た影山（1996）の問題点である。まとめてみると、-ar-という形態は、脱使役化の必要条件でもないし、充分条件でもない。つまり、形態は意味とうまく対応していない。

問題三：影山（1996）の反使役化であれ、脱使役化であれ、他動詞から自動詞が派生される過程では、他動詞は以下の語彙概念構造を持つものとされている。

(26) x CAUSE [y BECOME [yBE AT -z]]

x は[cause]という関係で、y の節と結びついている。[cause]の関係が他動詞の意味構造の基本となっている。この観点は、先行研究から受け継いでいると思われるが、日本語の脱使役化自動詞は[cause]の関係から生まれたかという、さらに検討する余地がある。たとえば、「見える」は、「見る」という行為を前提としているので、「一単一事象」自動詞であると判断できるが、「見える」は「見る」と[cause]の関係をなさない。これについて3節で詳しく後述する。

3. 本論文の枠組みからの検討

以下では、「一単一事象」自動詞の二つの下位事象について、素性分析を行う。まず、前節で触れた「見える」について分析する。「見える」は「一単一事象」自動詞であり、その事象構造に「見る」という動作事象と「見える」という結果事象があると分析する。「見る」という動作は背景にある。「見える」という結果はプロファイルされる。

表 1

	意志性	働きかけ性	変化性
見る	○	×	×
見える	×	×	○

「見る」という動作事象は「見たい」「見ろ」などの<意志性>テストに通るため、<+意志性>であると判断できる。また、「富士山を見る」ことは、富士山に働きかけていないため、<-働きかけ性>であると判断できる。さらに、「見る」という動作は、対象の変化を引き起こさないため、結果も残さ

ない。〈－変化性〉という素性を持つと判断できる。「曇りだから富士山がみても見えない」という文は「見る」の〈－変化性〉を裏付ける。

「見える」は、〈－意志性〉〈－働きかけ性〉である。また、「見えない状態から見える状態になる」という「変化」があるから、〈＋変化性〉であると判断できる。自他対応をなしているので、「見る」と「見える」は〈変化性〉というところで、同じように「○」を示すと期待されるが、両者は実際に一致していない。また、事象構造の観点からみれば、「見る」の事象構造に事象が一つしかないのに対して、「見える」の事象構造に事象が二つある。さらに、「見る」は動作動詞であり、対象の変化を引き起こさないのが普通である。しかし、対象の方からみると、動作に引き起こされるという形ではなく、動作に伴って、対象に「変化」が出てくる場合がある。このような「変化」は、動作の一種の結果と見なすことができる。

宮腰 (2012) は、結果は必ずしも因果関係の結果ではないと主張している。

「結果」とは何か

A-I (第I案) : 時間的前後関係に基づく規定

...

A-II (第II案) : 因果関係に基づく規定

...

A-III (第III案) : 結果を二つにわけて規定

- ・「結果 (result)」とは、原因によって引き起こされたコトである。
- ・「結果 (resultative)」とは、単一事象の完結点以降のアスペクト局面である。

(宮腰 2012 : 2)

宮腰 (2012) によると、時間的前後関係に基づいて規定したら、「結果」はコトを時間軸に沿って二つ (以上) の部分に分割し、そのうちの後 (または最後) の部分である。一方、因果関係に基づいて規定したら、「結果」は原因

に対する概念である。それは原因によって生み出されたもの。また、ある行為によって生じたもの。その生み出された状態である。(宮腰 2012 : 2-3)

要するに、「見る」と「見える」の関係は何の関係なのかというと、因果関係ではない、つまり、[-cause]の関係であると確認される。さらに言えば、自動詞から見ても、日本語の自他のペアが[-cause]の関係をなすことがあると言える。

さらに、筆者は日本語の自動詞に、どのような中国語が対応しているのかを調べ、日中対訳コーパスでは、日本語の自動詞は、中国語と以下のような対応を示しているのがわかった。

(27) a. 糸が切れた。

b. 线断了。

(日中対訳コーパス)

(28) a. この肉は苦もなく切れた。

b. 这个肉毫不费力就切断了。

(日中対訳コーパス)

(29) a. 木が倒れた。

b. 树倒了。

(日中対訳コーパス)

(30) a. ベルリンの壁が倒れて 20 年。

b. 柏林墙推倒二十年。

(日中対訳コーパス)

(27)、(29) で示したように、動詞は「+単一 (変化) 事象」を表す場合、日本語は自動詞の「切れる」、「倒れる」を使い、中国語では、「断」、「倒」という非対格動詞がそれに対応する。一方、(28)、(30) で示したように、動詞は「単一事象」と解釈できず、必ず外在的力 (動作主か、引き起こし手かによって発された働きかけの力) が潜んでいる事象 (「-単一事象」) を表す場合、日本語は、(27)、(29) と同じく、自動詞の「切れる」、「倒れる」を使う

一方、中国語では「切断」「推倒」という VV (verb compound/動補構造) をそれに対応して使っている。(27)、(29) における非対格動詞「断」、「倒」は、(28)、(30) においては VV の中の V2 として現れている。VV の中の V1 は「切(切る)」、「推(押す)」は、他動的な行為を表す動詞である。外在的力が必ず存在する場合(「-単一事象」)、「V1+V2」を用いる。一方、自立変化という外在的力が存在しない場合(「+単一事象」)、中国語は「V2」を用いる。

「切れる」は(27)において「+単一事象」を表し、(28)において動作主・引き起こし手が背景に存在する事象を表す。「倒れる」も同様である。「切れる」と「倒れる」はいずれも二つの解釈を持つ動詞である。一方、二つの意味を持たず、「-単一事象」専用自動詞、言い換えれば、必ず動作主・引き起こし手の存在が前提となっている事象を表す自動詞が日本語に存在する。このような自動詞は、中国語に何に対応しているかを調べたら、以下の結果が出ている。

- (31) a. 880 万円でマイホームが建つ。
b. 花 880 万日元，我的房子就盖好了。

(日中対訳コーパス)

- (32) a. サンゴが植わったよ！
b. 珊瑚种上了。

(日中対訳コーパス)

自動詞「建つ、植わる」に対応する中国語は「他動詞の“盖”(建てる) + 結果を表す“好”(できあがる)」、「他動詞の“种”(植える) + 結果を表す“上”(～しあがる)」という VV である。「好」(～あがる)「上」(～あがる)は他動詞「盖、种」の完結点以降のアスペクト局面の意味しか持たない。

また、(28b)、(30b) における V2 の「断」、「倒」は、「好」、「上」ではないにもかかわらず、「好」「上」の「アスペクトの完了」の意味を含んでいると考えられる。つまり、「断」は、「切れる」という方式で「～し終わる、～しあがる」、「倒」は「倒れる」という方式で「～し終わる、～しあがる」と解

積できる。言い換えれば、中国語の VV における V2 は「対象における V1 の完成・完了の局面を表す」と解釈できる。

日本語の「建つ、植わる」についても同じように分析してもよいのではないかとと思われる。つまり、「建つ」は「建ち」という方式で「建てる」という動作完了した後、建築物などの対象の「～しあがる」という局面を表す。「植わる」は、「植わり」という方式で「木」などの対象の「～しあがる」という局面を表す。言い換えれば、「建つ、植わる」のような自動詞は、語彙的に、event /argument structure において「脱使役化」という特徴より、aspect structure において「～しあがる」という要素が含まれるのだと解釈される。

以上の事象構造分析、素性分析、さらに中国語との対照分析に基づいて、日本語の「一単一事象」自動詞の意味構造について、以下の仮説を立てる。

(33) 仮説

I 「一単一事象」の二つの事象（行為事象と変件事象）は、[-cause]の関係にある。具体的には、行為事象は、変件事象と因果関係をなさず、時間的前後関係をなす。言い換えれば、一つの semantic frame の中に、行為事象と変件事象は時間順で並んでいる。その LCS を次のように示す。

$$[x \text{ ACT ON } y] + [y \text{ BECOME } [y\text{BE AT } -z]]$$

↓

$$[y \text{ BECOME } [y\text{BE AT } -z]]$$

II 「一単一事象」自動詞は、行為によって引き起こされる結果のではなく、行為の完結点以降のアスペクト的な結果を表す。

(33) で立てた LCS の仮説は通常のコスと異なるので、それについて説明を加えたい。(33) で述べた LCS は、佐藤 (1994a) の「+」という記号を採用している。佐藤 (1994a) は行為事象と変件事象の間の関係を以下のように記述している。

(34) [AGENT:DO+ ____] + [THEME:REALIZATION]

(佐藤 1994a : 29)

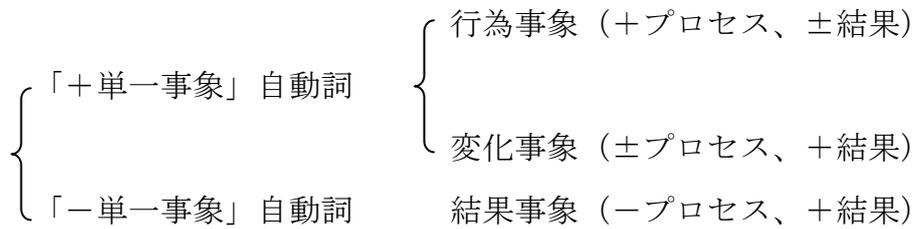
佐藤 (1994a) は両下位事象を結びつける関係を記述するとき、「CAUSE」を使わず、「+」を使っている。佐藤 (1994a) はこの「+」について詳しく説明していないが、本論文は時間的前後関係という意味で、「+」という記号を採用する。ただし、行為事象と変件事象そのものを記述する際、佐藤 (1994a) の記述法を採用しなかった。本論文にとって、[AGENT:DO+ ____] で表した行為事象と [x ACT ON y] で表した行為事象の本質的な違いはない。変件事象についても同様に考えられる。ただ、佐藤 (1994a) の記述用語があまりにも特別である。その特別な用語には特別な意味があれば、それを援用してもかまわないが、本論文にとって、その用語にはそれなりの意味はない。そのため、下位事象を記述する際、佐藤 (1994a) の記述法を採用せず、通常 LCS の記述法を採用した。

この仮説では、なぜ日本語には動作主の脱落が許されるのかを解釈することができる。因果関係の因としての動作主は、普通脱落できない。しかし、主体の動作事象と対象の変件事象は因果関係をなさず、時間的な前後関係にあるとしたら、各事象は同じ動詞の semantic frame に並んでいるだけで、その間を切り離しても構わない。aspectual structure での終止点での「～しあがる」という局面は、独立している局面であり、動作主 (volitional agent) に依存しない。したがって、動作主は脱落しても構わない。完結点という局面に着目するなら、動作主からの働きかけの力や、また開始点から完結点までの移行局面などは一切切り離されると考える。言い換えれば、動作主の脱落は、項削減のためではなく、アスペクト上の完結点がプロファイルされるためであると主張する。

以上の仮説を第八章で検証する。

また、この仮説が検証によって成り立つと証明されたら、日本語の自動詞は以下のように分類できる。

(35)



以上の分類は、事象構造に基づく分類である。動詞はそのものによって分類されるわけではなく、用法によって、上記の分類に入れられる。

たとえば、「入る」は「太郎が寿司屋にはいる」、「水が地下駅に入る」「ミルクに砂糖が入っている」というそれぞれの用法がある。「太郎が寿司屋に入る」という用法は行為事象であり、「水が地下駅に入る」は変件事象である。それに対して、「ミルクに砂糖が入っている」という用法は、誰かがミルクに砂糖を入れるということが前提となっている。つまり、この用法の「入る」は「-単一事象」である。「??体に心臓が入っている」のようなそもそもあるものは「入っている」と言えないことは、「-単一事象」の裏付けになる。「-単一事象」の「入る」は結果事象という分類に入れられる。

第八章 アスペクト形式からの仮説検証

1. はじめに

前章で「一単一事象」自動詞について仮説を立てたが、「一単一事象」自動詞にはどのようなメンバーがあるのかということをもっと明らかにしなければならない。影山（1996）は「脱使役化」自動詞を-ar-自動詞と同定している。本論文でいう「一単一事象」は、他動的行為を土台としている自動詞事象であるという点において、影山（1996）の「脱使役化」自動詞と実質的な意味が同じである。したがって、本論文の観点から解釈すれば、「一単一事象」自動詞にどのようなメンバーがあるのかという問題に対して、影山（1996）は-ar-自動詞がそのメンバーであるという答えを提供していると解釈される。しかし、第七章で指摘したように、-ar-自動詞は「脱使役化」自動詞と同定できない。本論文の観点から言い換えれば、「一単一事象」自動詞は、-ar-という形態を持つ自動詞と特徴づけられない。

自動詞の実例の動向からみると、「一単一事象」自動詞は、「一単一事象」としか解釈されないもの、言い換えれば、専用「一単一事象」自動詞もあれば、「+単一事象」を表す自動詞が、一部の用法で「一単一事象」を表すようなものもある。前者は、たとえば「建つ、植わる」のようなものであり、後者は、たとえば「ミルクに砂糖が入っている」のような「入る」の一部の用法である。

また、「見える」や「煮える」のような自動詞は最初の段階で「煮る」という他動的行為を前提としないと成り立たないが、しかし、「煮る」という他動的行為は完全に直接的に「煮える」という変化をもたらすわけではない。むしろ、「煮る」は「煮える」を「補助ないし促進」させた後、「煮える」主体、たとえば「イモが煮える」のイモは、それ自体で変化する。「煮える」は「一単一事象」と「+単一事象」の真中にある中間的な事象ではないかと思われる。

る。また、「このイモはよく煮えるよ」「この本はよく売れる」などのように、「煮える」類自動詞は「よく」と共起するので、変件事象自動詞ではなく、ものの能力を表す状態動詞となる可能性が高い。それに対して、完全な「一単一事象」自動詞は「よく」と共起しない。「*このビルはよく建ちます」「*この木はよく植わる」。以上を用いて、「見える、煮える、売れる」類の自動詞を「一単一事象」自動詞から除外する。「見える、煮える、売れる」類の自動詞の考察・分析を今後の課題にする。

「一単一事象」自動詞のメンバーを確定したうえで、本章では『現代日本語書き言葉均衡コーパス・少納言』を用いて、「一単一事象」自動詞の中心メンバーである「入る」と「建つ、植わる」を対象に、そのアスペクト形式を中心に調査を行った。

2. 実例の動向

2.1. 「インテルはいつてる」における「入る」

商品広告のPR用語として、「インテルはいつてる」という表現は有名である。日本語母語話者の耳にしたら、「テル」の二つ繰り返して面白く感じる人が多いが、文法的に違和感を覚える人がほとんどいない。しかし、よく考えてみると、「インテルはいつてる」における「入る」は、「太郎はすし屋にはいる」「太郎はお風呂にはいる」などの能動文における「入る」と違うことがわかる。たとえば、「太郎はすし屋に入りたがる」や「太郎はお風呂に入りたがる」など、「～たがる」と共起することは能動文ではごく自然である一方、「*インテルは(パソコンに)入りたがる」は許容度が非常に低い。また、「太郎よ、すし屋にはいれ!」「太郎よ、お風呂にはいれ!」などの命令文は成り立つのに対して、「*インテルよ、(パソコンに)はいれ!」という命令文は成り立たない。以上の「～したい」文や命令文でテストすると、「雨が窓から入る」における「はいる」は、「インテルはいつてる」における「はいる」と同様で、「すし屋にはいる」における「はいる」と異なるように見える。「*雨が窓から入りたがる」「*雨よ、窓からはいれ!」は非文である。表1のように整理することができる。

表 1

	～したい	命令
太郎がすし屋に入る	○	○
雨が窓から入る	×	×
インテルはいつてる	×	×

「ゆっくり」でテストすると、どうなるだろうか。「太郎はゆっくりとすし屋にはいった」「太郎はゆっくりとお風呂に入ってきた」は問題なく成り立つ。「インテルはゆっくりと（パソコンに）入った」は成り立たない。「雨がゆっくりと地下駅にはいった」という文は言えるため、「雨が入る」における「はいる」は、能動文における「はいる」と共通性も見られる。表 1 を含めて整理すると、表 2 になる。

表 2

	～したい	命令	ゆっくり
太郎がすし屋に入る	○	○	○
雨が窓から入る	×	×	○
インテル入ってる	×	×	×

したがって、「はいる」は少なくとも三つのタイプに分けられる。

- (1) I 「太郎はすし屋にはいる」のような文における「入る」
- II 「雨が地下駅にはいる」のような文における「入る」
- III 「インテルはいつてる」のような文における「入る」

タイプⅠは、人間の意図的な動作を表す「入る」である。この用法の「入る」は能動的である。動詞としての「入る」は「入れる」と自他交替を有していると認める先行研究は少なくないが、しかし、奥津(1967)や佐藤(1994b)などの自他交替の定義によれば、タイプⅠの「はいる」は、ほとんど、「入れる」と交替しない。

他動詞との交替を有しているのはタイプⅡとタイプⅢの「はいる」である。タイプⅡは、前述した自然生起の事象、つまり「+単一事象」を表す自動詞であり、タイプⅢは「-単一事象」自動詞である。本章ではタイプⅢの「入る」の実例を収集し、それについて分析を行う。

2.1.1. 観察

2.1.1.1. 用例採取

まず、『現代日本語書き言葉均衡コーパス・少納言』を用いて、「～ガ ハイル」の実例の動向を調べよう。検索語は「が入る」「がはいる」「が入っ」「がはいっ」「が入り」「がはいり」である。調査に当たったところ、「わざと」「～たがる」などのテストを用いて、ガ格が意志性を持つ動作主と判断されたものを除外した。また、連体修飾語の「入る」も除外した。「THEME が入る」と解釈可能な例を採取した。「THEME が入る」と解釈可能な例は、ほとんどがテイル形のものである。以下のとおりに示す。

- (2) この財布には3千円入っています。
- (3) 自分のジーンズのポケットにも何か入っているのに気づきました。
- (4) スキムミルクの中には乳糖が入っているんじゃないでしょうか。
- (5) 煮干しや干し椎茸、ときにはさけの頭も入っていました。
- (6) そのとき私の手には、すでに東和銀行支店から盗んだ一千万円の大金が入っていたのです。
- (7) 時計用のボタン電池がはいっていますよ。
- (8) モミガラの中に、真っ赤なリンゴがいっぱい入っています。
- (9) 封筒の中にはソ連のミサイル配置図が入っていた。

- (10) 洗濯機をあけたら、脱水済みの洗濯物が入っていたりします。
- (11) 風船の中には綿毛の種が入っていますね。

2.1.1.2. 用例から抽出される特徴

- ア) (2) – (11) のいずれも、他動的行為が前提となっていると解釈される。たとえば、(2) の3千円は、誰かが財布に入れるという動作が前提となっていないと、自ら財布に入ることができない。言い換えれば、「+単一事象」と解釈する可能性はない。
- イ) テイル形で出てくるのがそのほとんどである。連体修飾語として出てくる場合、ル形タ形の例はあるにもかかわらず、言い切り文として出てくる場合は、ル形タ形の例はほとんど観察されなかった。「ハイッテイル (マス)」「ハイッテイタ (マシタ)」の形で出てくるのが圧倒的に多い。「ハイッテイル (マス)」「ハイッテイタ (マシタ)」の形で出てくる用例は、すべて結果状態を表すものであり、進行を表すものは観察されなかった。
- ウ) ほとんどの用例は(2)の「この財布に」、(3)の「ジーンズのポケットに」などのような場所ニ格や場所を表す名詞を伴っている。文全体の意味は「ある場所にあるものがある」という単なる存在文の意味に近い。

2.1.2. 分析

調べた限り、テイル形をとって出てきた「入る」(「ハイッテイル」)はすべて結果状態の局面を表す用例である。進行の局面を表すものはコーパスでは見つからなかった。用例数がゼロであることから、使用頻度が低いことがわかった。Yahoo grep を用いて追加調査を行うと、以下のような進行の局面を表す「ハイッテイル」を見つけた。

- (12) 穴から少しずつ (すこしずつ) 水が入って (はいって) いて、沈んで (しずんで) しまったら、…

<http://www.kodomo-seiko.com/classroom/class/rekishi/rekishi007.html>

- (13) (放射線が) ⁵⁵むしろ日常の食事などから慢性的に少しずつ体に入っているとして評価した方が現実的であると考えられます。

<http://www.nirs.go.jp/information/qa/qa.php>

以上の二例の「入る」は、自然生起の事象(「+単一事象」)と解釈される。テイル形が進行の局面を表すのは、「+単一事象」と解釈できるものに限られる。(2) - (11) は進行を表す副詞「少しずつ」「ゆっくりと」などと共起できない。そのため、「-単一事象」自動詞はアスペクト的な結果局面しかもたないと解釈できる。

- (14) *この財布に3千円が少しずつ/ゆっくりとはいつている。

- (15) *自分のジーンズのポケットにも何かが少しずつ/ゆっくりと入っている。

- (16) *スキムミルクの中には乳糖が少しずつ/ゆっくりと入っている。

また、タ形をとる「入る」では、「-単一事象」自動詞と解釈されるのは連体修飾語に限られる。

- (17) 台所のコンロにはカレーの入った鍋があり、…

- (18) Dさんが持ってきたMM (パナエオラス・トロピカリス) の入った段ボール箱は10箱くらいあった。

(17) (18) の連体修飾語としての「ハイッタ」は、言い切り文の述語に変えると、文の許容度が下がる。

⁵⁵前文脈によってわかるが、本例文に現れない。

(19) ??台所のコンロには鍋がある。その鍋にカレーが入った。

(20) ??Dさんが持ってきた段ボール箱は10箱くらいあった。その段ボール箱にMM（パナエオラス・トロピカリス）が入った。

(19) (20) の「ハイッタ」を「ハイッテイル」に変えると、許容度が上がる。

(21) 台所のコンロには鍋がある。その鍋にカレーが入っている。

(22) Dさんが持ってきた段ボール箱は10箱くらいあった。その段ボール箱にMM（パナエオラス・トロピカリス）が入っている。

連体修飾語ではなく、述語になる「一単一事象」自動詞は、テイル形を取って文に出てくるのが安定している。言い換えれば、言い切り文の述語として出てくる「ハイッタ」は、ほとんど「一単一事象」自動詞ではない。実際の用例を見てみよう。

(23) 飛行機の中で女性が二人話しているのが耳に入った。

(24) やっと九ヵ月に入った。

(25) 海水浴で耳に水が入った。

(26) 歩くたびに大粒の汗が眼に中に入った。

(23) - (26) で示したように、「ハイッタ」は、ほとんどが自然生起の事象を表す。つまり、ものが人為的な力を頼らずに、自然にどこかにはいるということを表す。このような事象は「+単一事象」である。

結果を表す「ハイッタ」の例も見られた。以下の用例である。ただ、非常にまれであった。

(27) ぜひ手に入れたかった本が、やっと手に入った。

以上から、「入る」は、「+単一事象」自動詞とも解釈され、「-単一事象」自動詞とも解釈されることがわかった。「-単一事象」自動詞としての「入る」が、ほとんどテイル形を取って文に出てくるのに対して、「+単一事象」自動詞としての「入る」は、テイル形が、タ形、ル形に比べれば、それほど数的に優勢ではない。

2.2. 「植わる」、「建つ」

「植わる」と「建つ」は、動力学からみれば、必ず誰かが「植える」や「建てる」という動作が前提となっているため、「単一事象」自動詞と解釈される可能性はなく、「-単一事象」自動詞としか解釈されない。

「植わる」「建つ」のコーパスでの実例の動向は、前述した「入る」と同様な傾向性を示す。

2.2.1. 「植わる」の実例の動向

2.2.1.1. 用例採取

検索形態：植わ

ヒット数：26

そのうち、連体修飾語の用法、「植わった+名詞」5件、「植わる+名詞」2件、「植わっている+名詞」4件がある。連体修飾語のテンス・アスペクト体制が言い切り文のテンス・アスペクト体制と比べ、特殊性があるため、本論文では除外と処理した。

残りの15例はすべてテイル形を取るものである。以下の通りで列挙する。

- (28) 両方の家とも、大きな木が植わっていて、素晴らしい家だったんですが、
- (29) むかしはこの街道ぞいにも柳の並木が植わってました。
- (30) 真ん中にこんもりとした築山があり、低く枝を伸ばした形のいい松が植わっていた。

- (31) 現状が良くわかりませんが、大きな木が植わっているとすると、それを切って根っこを起こすのが大変そうですね。
- (32) 外には昔から残っている梅の木が植わっています。
- (33) 次にいいと思うのは、外に梅の木や竹が植わっていて、梅の香りや竹の葉ずれの音がするという点です。
- (34) お宅の庭園にも、一本の桜が植わっていた。
- (35) さらに、その向こうには梅の木が植わっていました。
- (36) そして、この部屋の前に一株の梅が植わっていて—それが戸の前というからおそらく南側だろうと思うのですが
- (37) 庭にもそうとうひろく、流行りのガーデニングというのか、小さな樹木と達夫の知らない奇妙な植物が密集して植わっていた。
- (38) 南側だろうと思うのですが—、東側には竹が植わっている。
- (39) 塀のかわりに、いろんな種類の木が植わっていて、花壇には、赤や黄色の花がいっぱい咲いていた。
- (40) 若しこんな指が 福寿草のように小さな鉢に植わって居たら、どんなに可愛らしいだろう。
- (41) 井戸端にひよろ高いいちじくの木、厠の汲み取り口に南天が二、三本植わっているほか、目ぼしい草も樹木もなく、もっぱら洗濯物の干し場に使われている。
- (42) 築山には人の背丈より高い屏風石が見事に配置され、クロマツ、モチノキ、モッコク、カエデ、ウメなど、きれいに整枝された木々が植わっている。

2.2.1.2. 用例から抽出される特徴

- ア) (28) — (42) のいずれも、他動的な行為が前提となっていると解釈される。

- イ) 「植わる」は言い切り文の述語として文に現れる際、テイル形を取る。
「植わる」という例において、2.1の「入る」の調査より、テイル形の比率が高く、100%を占める。
- ウ) 文には、場所二格や場所を表す名詞・名詞句を伴う傾向が見られる。
場所二句、場所句とガ格の語順は、(63)を除いて、「～ニ」・場所句→「～ガ」語順である。存在文の語順と一致している。

2.2.2. 「建つ」の実例の動向

2.2.2.1. 用例採取

検索形態：建た、建ち、建って、建った、建つ、建ってい

ヒット数：582

582例の中、「建つ」の各アスペクト形式の個数は以下の通りである。

表3 「建つ」のアスペクト形式

形式	テイル	タ	その他	総数
用例数	498	30	54	582
比率	86%	5%	9%	100%

テイル形を取る用例数は86%を占め、傾向として、「入る」「植わる」の観察結果と差がない。以下では、「建っている」の例と「建った」の例をいくつか挙げる。

- (43) 駅の西口に駅前ビルが建ってます。
- (44) 庭の奥に三棟のはなれ屋が建っていた。
- (45) 湯煙りのたつ谷川の岩の上に、ちいさな板葺き小屋が建っていて、入り口にサンダルが脱ぎ捨てられてある。
- (46) この村の家はほとんど、古代の墓の上に建っているのだが、…
- (47) それが鉄クズの散らばる原っぱの中にポツンと建っていた。

(48) 建物自体が標高150mくらいの位置に建っており、天気が良ければ絶景を拝めると聞きました。

(49) 受け付け用のテントは十人の男の手で、ほんの十五分で建った。

(50) 徳川宗敬様のお筆で、公の御事蹟顕彰の碑が建った。

2.2.2.2. 用例から抽出される特徴

ア) (43) - (50) のいずれも、他動的な行為が前提となっていると解釈される。

イ) テイル形で出てくるのが多い。ル形、タ形の例も若干あるが、「タッテイル (マス)」「タッテイタ (マシタ)」の形で出てくるのが圧倒的に多い。テイル形で出てくる用例は、すべて結果状態を表すものであり、進行を表すものは観察されなかった。

ウ) ほとんどの用例は (43) の「駅の西口に」、(44) の「庭の奥に」などのような場所ニ格や場所を表す名詞句を伴っている。文全体の意味は「ある場所にあるものがある」という単なる存在文の意味に近い。ただ、「入る」と「植わる」とやや異なり、「建っている」文の語順には、「～ニ」・場所句→「～ガ」という語順がやはり優位ではあるが、「～ガ」→「～ニ」・場所句という語順をとる例も数少ないとは言えない。「～ニ」・場所句→「～ガ」語順が存在文の基本語順と一致しているが、(46) - (48) で示したように、それと違う語順もある。

2.3. まとめ

「入る」「建つ」「植わる」の実例の動向から、「一単一事象」自動詞はテイル形を取りやすいとわかる。これと表裏の関係にあるのは、「一単一事象」自動詞はル形やタ形、またそれ以外のアスペクト形式を取りにくいということを示唆する。

先行研究によると、テイル形は、「動作進行」と「結果残存」という二つの主な意味を持つとされる。「入る」「建つ」「植わる」のテイル形は、プロセス（進行）を表す副詞と共起できない。「結果残存」の意味しか持たない。また、進行の局面を持つ動詞はル形やタ形を取りやすい。ル形やタ形を取りにくいことは、「建つ」「植わる」類の動詞は進行の局面を持たないことを示唆する。

また、「－単一事象」自動詞のテイル形の文は、存在文に近い性質を持つという特徴が明らかになった。

3. 「＋単一事象」自動詞との違い

3.1. タ形とテイル形の比率

アスペクト形式の観点から見れば、「－単一事象」自動詞は、「＋単一事象」自動詞と違う振る舞いを示す。『現代日本語書き言葉均衡コーパス・少納言』で調べると、「－単一事象」自動詞は、言い切り文の述語として文に現れる際、ほとんどがテイル形を取る一方、「＋単一事象」（非能格動詞と非対格動詞）はテイル形を取ることに限らない。

表 4：タ形とテイル形の動詞別の出現頻度差

	タ形	テイル形	割合
建つ	30	498	6% : 94%
植わる	0	15	0% : 100%
	タ形	テイル形	割合
落ちる	2334	486	83% : 17%
倒れる	997	234	81% : 19%

数値の分布により、「建つ」「植わる」は「落ちる」「倒れる」と明らかに二つのタイプに分かれている。表 4 から、「－単一事象」自動詞はテイル形をとるのが普通のに対して、この種以外の自動詞は、テイル形をとることに限ら

ないことが明らかにわかる。それは、「建つ」「植わる」のような自動詞は「点」的なアスペクト特徴を持ち、そのままタ形をとり、変化を表しにくく、テイル形を取り、その点（終止点）の後の結果の局面を表すのが普通であるからであろう。それと反対に、「点」的な事象と限らない「+単一事象」自動詞は、それ自身の変化の局面を持ち、その変化は開始点から終止点までの移行局面も含んでいるため、タ形を取りやすいからであると考えられる。

3.2. プロセス副詞との共起

動詞がテイル形を取った後、プロセスを表す副詞「だんだん」、「少しずつ」、「ゆっくり」と共起できるか否かをテストする。「だんだん建ってくる」や「だんだん建ちつつある」などは、プロセスではなく、結果点に近づくという意味であるため、除外する。動詞のテイル形に限ってテストを行う。

『現代日本語書き言葉均衡コーパス・少納言』と yahoo grep を使って、「だんだん」、「少しずつ」、「ゆっくり」をそれぞれ、「動詞+ている」と共起する例を探す。結果は以下ようになる。「-単一事象」自動詞の「建つ、植わる」は「だんだん～ている」と共起する例が見つからなかった。

表 5 : 「だんだん～ている」

	少納言	Yahoo
建つ	0 件	≒0 件 ⁵⁶
植わる	0 件	≒0 件

「-単一事象」自動詞と違って、自立の単一事象（「+単一事象」）を表す自動詞は、「だんだん～ている」と共起する例が見つかった。

⁵⁶ Yahoo の用例を尽くして調べることができなかったが、ヒットした結果を人工で大量調べた限り、0 件検出。以下も同様。

(51) 成績がだんだん落ちていきます

http://benesse.jp/forum/zboca040?CONTENTS_ID=00010001&MESSAGE_ID=018181

(52) だんだん壊れてる。

<http://blogs.yahoo.co.jp/nanohanacyacyacya/48301566.html>

(53) 古い県営釜神町アパートの建っている崖が余震でだんだん崩れている。

http://bestof.at.webry.info/201106/article_21.html

(54) 木が目の前でだんだん倒れている…

「一単一事象」自動詞の「建つ、植わる」は「少しずつ～ている」と共起する例が見つからなかった。

表 6: 「少しずつ～ている」

	少納言	Yahoo
建つ	0 件	≒0 件
植わる	0 件	≒0 件

「一単一事象」自動詞と違い、自立の事象（「+単一事象」）を表す自動詞は、「少しずつ～ている」と共起する例が見つかった。

(55) 大人女性が少しずつ増えてます。

<http://baraboabo.blog.fc2.com/blog-entry-427.html>

(56) AKB が少しずつ壊れてるような気がする。

<http://twitter.comG/ENwa15>

(57) M13 後も相変わらずデルバー祭りと思いきや、少しずつ動いてる？

<http://endlessdream.diarynote.jp/201201170109371334/>

「－単一事象」自動詞の「建つ、植わる」は「ゆっくり（と）～ている」と共起する例が見つからなかった。

表7:「ゆっくり（と）～ている」

	少納言	Yahoo
建つ	0件	≒0件
植わる	0件	≒0件

「－単一事象」自動詞と違い、自立の事象（「＋単一事象」）を表す自動詞は、「ゆっくり（と）～ている」と共起する例が見つかった。

(58) みんな～フェイスが ゆっくり倒れているよ～

http://www.pixiv.net/member_illust.php?mode=medium&illust_id

(59) ゆっくり落ちているだけとっていただければ…。

<http://www.pixiv.net>

プロセスを表す副詞と共起できないことも、「－単一事象」自動詞がアスペクト的なプロセス局面を持たないことを示唆する。

4. 終わりに

ル形やタ形を取りにくいこと自体が、「－単一事象」自動詞がプロセス局面を持たない、言い換えれば、「－単一事象」自動詞が動作事象の完結点に出てきた結果の局面しかもたないことを示唆する。また、プロセス副詞と共起しないため、「－単一事象」自動詞がテイル形を取っても、動作進行の意味が取れない。テイル形を取っても動作進行の意味が取れないことも、「－単一事象」自動詞がプロセスの局面を持たないことを示唆する。言い換えれば、「－単一事象」自動詞は動作事象の完結点に出てきた結果の局面しかもたない。

以上を用いて、第七章で提案した仮説を検証した。

第九章 終章

1. 本論文の結論

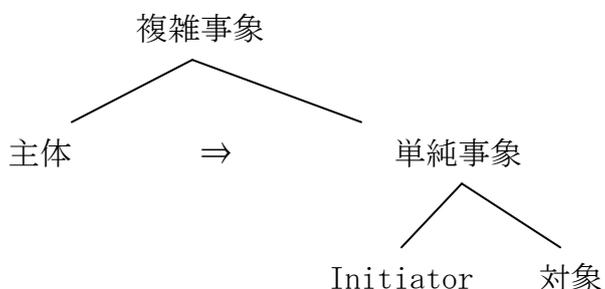
本論文は、日本語の自動詞文と他動詞文のそれぞれの全体像を整理し、自他交替のシステムを再構築することを目指している。まず、本論文にとって有意義な先行研究をまとめ、本論文の「事象構造分析」という立場から先行研究を再分析した。次に、先行研究が提示した causal chain という観点から、普遍的に受け入れられた自他交替における自動詞が表す下位事象と、他動詞が表す下位事象との間の[cause]の関係とはいったい何なのかということをも明確にした。具体的には、I. 力の伝達・移動が物理的に観察される否か。II. 力を受けるものに生じる変化は、自立 (internally caused) という解釈を持つか否かという二点を[cause]の関係の判断基準とした。そして、この基準を用いて、コーパスから取り出した他動詞 (無対他動詞 185 件 + 有対他動詞 155 件、合計 340 件) の用例 (1700 件) を一々チェックした。有対他動詞の実例の動向からみると、[+cause]の関係にある自他のペアもあれば、[-cause]の関係にある自他のペアもあるということがわかった。[+cause]の関係は多数の先行研究に扱われてきたので、本論文はほとんど先行研究で扱われていない[-cause]の関係に焦点を当てて考察・分析することにした。

第四章と第五章で、[-cause]の関係の自他のペアを、他動詞を中心に考察・分析した。具体的には、第四章では、先行研究でいう「介在性の表現」という現象、第五章では、先行研究でいう「状態変化主体の他動詞文」という現象を事象構造分析というアプローチで再分析を行った。

第六章で、事象構造分析という方法で、以上の二つの現象を統一的に説明した。両現象は、<意志性><働きかけ性>などの素性において異なっているにもかかわらず、事象構造の観点から改めて考えると、両者の間で共通点が見られる。つまり、両者はともに複雑事象を表す。その複雑事象に、通常

の他動詞が表す単純事象が含まれている。単純事象の上に、さらに別の主体が加わっている。そのシステムを図で示すと、以下の通りになる。

(1) 複雑事象を表す他動詞の意味的構造



両者のただの違いは、主体と単純事象の間の具体的な関係（図1の矢印(⇒)が表す部分）というところにある。大きく捉えれば、両者は同じシステムに収められる。そのシステムを踏まえた上で、事象構造分析と素性分析を合わせて、他動詞の意味的構造の全体像を構築し、さらなる大きなシステムを立てた。そのシステムを表で示すと、以下の通りになる。

表 1

下位事象の 個数		自他対応	行為事象			変化事象	動詞
			責任的 関与性	意志 性	働きか け性	変化性	
1	A1	○	○	○	×	×	見る
	A2	×	○	○	?	×	待つ、読む
2	A	○	○	○	○	○	割る
	B	○	○	○	×	○	明かす
	C	○	○	×	○	○	落とす
	D	×	○	×	×	○	失う

3	A	○	○	○	△	○	切る(介)
	B	○	○	×	×	○	焼く(状)

そして、この全体像のシステムを自動詞に当てはめてみた。自動詞も事象構造に基づいて、以下のように分類することができる。

表 2

下位事象の 個数	自他 対応	行為事象			変件事象		動詞	
		責任的 関与性	意志 性	働きか け性	変化 性	自立 変化		
1	A1	×	○	○	×	×	×	歩く
	A2	×	×	×	×	×	×	降る
	B1	○	×	×	×	○	○	落ちる、倒れる、 割れる
	B2	×	×	×	×	○	○	生える
	C	○	○	○	×	○	○	立つ
2	A	○	×	×	×	○	△	煮える
	B	○	×	×	×	○	×	建つ・植わる

そして、続きの第七章で、自動詞のシステムの中の、[-cause]の関係を中心に考察・分析した。普通の自動詞は行為か(自立的な)変化の意味を表す。この場合、自動詞は「+単一事象」自動詞である。このような「+単一事象」自動詞は、他動詞と自他対応をなすなら、他動詞と[+cause]の関係をなす。一方で、日本語には、このような自動詞以外に、別の種類の自動詞が存在する。それは、「-単一事象」自動詞とまとめる。「-単一事象」自動詞は、背景に、外在的な動作主の行為が前提となっており、動作主から発した働きか

けの力が潜んでいる。この種類の自動詞は、アスペクト的に、行為の完結点に生じた結果を表し、「点」的に捉えられるため、持続性を持たないという特徴があると分析している。そのため、「－単一事象」自動詞は、その事象構造と語彙概念構造において、他動詞と時間的な前後関係にあり、[cause] の関係をなさないという仮説を立てた。

(2) 自動詞の LCS

a. 「－単一事象」自動詞：[x ACT ON y]+[y BECOME [yBE AT -z]]

↓

[y BECOME [yBE AT -z]]

b. 「＋単一事象」自動詞：[x ACT ON y]CAUSE [y BECOME [yBE AT -z]]

↓

[y BECOME [yBE AT -z]]

「＋単一事象」自動詞の語彙概念構造は、「CAUSE」という関数で結びついて、動作事象と結果事象は因果関係にある。そこから派生された自動詞は、自立的な変化事象を表す自動詞である。英語の自動詞と日本語の一部の自動詞はそれにあたる。一方、「－単一事象」自動詞の語彙概念構造は、[+]という記号で表され、動作事象と結果事象は時間的な前後関係にある。そこから派生された自動詞は、他動詞の完結点で、対象に生じた結果を表す。「点」的な事象である。

そして、本論文は続きの第八章でテイル形に焦点を当てて、自立的な「＋単一事象」自動詞と結果的な「－単一事象」自動詞のそれぞれの傾向性を、コーパスで調べた。「落ちる」「倒れる」をはじめ、自立的な「＋単一事象」自動詞は、タ形をよく取り、テイル形はあまり取らない傾向を示す。それに対して、「建つ」「植わる」をはじめ、「－単一事象」自動詞は、テイル形を取る傾向を示す。また、「＋単一事象」自動詞はテイル形を取ると、プロセス副詞と共起できるのに対して、「－単一事象」自動詞はテイル形を取っても、プ

プロセス副詞と共起できない。つまり、「一単一事象」自動詞はプロセス局面をかけている。これらの事実を用いて、第七章で提案した仮説を検証した。

日本語の事象と自他動詞を全般的にまとめてみると、以下の通りになる。

事象一つ

変化事象ないし行為事象

変化事象は自動詞（非対格動詞）

行為事象は対象に向かうなら他動詞（「待つ」のような他動詞）、対象に向かわないなら自動詞（非能格動詞）

事象二つ

行為事象と変化事象、責任的関与事象と変化事象、行為事象と結果事象

行為事象と変化事象の両方をプロファイルするなら他動詞（「割る」のような典型的な対格他動詞）

変化に責任的関与すれば、変化を直接的にもたらさなくてもよい。言い換えれば、日本語の他動性は<意志性>ではなく、<責任的関与性>に依存する。また、<意志性>と<働きかけ性>は互いに依存しない。責任的関与すれば、<意志性>がなくても他動性は成り立つ（「思わず皿を落とした」）。また、責任的関与すれば、<働きかけ性>がなくても他動性は成り立つ（「夜を明かす」）。

強制的に行為事象の結果を切り離して、結果にプロファイルするなら自動詞（「建つ、植わる」のような自動詞）

事象三つ

変化事象、変化を引き起こす事象、変化に責任的関与する事象

変化の実際の引き起こし手は責任を取らない

変化に責任的関与者は他動詞文の主体となる（「介在性の表現」「状態変化主体の他動詞文」）

一方、英語の事象と自他動詞を全般的にまとめると、以下の通りになる。

事象一つ

変化事象ないし行為事象

変化事象は自動詞（非対格動詞）

行為事象は対象に向かうなら他動詞（readのような他動詞）、対象に向かわないなら自動詞（非能格動詞）

事象二つ

行為事象と変化事象

行為事象と変化事象の両方をプロファイルするのは他動詞（breakのような他動詞）

下位事象としての変化事象は、上記の単一事象の変化事象と重なる

日本語と英語を対照してみると、以下のようになる。

表 3

	事象 の個 数	動詞のタイプ	日本語	英語
1	1	非対格動詞	○ 割れる、落ち る…	○ break, sink…
2		<-変化性><-意志性>自動詞	○ 雨が降る	○ rains (It rains)
3		非能格動詞	○	○

			歩く、走る…	walk, run…
4		<+意志性><+変化性>自動詞	○ 立つ	×
5		対象の変化を引き起こさない他動詞 I	○ 見る	×
6		対象の変化を引き起こさない他動詞 II	○ 待つ、読む	○ read…
7	2	<+意志性><+働きかけ性>対格動詞	○ 割る…	○ break…
8		<-意志性><+働きかけ性>対格動詞	○ 思わず皿を落とした	○ shoot (I shot him)
9		<+意志性><-働きかけ性>対格動詞	○ 夜を明かす	×
10		<-意志性><-働きかけ性>対格動詞	○ 失う	○ lose
11		<-自立変化性>自動詞	○ 建つ	×
12		<△自立変化性>自動詞	○ 煮える	×
13	3	介在性の表現	○ 切る	×
14		状態変化主体の他動詞文	○ 焼く	×

2. 今後の課題

本論文は、[-cause]の関係にある自他動詞のペアを、他動詞を中心として分析した際、他動詞を項構造 (argument structure)、つまり、事象の参与者はいくつがあるのかに注目して、「介在性の表現」と「状態変化主体の他動詞文」を統一的に説明した。そして、[-cause]の関係にある自他動詞のペアを、自動詞を中心として分析した際、アスペクト構造 (aspect structure) に注目して、「一単一事象」自動詞について、行為の結果を表すと特徴づけた。項構造に偏った他動詞とアスペクト構造に偏った自動詞をさらに統一的に説明することを今後の課題にしたい。

また、複雑事象を表す他動詞を分析する際、「夜を明かす」や「時間を過ごす」のようなヲ格を取る他動詞は、経路ヲ格を取る動詞と共通点があると思われるが、本論文はそれについて深入りしなかった。それを今後の課題にしたい。

さらに、他動詞は、結果と様態を同時に指定することができるのかということ、佐藤 (1994b, 1997)、Rappaport Hovav & Levin (2010)、Goldberg (2010) がそれぞれの分析と主張を提示している。佐藤 (1994b, 1997) と Goldberg (2010) は、他動詞が結果と様態の両方を同時に指定できると主張し、Rappaport Hovav & Levin (2010) は反対の意見をもつ。本論文は結果と様態の関係まで調査・分析しなかった。しかし、結果と様態の指定は、本論文で論じた自他の問題と大きく関連しているため、今後の課題にしたい。

実例の動向からみれば、「一単一事象」自動詞はよくテイル形を伴って文に現れる。「一単一事象」自動詞のテイル形文は、存在文に類似していることを明らかにしたが、存在文との異同やその原理的説明を今後の課題にしたい。

参考文献

- 天野みどり (1987) 「状態変化主体の他動詞文」『国語学』151 (須賀一好・早津恵美子編『動詞の自他』(1995 ひつじ書房) に所収 pp. 151-165.)
- 天野みどり (1991) 「経験的間接関与表現—構文間の意味的密接性の違い—」仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』 pp. 191-210.
- 天野みどり (2002) 『文の理解と意味の創造』笠間書院
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論—』大修館書店
- 石田尊 (1999) 「行為者解釈を持たない主語について」『筑波日本語研究』第四号 pp. 16-41. 筑波大学 文芸・言語研究科 日本語研究室
- 井上和子 (1976a) 『変形文法と日本語・上』大修館書店
- 井上和子 (1976b) 『変形文法と日本語・下』大修館書店
- 井本亮 (2003) 『現代日本語における副詞的修飾関係の研究』筑波大学 博士 (言語学) 学位請求論文
- 井本亮 (2009) 「日本語結果構文における限定と強制」小野尚之編『結果構文のタイポロジー』 pp. 267-314. ひつじ書房
- 井本亮 (2012) 「日本語の「結果構文」の位置づけと連用修飾文：形式と意味における「ずれ」」『結果表現をめぐって』日本英文学会第84回大会 発表要旨
- 岩田彩志 (2009) 「2種類の結果表現と構文理論」小野尚之編『結果構文のタイポロジー』 pp. 171-216. ひつじ書房
- 岩田彩志 (2012) 「結果表現において動詞に後続する名詞句が果たす役割」『結果表現をめぐって』日本英文学会第84回大会 発表要旨

- ウェスリー・ヤコブセン (2012) 「日本語における自他交替の意味論的根拠に関する再考察」 国立国語研究所主催 国際シンポジウム「日本語の自他と項交替」 発表要旨
- 大槻文彦 (1897) 『広日本文典』 (日本文典別記) (勉誠社1980版を使用)
- 奥田靖雄 (1977) 「アスペクトの研究をめぐって—金田一的段階—」 『国語国文』 8 pp. 51-63. 宮城教育大学
- 奥田靖雄 (1978a) 「アスペクトの研究をめぐって(上)」 教育科学研究会国語部会編 『教育国語』 53 pp. 33-44. 麥書房
- 奥田靖雄 (1978b) 「アスペクトの研究をめぐって(下)」 教育科学研究会国語部会編 『教育国語』 54 pp. 14-27. 麥書房
- 奥田靖雄 (1988a) 「時間の表現 (1)」 教育科学研究会国語部会編 『教育国語』 94 pp. 2-17. 麥書房
- 奥田靖雄 (1988b) 「時間の表現 (2)」 教育科学研究会国語部会編 『教育国語』 95 pp. 28-41. 麥書房
- 奥田靖雄 (1994a) 「講座・教師のための文法 動詞の終止形 (その1)」 教育科学研究会国語部会編 『教育国語』 2-9 pp. 44-53. むぎ書房
- 奥田靖雄 (1994b) 「講座・教師のための文法 動詞の終止形 (その2)」 教育科学研究会国語部会編 『教育国語』 2-12 pp. 27-42. むぎ書房
- 奥田靖雄 (1994c) 「講座・教師のための文法 動詞の終止形 (その3)」 教育科学研究会国語部会編 『教育国語』 2-13 pp. 34-40. むぎ書房
- 奥津敬一郎 (1967) 「自動化・他動化および両極化転形—自・他動詞の対応—」 『国語学』 70 (須賀一好・早津恵美子編 『動詞の自他』 (1995 ひとつじ書房) に所収 pp. 57-81.)
- 奥津敬一郎 (1996a) 「連体即連用? 第3回数量詞移動 その一」 『日本語学』 15-1 pp. 112-119.
- 奥津敬一郎 (1996b) 「連体即連用? 第3回数量詞移動 その二」 『日本語学』 15-2 pp. 95-105.
- 小野尚之 (2009) 「結果構文のタイポロジー序説」 小野尚之編 『結果構文のタイポロジー』 pp. 1-42. ひとつじ書房

- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論—言語と認知の接点』 くろしお出版
- 影山太郎 (2000) 「自他交替の意味的メカニズム」 丸田忠雄・須賀一好編『日英語の自他の交替』 pp. 33-70. ひつじ書房
- 影山太郎 (2001) 『日英対照 動詞の意味と構文』 大修館書店
- 影山太郎 (2001) 「結果構文」 影山太郎(編) 『日英対照動詞の意味と構文』 pp. 154-181. 大修館書店
- 影山太郎 (2009) 『日英対照 形容詞・副詞の意味と構文』 大修館書店
- 影山太郎 (2012) 「複合動詞の形態構造と自他交替」 国立国語研究所主催 国際シンポジウム「日本語の自他と項交替」 発表要旨
- 川野靖子 (2003) 『現代日本語における格体制の交替現象に関する研究』 筑波大学 博士(言語学) 学位請求論文
- 岸本秀樹 (2000) 「非対格性再考」 丸田忠雄・須賀一好編『日英語の自他の交替』 pp. 71-110. ひつじ書房
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』 ひつじ書房
- 工藤真由美 (1996) 「否定のアスペクト・テンス体系とディスコース」 言語学研究会編『ことばの科学』 7 pp. 81-136. むぎ書房
- 児玉美智子 (1989) 「状態変化主体他動詞文の成立と構造」『甲子園学園短期大学紀要』 9 pp. 67-80.
- 佐久間鼎 (1936, 1951, 1966, 1983) 『現代日本語の表現と語法』 厚生閣 (『現代日本語の表現と語法』 増補版 1983 くろしお出版を使用)
- 佐藤琢三 (1994a) 「動詞の自他対応と様態指定」『筑波応用言語学研究』 1号 pp. 21-32.
- 佐藤琢三 (1994b) 「他動詞表現と介在性」『日本語教育』 84 pp. 53-64.
- 佐藤琢三 (1997) 「「患者が注射する」—動詞の意味的焦点と事態の結果のコントロール」『言語』 26-2 pp. 50-55.
- 佐藤琢三 (2005) 『自動詞文と他動詞文の意味論』 笠間書院.
- 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析』 大修館書店

- 申亜敏・望月圭子 (2009) 「中国語の結果複合動詞—日本語の結果複合動詞・英語の結果構文との比較から」 小野尚之編『結果構文のタイポロジー』 pp. 407-450. ひつじ書房
- 鈴木容子 (2007) 「日本語の他動詞文におけるデ格と主語の意味役割」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部』 55 pp. 241-250.
- 田川拓海 (2002) 『日本語における「に」の多義性—起点的意味役割を中心に—』 筑波大学 日本語・日本文化学類 卒業論文
- 田川拓海 (2004) 『現代日本語における動作主の意味論と統語論』 筑波大学 博士課程修士論文
- 角田太作 (2007) 「他動性の研究の概略」 角田三枝、佐々木冠、塩谷亨編『他動性の通言語的研究』 pp. 3-11. くろしお出版
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』 秀英出版
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 II』 秀英出版
- 中右実 (1991) 「中間態と自発態」『日本語学』 10-2 pp. 52-64. 明治書院
- 西尾寅弥 (1954) 「動詞の派生について—自他对立の型による—」『国語学』 17 (須賀一好・早津恵美子編『動詞の自他』 (1995 ひつじ書房) に所収 pp. 41-56.)
- 仁田義雄 (1993) 「日本語の格を求めて」 仁田義雄編『日本語の格をめぐる』 pp. 1-37. くろしお出版
- 仁田義雄・村木新次郎・柴谷方良・矢澤真人 (2000) 『日本語の文法 1 文の骨格』 岩波書店
- 仁田義雄 (2002) 『新日本語文法選書3 副詞的表現の諸相』 くろしお出版
- 長谷川信子 (2002) 「非動作主主語他動詞文の分析: Little v の素性について」『「東西言語文化の類型論」特別プロジェクト研究成果報告書 V』 pp. 801-816.
- 早津恵美子 (1989) 「有对他動詞と無对他動詞の違いについて—意味的な特徴を中心に—」『言語研究』 95 (須賀一好・早津恵美子編『動詞の自他』 (1995 ひつじ書房) に所収 pp. 179-197.)

- 福嶋健伸(2003)『中世末期日本語のテンス・アスペクト』筑波大学 博士(言語学) 学位請求論文
- 松下大三郎(1923-1924)「動詞の自他被使動」『国学院雑誌』29-12(須賀一好・早津恵美子編『動詞の自他』(1995 ひつじ書房)に所収 pp. 13-40.)
- 宮腰幸一(2009)「日英語の周边的結果構文」小野尚之編『結果構文のタイポロジー』 pp. 217-266. ひつじ書房
- 宮腰幸一(2008)「テイル文の意味的分析：動詞分類と事象構造の精密化へ向けて」『論叢現代語・現代文化』1号 pp. 1-98. 筑波大学人文社会科学研究所 現代語・現代文化専攻
- 宮腰幸一(2012)「「結果句」の述語性と副詞性について：結果表現の定義と分類」『結果表現をめぐって』日本英文学会第84回大会 発表要旨
- 宮島達夫(1972)『動詞の意味・用法の記述的研究』 国立国語研究所 秀英出版
- 本居春庭(1828)『詞の通路』(須賀一好・早津恵美子編『動詞の自他』(1995 ひつじ書房)に所収 pp. 7-12.)
- 矢澤真人(1983)「状態修飾成分の整理—被修飾成分との呼応及び出現位置からの考察—」『日本語と日本文学』3 pp. 30-39. 筑波大学国語国文学会.
- 山田敏弘(2007)「日本語における自他の有対性と他動性 —岐阜県方言の自動詞「おぼわる」「鍛わる」「のさる」「どかる」を通して—」角田三枝、佐々木冠、塩谷亨編『他動性の通言語的研究』 pp. 271-282. くろしお出版
- 楊ソルラン(2010)『自他両用の漢語動詞に関する研究』筑波大学 博士(言語学) 学位請求論文
- 劉劍(2006)「汉日非宾格动词对比刍议」『日語研究』第4輯 pp. 55-73. 商務印書館

- 劉劍 (2010a) 「日本語の中間態再考」『筑波日本語研究』15号 pp. 56-69. 筑波大学人文社会科学研究科 日本語学研究室
- 劉劍 (2010b) 「意図性を背景に持つ日本語の非対格動詞について」『中日の言語研究と言語教育シンポジウム 予稿集』 pp. 83-91. 北京師範大学・筑波大学共同主催
- 劉劍 (2011a) 「从结果构式看“变化”」『現代中国語研究』13期 pp. 102-110. 現代中国語研究編集委員会 朝日出版
- 劉劍 (2011b) 「否定からみる「ている」の意味」『筑波日本語研究』16号 pp. 40-50. 筑波大学人文社会科学研究科 日本語学研究室
- 劉劍 (2012a) 「Causal Chainの観点からみた非典型的な他動詞文」『筑波日本語研究』17号 pp. 30-43. 筑波大学人文社会科学研究科 日本語学研究室
- 劉劍 (2012b) 「複雑事象を表す日本語の他動詞」『香港第九回国際日本語教育・日本研究シンポジウム 予稿集』 pp. 669-673. 香港日本語教育研究会・香港城市大学共同主催
- Adele E. Goldberg. 2010. Verbs, Constructions and Semantic Frames. M. Rappaport Hovav, E. Doron and I. Sichel (eds.). *Syntax, Lexical Semantics and Event Structure*. Oxford University Press, 39-58.
- Baker, Mark C. 1988. *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*. The University of Chicago Press.
- Baker, Mark C. 1997. “Thematic Roles and Syntactic Structure.” *Elements of Grammar*. Liliane Haegeman (ed.) Kluwer Academic Publishers, 73-137.
- Dowty, David. 1991. “Thematic proto-roles and argument selection.” *Language* 67, 547-619.
- Fillmore, 1977. “The Case for Case Reopened” . P. Cole (ed.) *In Syntax and Semantics 8: Grammatical Relations* New York: Academic Press, 59-81.
- Hopper, Paul J. ; Sandra A, Thompson. 1980. Transitivity in Grammar and Discourse. *Language* 56, 251-299.

- Jackendoff, Ray. 1990. *Semantic Structures*. MIT Press.
- Jacobsen, Wesley M. 1991. *The Transitive Structure of events in Japanese*. Tokyo:Kuroshio Publishers.
- Levin, Beth; Malka Rappaport, Hovav. 1988. What to do with θ -Roles. In W. Wilkins, (ed.) *Syntax and Semantics 21: Thematic Relations*. New York: Academic Press, 7–36
- Levin, Beth; Malka Rappaport, Hovav. 1995. *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*, Cambridge, MA, MIT Press.
- Levin, Beth; Malka Rappaport, Hovav. 2005. *Argument Realization*, Research Surveys in Linguistics Series, Cambridge University Press.
- Matsumoto, Yo. 2000. Causative alternation in English and Japanese: A closer look. Review article on Taro Kageyama's *Dooshi Imiron: Gengo to Ninchi no Setten*. *English Linguistics* 17, 160–192.
- Perlmutter, David M. 1978. “Impersonal passives and the unaccusative hypothesis.” *Berkeley Linguistics Society* 4, 157–189.
- Pinker, Steven. 1989. *Learnability and Cognition: the acquisition of argument structure*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Rappaport Hovav, Malka; Beth, Levin. 2010. “Reflections on Manner/Result Complementarity”, in E. Doron, M. Rappaport Hovav, and I. Sichel, (eds). *Syntax, Lexical Semantics, and Event Structure*, Oxford University Press, 21–38.
- Ritter, Elizabeth and Sara Rosen. 1993a. “Deriving causation.” *Natural Language and Linguistic Theory* 11, 519–555.
- Ritter, Elizabeth and Sara, Rosen. 1993b. “The independence of external argument.” *WCCFL* 12, 591–605.
- Ronald, Langacker. 1990. *Concept, Image, Symbol*. Mouton de Gruyter Berlin.
- Ronald, Langacker. 1999. *Grammar and Conceptualization*. Mouton de Gruyter Berlin.

- Talmy, Leonard. 1976. Semantic causative types. Masayoshi Shibatani, (ed.), *Syntax and Semantics 6: The Grammar of Causative Constructions*. Academic Press, 43-116.
- Talmy, Leonard. 1988. Force dynamics in language and thought, *Cognitive Science* 12, 49-100.
- Vendler, Zeno. 1967. *Linguistic in Philosophy*. Cornell University Press.
- Washio, Ryuichi. 1993. “When causatives mean passive: a cross-linguistic perspective.” *Journal of East Asian Linguistics* Volum2-1, 45-90.
- Washio, Ryuichi. 1997. Resultatives, compositionality and language variation. *Journal of East Asian Linguistics* Volum6-1, 1-49.
- William, Croft. 1990. *Typology and Universals*. Cambridge Textbooks in Linguistics. Cambridge: Cambridge University Press.
- William, Croft. 1991. *Syntactic Categories and Grammatical Relations: The Cognitive Organization of Information*. Chicago: University of Chicago Press.
- William, Croft. 2012. *Verbs: Aspect and Causal Structure*, Oxford University Press.

【コーパスデータ】

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス・少納言』

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス・中納言』

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス・NINJAL LWP for BCCWJ』

各章と既発表論文との関係

第一章 序論

新規執筆

第二章 先行研究

新規執筆

第三章 Causal Relationship

劉劍 (2012a) 「Causal Chainの観点からみた非典型的な他動詞文」『筑波日本語研究』17号 pp30-43. 筑波大学人文社会科学研究科 日本語学研究室

第四章 他動詞の面からみた[-cause]の関係 I

劉劍 (2012a) 「Causal Chainの観点からみた非典型的な他動詞文」『筑波日本語研究』17号 pp30-43. 筑波大学人文社会科学研究科 日本語学研究室

劉劍 (2012b) 「複雑事象を表す日本語の他動詞」『香港第九回国際日本語教育・日本研究シンポジウム 予稿集』 pp669-673. 香港日本語教育研究会・香港城市大学共同主催

第五章 他動詞の面からみた[-cause]の関係Ⅱ

劉劍 (2012a) 「Causal Chainの観点からみた非典型的な他動詞文」『筑波日本語研究』17号 pp30-43. 筑波大学人文社会科学研究科 日本語学研究室

劉劍 (2012b) 「複雑事象を表す日本語の他動詞」『香港第九回国際日本語教育・日本研究シンポジウム 予稿集』 pp669-673. 香港日本語教育研究会・香港城市大学共同主催

第六章 他動詞の意味的構造の全体像

新規執筆

第七章 自動詞の面からみた[-cause]の関係

劉劍 (2010a) 「日本語の中間態再考」『筑波日本語研究』15号 pp56-69. 筑波大学人文社会科学研究科 日本語学研究室

劉劍 (2010b) 「意図性を背景に持つ日本語の非対格動詞について」『中日の言語研究と言語教育シンポジウム 予稿集』 pp83-91. 北京師範大学・筑波大学共同主催

劉劍 (2011a) 「从结果构式看“变化”」『現代中国語研究』13期 pp102-110. 現代中国語研究編集委員会 朝日出版

第八章 アスペクト形式からの仮説検証

劉剣(2011b)「否定からみる「ている」の意味」『筑波日本語研究』16号 pp40-50.

筑波大学人文社会科学研究所 日本語学研究室

第九章 終章

新規執筆

※なお、本論文の執筆に際して、それぞれの論文の内容に加筆・修正を加えた。